

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語と中国語における抽象名詞の構文論的対照研究

何 秋林

2020 年度

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語と中国語における抽象名詞の構文論的対照研究

何 秋林

2020 年度

# 目次

第1章 序論 .....	1
1.1 本論文の背景と目的 .....	1
1.2 本論文で扱う構文 .....	4
1.3 本論文の構成 .....	6
第2章 先行研究と本論文の立場 .....	9
2.1 抽象名詞についての先行研究の概観 .....	9
2.2 本論文の立場 .....	14
第3章 日本語と中国語の人魚構文 .....	22
3.1 はじめに .....	22
3.2 先行研究とその問題点 .....	24
3.3 日本語の人魚構文の統語的特徴 .....	27
3.4 疑似人魚構文の統語的特徴 .....	30
3.4.1 “Z” 中の名詞の主題化 .....	30
3.4.2 “XZ” の独立性 .....	33
3.4.3 “Z 的 Y” の関係節化 .....	35
3.4.4 “Z 的 Y” の前の数量詞の生起 .....	37
3.4.5 まとめ .....	39
3.5 枠構造と疑似人魚構文 .....	40
3.6 おわりに .....	43
第4章 日本語と中国語の連体修飾構造を含む属性叙述構文 .....	46
4.1 はじめに .....	46
4.2 先行研究とその問題点 .....	51
4.2.1 日本語の両構文に関する先行研究 .....	51
4.2.2 中国語の両構文に関する先行研究 .....	53
4.3 「X は [Z+Y] をしている」と「X は [Z+Y] だ」の特徴 .....	56

4.3.1 「Xは[Z+Y]をしている」の特徴.....	56
4.3.1.1 名詞Yの特徴.....	57
4.3.1.2 叙述の根拠の有無.....	59
4.3.1.3 否定文での使用可否.....	61
4.3.2 「Xは[Z+Y]だ」の特徴.....	62
4.3.3 まとめ.....	67
4.4 “X有着Z的Y”と“X是Z的Y”の特徴.....	68
4.4.1 “X有着Z的Y”と“X是Z的Y”の談話機能.....	70
4.4.1.1 “X有着Z的Y”と“X是Z的Y”の修飾語の特徴.....	70
4.4.1.2 “X有着Z的Y”の談話機能.....	72
4.4.1.3 “X是Z的Y”の談話機能.....	77
4.4.2 まとめ.....	89
4.5 おわりに.....	90
第5章 日本語の「ある」構文と中国語の“有”連動文.....	92
5.1 はじめに.....	92
5.2 先行研究とその問題点.....	95
5.2.1 中国語の“有+Y+Z”連動文に関する先行研究.....	95
5.2.2 日本語の「[Z+Y]がある」に関する先行研究.....	97
5.3 “有+Y”の文法機能および“有+Y+Z”連動文の特徴.....	99
5.3.1 “有+Y”と助動詞の意味分類.....	99
5.3.1.1 “有+Y”の意味分類.....	99
5.3.1.2 助動詞の意味分類.....	99
5.3.1.3 比較の対象とする“有+Y”と助動詞.....	100
5.3.2 “有+Y”と助動詞の文法的特徴.....	101
5.3.2.1 “有+Y”と助動詞の連用順序.....	101
5.3.2.2 “有+Y”と助動詞の後続成分.....	104
5.3.2.3 完了アスペクト助詞“了”との共起.....	106
5.3.2.4 まとめ.....	109
5.3.3 “有+Y+Z”連動文の特徴.....	109

5.3.4	まとめ	116
5.4	日本語の「[Z+Y]がある」の文法的特徴	118
5.4.1	日本語のモダリティと「Yがある」の分類	118
5.4.1.1	日本語のモダリティの分類	118
5.4.1.2	「Yがある」の意味分類	120
5.4.1.3	比較の対象とする「Yがある」とモダリティ形式	121
5.4.2	「Yがある」とモダリティ形式の文法的特徴	122
5.4.2.1	「意志」類	122
5.4.2.2	「可能性」類	123
5.4.2.3	「必要性」類	126
5.4.2.4	「証拠」類	128
5.4.3	本節のまとめ	130
5.5	おわりに	130
第6章	構文間の関係	132
6.1	日本語の各構文間の関係	132
6.2	中国語の各構文間の関係	139
第7章	結論	145
7.1	本論文のまとめ	145
7.2	本研究の意義	148
7.3	今後の課題	151
	参考文献	153
	付録	159
	各章と既発表論文および口頭発表との関係	164

# 凡例

本論文で使用する用例の出典および用例に付す記号の意味、グロスで使用する略記について、予め断っておく。

- 本論文で使用する用例の出典

本論文で使用する用例は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)、「筑波ウェブコーパス」(TWC)、「北京大学中国語学研究中心語料庫」(CCLコーパス)、北京語言大学BCC語料庫 (BCCコーパス)、媒体語言語料庫 (MLCコーパス)、先行研究からの引用および自作例に拠る。出典を示していないものは自作例である。作例は、日本語と中国語のいずれについても、7人の母語話者によるネイティブチェックを受けている。調査方法および日本語・中国語の母語話者に関する詳しい情報は付録に示すことにする。

- 本論文で使用する記号

? …非文ではないが、文法的に不自然であることを示す。より不自然な場合には、「??」とする。

\* …文法的に容認されない（非文である）ことを示す。

# …文法的に容認されるが、文脈に相応しくないことを示す。

その他、必要に応じて強調したい箇所の下線や波線を付すことがある。

- 本論文のグロスで使用する略記一覧

AUX : 助動詞 (auxiliary verbs)

CL : 量詞 (classifier)

COP : コピュラ (copula)

NEG : 否定辞 (negative marker)

PERF : 完了アスペクト (perfective aspect)

DURA : 持続アスペクト (durative aspect)

EXPE : 経験アスペクト (experiential aspect)

SFP : 文末助詞 (sentence-final particle)

# 第 1 章 序論

第 1 章では本論文の背景と目的を示し、考察対象について説明する。まず 1.1 節で本論文の背景および抽象名詞を考察することでどのようなことを明らかにしようとしているのか、その目的を述べる。1.2 節では、本論文が分析対象として取り上げる日本語と中国語の構文について説明する。最後に 1.3 節では本論文全体の構成と流れについて説明する。

## 1.1 本論文の背景と目的

「抽象名詞」は名詞の下位区分の 1 つとして、具体的な指示物を持つ「具体名詞」に対立する、抽象的な概念を表す名詞として捉えられることが多い。しかし、抽象名詞の特性は単に意味の抽象性にとどまらない。本来の名詞としての機能のほか、文法や談話などの面においても多彩な独特の機能を持つ。例えば、McCarthy (1991 : 75) では、‘issue (争点), problem (問題), assessment (査定)’ のような抽象名詞が「談話構成語」(discourse-organizing words) と呼ばれており、これらの抽象名詞は議論に構成と構造を与える働き、言い換えれば、筆者が選択した大きなテキスト・パターンを示し、談話の全体像を予測させる働きをしていると指摘されている。例えば、(1) を見てみよう。

(1) Each day as I walk to work, I see the ludicrous spectacle of hundreds of commuters sitting alone in four or five-seater cars and barely moving as fast as I can walk.

Our traffic crisis now presents us with the classic conservation dilemma — too many people making too much demand on inadequate resources.

There are four possible solutions: One, provide more resources, in this case

build more roads and car parks; two…three… four…

(McCarthy 1991 : 75)

(1) における ‘solution (解決)’ という抽象名詞は、何らかの「問題」に対置される内容を表すため、先行テキストに「問題」についての説明が必ずあることが予測される。実際に、先行テキストを探してみると、‘traffic crisis (交通危機)’、‘dilemma (ジレンマ)’ が「問題」として提示されていることが分かる。要するに、抽象名詞の ‘solution (解決)’ は「問題—解決」のテキストを構成する機能を持つということである。

また、抽象名詞そのものに注目すれば、個々の抽象名詞の性質によって、文法機能などの面において大きな違いがある。例えば、矢澤 (2014 : 2-3) では、抽象名詞の種類によって、下記のように抽象名詞主題文<sup>1</sup>の容認度に違いがあると指摘されている。

(2) 私の願いは、世界の平和だ／世界が平和であることだ。(矢澤 2014 : 2)

(3) ?私の祈りは、世界が平和になることだ。(矢澤 2014 : 3)

(4) ?この金属の性質は、熱で元に戻ることだ。(矢澤 2014 : 3)

(2) ~ (4) に示したように、「願い」と「祈り」「性質」はいずれも抽象名詞であるが、「願い」は抽象名詞主題文に用いられるのに対して、「祈り」「性質」は用いられにくい。

更に、日中対照の観点から見れば、同じく抽象名詞と言っても、言語によってはその内実が必ずしも同じではない。例えば、日本語の抽象名詞には、「こと・もの・ところ・わけ」などの文法化が進んだ形式名詞があるが、中国語にはそのような抽象名詞がほとんど存在しない。このような違いは両言語の文型にも影響を与えている。(5) のような独立した節に「名詞 だ」が助動詞のように下接する構造を持つ人魚構文は日本語では発達しているが、中国語では発達していない。

---

<sup>1</sup> 矢澤 (2014) は抽象名詞を主題とし、内容を述部で表す文を「抽象名詞主題文」と呼んでいる。



(5) 「節」 名詞 だ。 (角田 2011 : 53)

「太郎は今本を読んでいる」ところだ。

(6) \*太郎 是 正 在 看 书 的 时候。

太郎 COP まさに している 読書する 助詞 ところ

[太郎は今本を読んでいるところだ。]

要するに、抽象名詞は名詞の1つの下位類であるものの、意味や文法、談話などさまざまな面において具体名詞と異なる特徴を持っているため、名詞から取り出して個別に考察する価値があると考えられる。本論文は、日本語と中国語の抽象名詞を研究対象とする。抽象名詞の定義は研究者によってさまざまであるが、本論文では、『言語学大辞典』(第6巻, 1996 : 1131)に基づき、抽象名詞を下記のように定義する。

性質、状態、動作など非物質的な対象を指示する、包括的な抽象概念を表す語を「抽象名詞」と呼ぶ。

抽象名詞は具体名詞と異なる多様な機能を持つが、日本語と中国語ではこれまで十分な関心が寄せられてこなかった。2章で述べるように、どちらの言語においても、抽象名詞は、名詞研究または別の問題を扱う中で付随的に言及されることが多かった。また、分析手法から言えば、語彙論的観点から抽象名詞の意味を分析・記述するものが多く、構文論的観点から抽象名詞の性質を構文の成立条件や構文的意味と関連づけながら論じるものはあまり見られない。そこで、本論文は構文論的アプローチから、日本語と中国語の抽象名詞の働きと構文の相互作用を明らかにすることを目的とする。

ただし、上述のように抽象名詞は個々の語の性質、または意味タイプによって文法機能に大きな違いがあるため、個々の語やタイプごとに記述・分析する必要があると考えられる。本論文は抽象名詞を包括的に論じようとするものではなく、日本語と中国語のいくつかの特定の構文における抽象名詞の各タイプないし各成員の機能を考察するものである。抽象名詞の働きと構文の相互作用を明らかにするため、本論文では、具体的には以下の3つの問いを立てる。

- I. 抽象名詞の性質、特に抽象名詞のタイプごとに異なる固有の特性が、構文の構造や構文の意味にどのように影響するのか。
- II. 構文の意味や構文の構造が構文に入る抽象名詞の選択制限および抽象名詞と他の構成要素間の文法的・意味的關係にどのように影響するのか。
- III. 構造が異なる類義表現間にどのような意味の差異があるのか。また、対応する構造を持つと思われる日本語と中国語の複数の構文は構文機能や構文の成立条件にどのような違いがあるのか。

次節では、本論文で分析の対象となる構文について説明する。

## 1.2 本論文で扱う構文

抽象名詞の働きと構文の相互作用を明らかにするため、本論文は日本語と中国語のコピュラ「だ」、「是 shì」と、所有・存在動詞「ある」、「有 yǒu」が述語となるいくつかの構文を主な分析の対象とし考察を行う。具体的には、(7) のような人魚構文（「[X は Z] + Y だ」、「X 是 Z 的 Y」）、(8) のような人物の属性叙述文（「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」、「X 是 Z 的 Y」、「X 有着 Z 的 Y」）と、(9) に示す「ある」構文（「X は [Z+Y] がある」、「X 有 Y+Z」）を扱う。

- (7) a. 彼はほかの仕事を探してみる考えだ。  
 b. 他 是 再 找找看 其他 工作 的 想法。  
 彼 COP 改めて 探す みる ほかの 仕事 助詞 考え  
 [彼はほかの仕事を探してみる考えだ。]
- (8) a. 彼女はやさしい性格だ。  
 b. 彼女はやさしい性格をしている。  
 c. 她 是 那种 温柔的 性格。  
 彼女 COP そのような やさしい 助詞 性格  
 [彼女はやさしい性格だ。]

d. 她 有着 温柔的 性格。

彼女 ある-DURA やさしい 助詞 性格

〔彼女はやさしい性格をしている。〕

(9) a. 親には子供を育てる義務がある。

b. 父母 有 义务 抚养 孩子。

親 ある 義務 育てる 子供

〔親には子供を育てる義務がある。〕

これらはいずれも、抽象名詞の性質を解明するための重要な構文環境である。コンピュータと所有・存在動詞については、日本語でも中国語でもこれまでさまざまな観点から分析され、豊かな先行研究の蓄積がある。しかしながら、本論文で取り上げるいくつかの構文に関しては、抽象名詞の構文機能が専一的に論じられることはほとんどなく、一部にそういった先行研究はあるものの、それもやはり詳細について十分な議論が尽くされているとは言い難い所がある。例えば、(7a) と (8a)、(7b) と (8b) のコンピュータを含む文は、日本語と中国語どちらの研究でもそれぞれを同一の文として扱っていることが多いが、本論文では構文に入る抽象名詞の性質によって、それぞれが構造と意味の異なる構文に分けられると主張する。そして、(7) (8) の文は従来の日中コンピュータ文の対照研究でほとんど言及されていない構文でもある。したがって、日中抽象名詞の対照の意味でも、日中コンピュータ文の比較の意味でも、(7) (8) のような文を研究する意義があると考えられる。ただし、2章で述べるように、コンピュータ文に限定して論じることによって、逆に抽象名詞の多様な構文機能を見えにくくする可能性があるため、本論文では(9)の所有・存在動詞が述語となる日本語と中国語の「ある」構文・“有”構文も分析の対象として扱う。(9)のような文は抽象名詞の構文機能を考察するのに有効であるばかりでなく、(10) (11) に示すように、コンピュータ文との関連性という面でも複雑な問題をはらんでおり、構文間のすみわけや関係を考察するのにも重要な構文であると言える。

(10) a. 太郎は就職する気がある。

b. 太郎は就職する気だ。

(11) a. \*太郎は就職しない気がある。

b. 太郎は就職しない気だ。

(10) (11) のように、抽象名詞「気」は肯定的な命題内容を伴う場合、コピュラ文と「ある」構文のどちらにも用いられる。一方、否定的な命題内容を伴う場合、コピュラ文には用いられるが、「ある」構文には用いられない。このような違いが生じている理由として、コピュラ文と「ある」構文の性質が関わっていると考えられる。

### 1.3 本論文の構成

この節では本論文の構成について説明する。本論文は以下の 7 つの章によって構成される。

第 1 章 序論

第 2 章 先行研究と本論文の立場

第 3 章 日本語と中国語の人魚構文

第 4 章 日本語と中国語の連体修飾構造を含む属性叙述構文

第 5 章 日本語の「ある」構文と中国語の“有”連動文

第 6 章 構文間の関係

第 7 章 結論

第 1 章では、本論文の目的を明らかにした上で、論文全体の構成を示す。

第 2 章では、日本語と中国語の抽象名詞に関する先行研究を概観した上で、本論文の立場について説明する。従来の抽象名詞の研究では、語彙論的観点から抽象名詞の意味分析や意味分類を行なったものが多い一方、抽象名詞の意味特徴を構文の成立条件や構文的意味と結び付けながら議論する研究が十分なされていないことなどを指摘した上で、本論文の基本的な立場として構文論的観点から抽象名詞の機能を考察するという方法論をとることを説明する。

第 3 章では、日本語と中国語の人魚構文について考察する。本章では、「[太郎は名

古屋に行く]予定だ」のような、はじめに節があり、名詞が続いて、コピュラ「だ」で終わる日本語の人魚構文（角田 2011 : 53）の文法的特徴を確認した上で、中国語における人魚構文の存在およびその特徴を検討する。まず、角田（2011, 2012）で言及されている日本語の人魚構文が実際には抽象名詞の文法化の度合いにより、構造上「[XはZ]+Yだ」と「Xは[Z+Y]だ」の2類に分けられることを指摘する。前者は抽象名詞「Y」の文法化が進み、「Yだ」がモダリティ要素として独立した文「XはZ」に付加されている人魚構文であり、後者は抽象名詞「Y」の文法化が進んでおらず、「Y」は命題の内部に留まり、「Z」の修飾対象となる名詞述語文であることを示す。一方、日本語と比べ、中国語の抽象名詞は文法化がほとんど進んでいないため、人魚構文が日本語ほど発達していない。ただし、抽象名詞の意味タイプにより、人魚構文として成立する場合もある。それは意志・計画の意味を表す抽象名詞からなる文である。この1類の文は従来の中国語研究で連体修飾構造を含むコピュラ文（“X是Z的Y”）と見なされていたが、主題化、関係節化および数量詞との共起の面で連体修飾構造を含むコピュラ文と異なる振る舞いをしており、逆に日本語の人魚構文と似ている特徴を持つことを検証する。また、統語構造上も、独立した文“XZ”に“是……的Y”が枠構造としてはめ込まれていると分析することができ、独立した文「XはZ」に「Yだ」が付加された日本語人魚構文の構造と並行的に捉えることができることを指摘する。

第4章では、日本語と中国語の連体修飾構造（「明るい性格」、「开朗的性格」）を含む属性叙述構文について考察する。具体的には、日本語では「Xは[Z+Y]だ」と「Xは[Z+Y]をしている」、中国語では“X是Z的Y”と“X有着Z的Y”を対象として、各構文の文法的特徴と談話機能と共に、構文中に現れる抽象名詞の性質を明らかにする。「している」構文は話し手の観察に基づく内容しか述べられないため、当該の構文に現れる名詞は視覚的に捉えられるものが優勢であり、叙述の根拠を必要とし、そして文脈に現れる場合が多く、否定文に用いられにくい。それに対して、「だ」構文は「している」構文のような意味制約を持たず、視覚的に捉えられない名詞と共起しやすい傾向があり、叙述の根拠も必要とせず、根拠があってもなくてもよい。そして、否定文にも問題なく用いられる。一方、日本語の両構文と比べ、中国語の“X是Z的Y”構文と“X有着Z的Y”構文は話し手の観察が関与するかどうかという点には明確な違いが見られない。むしろ両者の差異は談話機能の面に求めることができるものと考えられる。すなわち“是”構文は対話または地の文で前景となる出来事理解を

円滑にするため、その出来事が起こった背景情報としての人物の属性を話し手と聞き手の間で「確認」する機能を持つものに対して、“有”構文は人物の複数の属性を並列させながら、大きな視野から小さな対象、外観から内面にズームインすることによって人物の属性を「描写」する機能を持つ。中国語と異なり、日本語の両構文は談話機能の面では違いが見られず、いずれも「確認」と「描写」のほかに、更に「認定」という機能も持つことを検証する。両言語の談話機能における違いが生じる原因の1つとして、中国語の連体修飾は既知性の面で日本語より厳しい制約を受けていることが挙げられると指摘する。

第5章では、「～する可能性／必要がある」、「有可能／有必要+Z」のような日本語の「ある」構文と中国語の“有+Y+Z”連動文について考察する。中国語の“有”連動文に関して、従来の研究では“有+Y”の部分は助動詞としての機能を持つと言われていたが（朱徳熙 1986、竹島 1993 など）、そのほとんどは単に抽象名詞 Y の意味だけに基づいた判断であり、文法機能からの検証がなされていなかった。本章では、連用順序、後続成分および完了アスペクト助詞“了”との共起という統語的特徴から各意味タイプの“有+Y”を完全な助動詞と比較することによって、“有+Y”が真の助動詞ではないことを明らかにする。そして、先行研究で言われている“有+Y”の助動詞的意味は、実際には「Y の存在（有+Y）を前提条件として、動作行為 Z を行う」という“有+Y+Z”連動文の構文的意味に由来するものであることを指摘する。日本語では、連動文は存在しないが、中国語の連動文と同様の意味を表せる構文がある。それはすなわち「[Z+Y]がある」構文である。当該の構文においても、抽象名詞 Y の性質によって、「Y がある」はさまざまなモーダルな意味、またはモダリティ機能を持つとされている（仁田 1981、大塚 2018 など）。しかしながら、中国語の“有+Y”と同様に、「Y がある」とモダリティ形式との関係を文法機能の面から検証した研究は決して多いとは言えない。本章では、先行研究でモダリティ形式またはモーダルな意味を表すとされている「Y がある」を分類した上で、文法機能の面から各意味タイプの「Y がある」と、モダリティ形式との比較を試み、ほとんどの「Y がある」はそれに対応するモダリティ形式と比べると文法化の程度が低いことを指摘する。

第6章では、第3章から第5章における考察に基づき、本論文で扱ういくつかの構文の構文間関係を述べる。

第7章では、本論文の成果をまとめた上で今後の課題について述べる。

## 第2章 先行研究と本論文の立場

本章では、日本語と中国語の抽象名詞についての先行研究を概観した上で、本論文の立場について説明する。2.1 節で日本語と中国語の抽象名詞がこれまでどのような観点から分析されてきたかについて紹介し、その問題点を指摘する。2.2 節では本論文の基本的な立場として構文論的観点から個々の抽象名詞の機能を考察するという方法論をとることを説明する。

### 2.1 抽象名詞についての先行研究の概観

抽象名詞は名詞の1つの下位類であるものの、意味や文法的特徴などの面で具体名詞と異なるところが多い。これについては日本語、中国語ともに多くの研究蓄積がある。日本語の抽象名詞については形式名詞 (e.g. 「こと」「もの」「ところ」など) の意味機能に注目したものが多く、代表的なものとして、野田 (1995)、笹栗 (2004)、佐藤 (2004, 2006)、北村 (2007)、青木 (2010) などが挙げられる。これらの研究では、個々の形式名詞の意味と用法が詳細に整理されている。ほかに、抽象名詞を中心に論じているのではないが、別の問題を扱う際、名詞全体の中で抽象名詞が付随的に言及されているものもある。例えば、名詞の下位類化に注目した寺村 (1968, 1992) は、名詞の有している範疇的な意味特性から「実質性」、「モノ性」、「トコロ性」、「コト性」、「相対性」、「形容詞性」、「トキ性」、「動詞性」、「形式性」などを抽出しているが、その中の「コト性」、「相対性」、「形容詞性」などは抽象名詞に当たる。また、連体修飾構造の特徴や成立条件を考察する際に、主名詞の意味特徴に言及した研究として、奥津 (1974)、寺村 (1992)、大島 (1989, 1991, 1997, 2010)、新屋 (2014) などが挙げられる。これらの研究によって、主名詞の意味特性や語彙的情報が連体修飾構造、特に外の関係の連体修飾構造の成立条件や統語構造に大きく影響していることが明らかにされている。例えば、寺村 (1992 : 202) によれば、外の関係のうち、「ふつうの内容補充」的修飾を成り立たせるためには、底の名詞は、「コト性」を持ったものでなければならないという。大島 (2010 : 186) では、因果名詞と感情名詞は同じく因果関

係を表す修飾構造を作るにも関わらず、名詞自身の持つ語彙的情報により統語的特徴、特に「という」の介在可能性に差が生じることが指摘されている。名詞の意味特性や語彙的情報が連体修飾構造の成立や統語構造に影響を与えているという指摘は非常に興味深いが、これらの研究は主として主名詞と連体修飾要素の関係に関する言及にとどまっており、主名詞と主節述語を含む文全体との相互作用に関する分析はほとんどなされていない。そのため、主名詞の全容を十分に捉えたとは言い難い。主名詞の分析にあたっては、連体修飾要素のみならず、連体修飾構造を含む文全体も射程に入れて考察する必要がある。

上述の2つと異なり、特定の文型、または個別の構文を考察する中で、名詞の文法的・意味的特徴を分析しているものもある。例えば、主語と述語名詞の意味関係に基づく名詞述語文の類型化に注目した高橋（1984）、西山（2003）、野村（2014）や、文末名詞文<sup>2</sup>の文法的性質に注目した新屋（1989, 2014）、角田（1996, 2011, 2012）、野田（2006）、井上（2010）、谷守（2014）、川島（2016, 2017）などが挙げられる。これらの研究では、名詞の意味分類や文法的特徴の記述が細かくなされている。特に、文末名詞文に関する一連の研究においては、文末名詞（全て抽象名詞）が現れる統語的環境や文末名詞が表す意味の分類がよく整理されているだけでなく、文末名詞の性質が文の統語構造や構文機能に与える影響も詳細に検討されている。例えば、川島（2016: 51）では、文末名詞の性質により、文末名詞文は構造的に連体修飾節によって修飾された名詞句が主語に対する叙述となっているタイプと、文相当の節に「文末名詞+だ」が助動詞のように下接しているタイプに分けられると指摘している。名詞文のほかに、「カキ料理構文」という特定の構文において、名詞の語彙的特徴を記述している研究もある。西山（1990, 2003）は、カキ料理構文の成立条件を考察するため、「非飽和名詞」という概念を提唱している。「非飽和名詞」は西山（1990, 2003）ではもっぱら語彙レベルに限定して論じられていたが、山泉（2013）では、その概念を語彙レベルから句レベルにまで拡大して論じられている。

上記のように、日本語の抽象名詞については、これまで主に形式名詞の意味・用法、連体修飾構造の成立条件、名詞述語文の分類、文末名詞文の文法的性質といった問題

---

<sup>2</sup> 「文末名詞文」は新屋（1989）において提唱された文型である。これに対して、角田（1996）では「体言締め文」という構文が提唱されている。「文末名詞文」と「体言締め文」については、多くの研究で名称が異なるだけで事実上同じ概念であるとされており、研究者により、どちらの名称を用いるかが異なる。



を扱う中で直接的または間接的に論じられている。これらの研究によって、個々の抽象名詞の意味や機能、または個別の構文における抽象名詞の意味分類や文法的特徴がかなりの程度整理されている。

しかしながら、問題も残されている。まず、先行研究では、主たる考察対象が「もの」「こと」「はず」などの文法化が進んでいる形式名詞に集中しており、「性格」や「体質」のような文法化が進んでいない抽象名詞を扱うものが少ない。つまり、扱っている抽象名詞のタイプに偏りがある。また、抽象名詞の性質を構文の成立条件や構文機能と関連させながら議論するという構文論的アプローチからの分析が十分なされていないとは言えない。前述のように、連体修飾構造に関する研究では、主名詞の語彙的情報や意味的特性が細かく分析されているが、その分析は修飾要素との関係という節レベルのみにとどまり、文レベルには至っていないため、名詞の持つ意味特性が主節述語を含む文全体にどのような影響を与えているのかなどの問題については明らかにされていないところが多い。また、名詞述語文の分類に注目した高橋(1984)、西山(2003)、野村(2014)は文を射程に捉えたものであるが、主に述語名詞と主語の意味関係に関心が寄せられ、統語論的・構文論的観点からの議論がほとんどなされていない。文末名詞文に関する研究においては、抽象名詞の意味的特性と構文の成立条件や構文機能との関係が詳細に検討されているが、文末名詞文という構文のみに関する分析であるため、扱われる抽象名詞の種類も自ずと限られてしまうことになる。更に、多様な抽象名詞を考察するためには、他の構文、例えば動詞文に考察の範囲を広げる必要もあると考えられる。

中国語では、抽象名詞は中国語の文法体系全体を記述する中、または名詞研究の中で付随的あるいは断片的に言及されていることが多い。代表的なものとして、赵元任(1968)、朱德熙(1982)、储泽祥(2000)、王珏(2001)、刘顺(2003)などが挙げられる。朱德熙(1982)では、量詞との関係に基づき、抽象名詞が可算名詞、不可算名詞、集合名詞、固有名詞と合わせて名詞の下位類として立てられており、不定量詞または動量詞とのみ結合する名詞であるとされている。その記述は以降の多くの文法書に踏襲されている。储泽祥(2000)、王珏(2001)、刘顺(2003)は名詞の特定の下位類に関する論著である。名詞の「空間性」という意味特性に注目した储泽祥(2000)は、いくつかの個別の構造を通して「空間性」という意味特性と句構造、文構造との関係进行分析している。しかし、储泽祥(2000)は主に場所詞や方位詞など「空間義」

を持つ名詞を中心に議論しており、抽象名詞に関する詳しい言及はなされていない。王珏(2001)では、抽象名詞の意味分類および一般的な文法的特徴が整理されている。王珏(2001)は、意味に基づき、抽象名詞を、“知識領域類(知識領域類)”、“度量類(度量類)”、“消息類(情報類)”、“策略類(策略類)”、“方法類(方法類)”、“疾病類(疾病類)”、“程度類(程度類)”、“情感態度類(感情態度類)”の7種類に分けている。抽象名詞の一般的な文法的特徴に関して、重畳形を持たないことや結合可能な接辞が少ないことと、数量詞の修飾を受けにくいことを挙げている。そして、数量詞、動詞との共起状況から意味タイプの異なる抽象名詞は文法的特徴も異なると指摘している。抽象名詞はタイプごとに異なる文法的な振る舞いをするという指摘は非常に興味深く、示唆に富むものであるが、王珏(2001)では、抽象名詞の意味分類も文法的振る舞いの考察もあくまで抽象名詞自体を中心に行われるものであり、構文と結び付けられていない。刘順(2003)では、「空間性」、「時間性」、「程度性」、「指称性」、「結合価」など、さまざまな観点から現代中国語の名詞の特徴が記述されている。しかし、抽象名詞に関する詳しい言及は少なく、程度副詞の修飾を受けられる抽象名詞の意味特徴と、二項抽象名詞の意味分類に触れている程度である。刘順(2003:104)によれば、程度副詞の修飾を受けられる抽象名詞は意味構造に必ず「性質義」が含まれており、かつその「性質」は量的に伸縮性を持たなければならないとされる。刘順(2003)の抽象名詞に関する考察も、主に語彙論的観点から行われており、構文論からの分析がほとんどなされていない。一方、抽象名詞を中心に議論した研究には、“自指”の連体修飾構造<sup>3</sup>を構成する名詞(ほぼ全てが抽象名詞)の意味的特性に目を向けた古川(1989)、“观念/情感(考え/感情)”を表す抽象名詞の意味的・文法的特徴に注目した袁毓林(1992)、属性を表す抽象名詞の語彙的意味特徴と構文的特徴に着眼した刘春卉(2008)、许艳平(2013)などがあるのみである。古川(1989)では、“自指”の構造を構成する名詞の意味特徴および意味タイプが細かく記述されている。古川(1989:13)によれば、この種の連体修飾構造における被修飾名詞は[CONTENT(内容)]という意味特徴を持つという。そして、意味的に“思考类(思考類)”、“言论类(言論類)”、“感知类(感覚・知覚類)”、“属性类(属性類)”、“情况类(状況類)”、“抽象类(抽象類)”、“时空类(時空類)”の7類に分けられるとされている。自指の“VP

<sup>3</sup> “自指”の連体修飾構造は日本語の「外の関係」の連体修飾構造に相当する。

的 n”連体修飾構造における名詞 n を網羅的に挙げ（計 287 語）、適切に分類しているという点において古川（1989）は大きな意義があると言える。ただし、日本語の連体修飾構造に関する諸研究と同様の問題も残されている。それは名詞を連体修飾構造という節レベルに限定して論じることによって、逆に抽象名詞の全容が見えにくくなっている側面があるということである。それに対して、袁毓林（1992）は、“观念／情感（考え／感情）”類の抽象名詞の意味特徴を記述した上で、その意味特徴が文の統語構造や文の構成要素間の意味解釈にも関係することを論じている。袁毓林（1992:207）では、“观念／情感（考え／感情）”類の抽象名詞は“观念／情感〈某人 对 某人／某事〉（ある人／あることについての他人の考え／感情）”という意味構造を持ち、意味的に“观念／情感（考え／感情）”を抱く主体と、“观念／情感（考え／感情）”を抱く対象、という 2 つの構成要素を要請すると述べられている。その意味特徴が統語構造に反映されるため、“观念／情感（考え／感情）”を抱く主体と対象を表す文法成分がともに必須になるのである。そして、“NP<sub>1</sub> 对 NP<sub>2</sub> 有 N”と“NP<sub>1</sub> 对 NP<sub>2</sub> 的 N”が交替可能であるのも、その意味特徴によるものだと説明している。许艳平（2013）はフレーム意味論の観点から、現代中国語の属性名詞の意味特徴を詳しく記述している。许艳平（2013）は、中国語の属性名詞の意味フレームは“主体元素（属性主要素）”と“属性值元素（属性值要素）”の 2 つの要素から構成されていると指摘した上で、属性主から [+事物] [+事象] [+関係] [+空間] という意味特性を抽出し、属性値から [+性状] [+数量] [+内容] という意味特性を抽出している。そして、それぞれの意味特性を持つ属性名詞がどのような構造を持つ文に用いられるか、また構文を構成する他の成分に対してどのような意味的・文法的制約があるのかについて言及している。名詞の意味特性を構文と関連づけながら検討している许艳平（2013）はとても有意義な研究である。しかし、問題も残されている。例えば、それぞれの意味特性を持つ抽象名詞と構文との関係について、コーパス調査に基づき、異なる意味特性を持つ抽象名詞がどのような文型に出現しうるか、その文型を列挙するだけにとどまっておらず、詳細な分析を行っていない。

中国語の抽象名詞に関するこれらの研究によって、抽象名詞の意味分類や一般的な文法的特徴、特定の意味タイプの抽象名詞の意味特徴・分類が細かく整理されている。しかしながら、上述の説明からも分かるように、先行研究では、語彙意味論のアプローチから抽象名詞の意味分析または意味分類を行ったものが圧倒的に多い。一方、構

文論的アプローチから抽象名詞が構文においてどのような機能を担うか、また構文的意味が抽象名詞にどのように影響するかという問題を考察するものは、相対的に見て数が少ないと言わざるを得ない。これは日本語と中国語の抽象名詞に関する研究に共通して残されている課題であると言える。

本論文では、抽象名詞の意味・機能を考える上では、従来の意味的記述や意味分類に注目するだけでは不十分で、構文論的観点を導入する必要があると考える。もちろん、構文論的観点から抽象名詞の意味・機能を捉えるものは少ないとはいえ、ないわけではない。例えば、日本語では、寺村（1968, 1992）は名詞の下位類化の基準にふさわしい意味的特性の抽出にあたって、名詞が使用可能になる構文といった構文的証左を使用している。そういった構文環境として、(1)「コレハ N デス」、(2)「ココハ N デス」、(3)「場所ニ N ガイル」、(4)「場所ニ N ガアル」、(5)「N ヲ考エル」などといったものが挙げられ、(1)を充たす名詞の意味的特性として「実質性」、「～のトコロ」などを補ってはじめて(2)の構文に入ることのできる「モノ性」、(2)を充たす名詞の特性として「トコロ性」、(3)を充たす特性として「有情」、(4)を充たす特性として「非情」、(5)を充たす特性として「コト性」、が抽出されている。ただし、本論文で扱っているいくつかの構文に関しては、必ずしも詳しく言及されていない。

## 2.2 本論文の立場

本節では、本論文がとる研究方法である「構文文法」の基本的枠組みについて整理をし、その上で構文論的観点から抽象名詞を考察する意義を述べる。

構文文法は、Lakoff(1987)、Fillmore, Kay & O'Connor(1988)、Fillmore & Kay(1993)、Goldberg (1995)らの研究によって発展してきた文法理論である。構文はもっぱら一般原理（統語規則）の相互作用の結果として生じる付随的な現象にすぎないというChomsky (1981, 1992)などの主張と異なり、構文文法の基本的な考え方は、構文は個々の動詞とは独立して存在する「意味と形式の対応物」であり、それ自体が言語の基本単位であるということである（Goldberg 1995 : 1）<sup>4</sup>。例えば、次の文全体の意味は、動詞を中心とした個々の要素の総和から予測することができない。

---

<sup>4</sup> Goldberg (1995) 著、河上・早瀬等訳 2001 : 1-2 に基づく。

(1) He doesn't get up for LUNCH, let alone BREAKFAST. (Fillmore, Kay & O'Connor 1988 : 517)

(2) What do you think your name is doing in my book? (Kay & Fillmore 1999 : 3)

(1) の let alone には前後の要素の対比という全体的意味が結びついている。また、(2) は文法規則で産出できる疑問文であるが、実際には現状を非難する意味を表している。いずれの意味も動詞を中心とした構成素から算出されるものではない。むしろ文全体が表す語用論的な意味であると言える。構文文法は、こういった形式、使用文脈、語用論的・談話的意味全てについての知識が、全体としての構文に結びついていると主張している。

上述のように、構文文法は構文を、特定の形式に特定の意味が結びついて1つのまとまりをなす「意味と形式の対応物」<sup>5</sup>であるとしているため、「構造が異なれば表される意味も異なる」と主張する。例えば、次のように、同じ動詞であっても、用いられる形式が異なれば、意味も異なる。

(3) a. I brought Pat a glass of water.

b. I brought a glass of water to Pat. (Goldberg 1995 : 2)

(4) a. \*I brought the table a glass of water.

b. I brought a glass of water to the table. (Goldberg 1995 : 2)

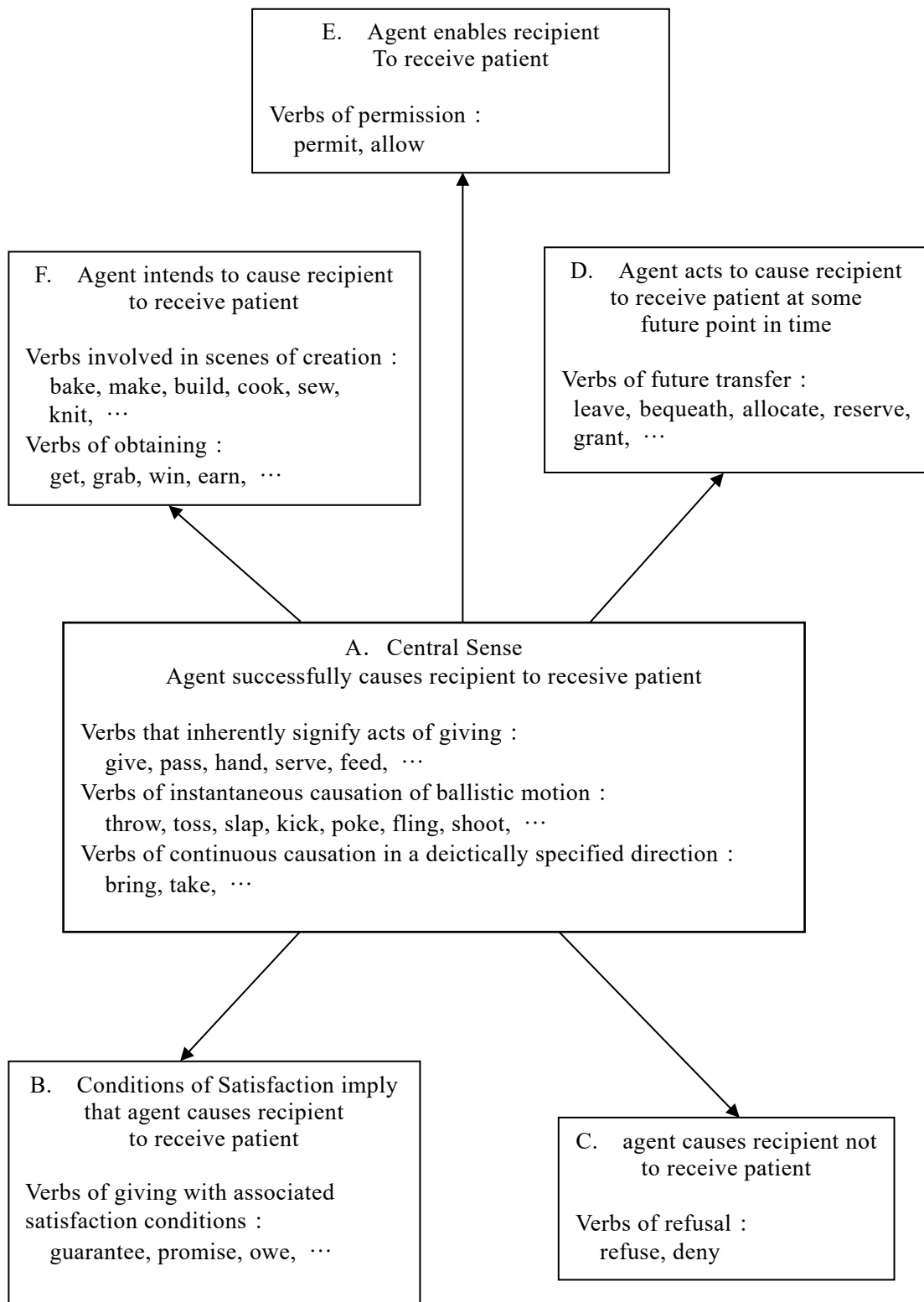
(3) (4) に示したように、二重目的語構文では到着点は有生物でなければならないのに対して、前置詞 to を用いた言い換え表現にはそのような制約は見られない。構文文法では、構文がこうした相違をもたらしているのだと主張している。

構文文法は、構文が動詞の意味から独立して意味を持つと主張しているが、構文の意味が動詞の意味と全く関係がないと考えているのではない。反対に、表現の意味は動詞の意味と構文の意味が相互作用した結果生じるものであると考えている。構文の意味と動詞の意味の相互作用のあり方について、Goldberg (1995) では、構文のもつ骨格的かつ抽象的な意味を、動詞の意味によって具体化することにより、両者の意味

---

<sup>5</sup> Goldberg (1995) 著、河上・早瀬等訳 2001 : 313 に基づく。

が融合され表現全体の意味が得られるとされている。例えば、図 1 のように、二重目的語構文は「agent が recipient に patient を受け取らせるのに成功する」という中心的意味を持ち、その中心的意味は構文に結びつく動詞の意味によって具体化されている。ただし、動詞の個別の意味により、構文の解釈はわずかに異なることが多いと指摘されている。例えば、創造動詞 (bake, make, build, cook) や獲得動詞 (get, grab, win, earn) を用いた場合、「agent の働きかけによって、潜在的に存在する recipient が patient を実際に受け取る」ということは必ずしも含意されないとされる。また、何らかの義務を履行することを意味する動詞 (promise, guarantee, owe) を用いた場合も、やはり移送を必ずしも含意しないという。



☒ 1 (Goldberg1995 : 38)

特定の構文にどのようなタイプの動詞が入れる（統合可能）かについて、Goldberg（1995 : 60）では、一般に動詞が指定する事態のタイプは、構文が指定する一般性の高い事態タイプの 1 例に相当すると述べられている。例えば、(5) の hand を参照されたい。

(5) She handed him the ball. (Goldberg 1995 : 60)

動詞 hand が表す移送は、二重目的語構文に結びつく移送の意味の中での 1 つの具体的な方式である。

また、(6) のように動詞の意味と構文の意味が一致しない場合もある。

(6) Joe kicked Bob the ball. (Goldberg 1995 : 61)

動詞 kick は、「蹴る」という動作のみを表し、二重目的語構文が表す移送の意味とは直接な関係を持たない。kick は移送を達成するための手段である。

このような動詞が構文の表す意味を直接には表さないタイプにおいては、動詞が次のような条件を満たさなければならないとされている。

構文の指定する事態タイプを  $e_c$ 、動詞が指定する事態タイプを  $e_v$  としよう。

- I.  $e_v$  は次のような方法で  $e_c$  と関連性をもたなくてはならない。
  - A.  $e_v$  が  $e_c$  の下位タイプである
  - B.  $e_v$  が  $e_c$  の手段を指定する
  - C.  $e_v$  が  $e_c$  の結果を指定する
  - D.  $e_v$  が  $e_c$  の前提条件を指定する
  - E. ごく限られた程度に、 $e_v$  は  $e_c$  の様態、 $e_c$  を同定する手段、あるいは  $e_c$  の意図される結果を指定する
- II.  $e_c$  と  $e_v$  は少なくとも 1 つの役割を共有しなくてはならない。



上述の説明から分かるように、動詞の個別の意味によって、構文の意味に微妙な違いが生じることがあるが、全体的に動詞の意味は何らかの方法で構文の意味に適合しなくてはならない。このような動詞と構文の相互作用が Goldberg (1995) では詳細に考察されている。

本論文は、Goldberg (1995) のこの枠組みに基づき、抽象名詞と構文の相互作用を、日本語と中国語のいくつかの構文についての分析を行うことによって明らかにしたい。具体的には、第1章で設定した3つの研究課題を中心に考察を行う。

- I. 抽象名詞の性質、特に抽象名詞のタイプごとに異なる固有の特性が、構文の構造や構文の意味にどのように影響するのか。
- II. 構文の意味や構文の構造が構文に入る抽象名詞の選択制限および抽象名詞と他の構成要素間の文法的・意味的關係にどのように影響するのか。
- III. 構造が異なる類義表現間にどのような意味の差異があるのか。また、対応する構造を持つと思われる日本語と中国語の複数の構文は構文機能や構文の成立条件にどのような違いがあるのか。

抽象名詞を構文的観点から考察しようという本稿の試みは、従来の意味分析が中心になっていた抽象名詞研究の不足を補完しうるものであると考えられる。例えば、(7) (8) のように、特定の語の文法化が進んでいるかどうかは、構文環境を見なければ分からない。

- (7) a. 花子は多忙だ。名古屋や大阪に行く予定だ。  
b. 花子は多忙だ。\*名古屋や大阪に行く予定などだ。  
c. 花子は多忙だ。名古屋に行く予定や、大阪に行く予定などがある。(角田 2011 : 60)

---

<sup>6</sup> Goldberg (1995) 著、河上・早瀬等訳 2001 : 86-87 に基づく。

- (8) a. 花子は名古屋に行く予定だ。  
 b. \*花子は名古屋に行く急な予定だ。  
 c. 急な予定ができた。 (角田 2011 : 62)

(7) (8) に示したように、抽象名詞「予定」が人魚構文ではない (7c) と (8c) に現れる場合、普通の名詞と同じく接尾辞「など」を伴うこともできるし、修飾も受けられる。一方、人魚構文に現れる場合は、(7b) と (8b) のように、「など」と修飾語どちらも付けることができない。要するに、人魚構文という構文環境に限って、抽象名詞「予定」は名詞らしさを失っていると言える。逆に言えば、「予定」のもつ語彙的意味だけからは文法化が進んでいるかどうかを、判断することが難しいと考えられる。なお、「文法化」は一般的に、開かれた語彙項目が閉じられたクラスの文法的要素に変化する過程を言う。その際、統語上の独立性や語彙的意味の消失、さらには、音声的摩滅なども通常伴う (秋元 2014 : 4) とされるが、本論文では、形式名詞のように専ら文法機能を担う機能語に変化する現象のみを「文法化」と見なすのではなく、完全に機能語化していなくとも、形態的側面、統語的側面において名詞らしさを失う現象も段階的に文法化の過程を進んでいる (角田 2011) と考え、こうした現象についても広義の「文法化」として扱うものとする。

また、(9) に示すように、類義の抽象名詞であっても、あるものは人魚構文に入るが、あるものは入らない、ということが起こりうる。

- (9) a. 政府は米の輸入を認める意向だ。 (角田 2011 : 56)  
 b. \*政府 是 允许 进口 大米 的 意向。  
 政府 COP 認める 輸入する 米 助詞 意向  
 [政府は米の輸入を認める意向だ。]

「意向」は日本語でも中国語でも主体の意志を表す抽象名詞であるものの、日本語では、「意向」は (9a) のように人魚構文に用いられるのに対して、中国語ではそれができない。このような日本語と中国語の類義抽象名詞の使い方の違いも、特定の構文的環境において考察しなければ分からない。

ほかに、次のように、使われている抽象名詞が同じであるが、(10a) (10b) (10c)

の容認度が異なることも、抽象名詞の持つ語彙的な意味からは自然に捉えることができない。

(10) a. 温柔的 性格

やさしい 助詞 性格

[やさしい性格]

b. \*他 是 温柔的 性格。

彼 COP やさしい 助詞 性格

[彼はやさしい性格だ。]

c. 他 是 那种 温柔的 性格。

彼 COP そのような やさしい 助詞 性格

[彼はそのようなやさしい性格だ。]

抽象名詞「性格」は、(10a)のように単独では形容詞一語だけである“温柔(やさしい)”の修飾を受けられるが、(10b)のように“X是Z的Y”に入ると、修飾語が形容詞一語だけでは文が成立しない。一方、(10c)のように修飾語“温柔(やさしい)”の直前に指示連体詞の“那种(そのような)”を挿入すれば、自然な文になる。要するに、同じ抽象名詞であるものの、単独で用いられる場合と、特定の構文に用いられる場合の振る舞いが異なるということである。なぜそのような違いが生じているのかを説明するのに、抽象名詞が置かれる構文環境を分析する必要があると考えられる。

上記のように、抽象名詞の多様な用法や機能を説明・分析するのに、日中の抽象名詞を対照するのに、語彙論的な捉え方だけでは不十分であり、構文論的観点を導入する必要があると考えられる。

## 第3章 日本語と中国語の人魚構文

第3章では角田(2011, 2012)で言及されている日本語の人魚構文と対照しながら、中国語においても人魚構文が存在することを示し、その特徴および日本語と中国語の異同を明らかにすることを目的とする。本章ではまず、日本語の人魚構文の特徴を検討し、角田(2011, 2012)で言及されている人魚構文は実際には抽象名詞の文法化の度合いにより、統語構造上2つの異なるタイプに分けられることを指摘する。続いて、日本語の人魚構文の特徴を参照しながら、中国語に人魚構文はあるのか否かを検証する。従来中国語研究の中では、構造的に日本語の人魚構文に対応するものは、連体修飾構造を含む普通のコピュラ文だとされてきたが、本論文では、文法的特徴および統語構造の分析に基づき、従来コピュラ文とされていたものの中で日本語の人魚構文と非常に類似しているものがあることを主張する。その上で、日本語の人魚構文の成立は抽象名詞の文法化の度合いに強く影響される傾向があるが、中国語ではそのような傾向が見られないことを指摘する。

### 3.1 はじめに

日本語には、体言締め文または人魚構文と呼ばれる、(1)のような構造を持った文があるとされる。

(1) [節] 名詞 だ。 [Clause] Noun Copula (角田 2011 : 54)

すなわち、はじめに節があり、名詞(全て抽象名詞が用いられる)がそれに続いて、コピュラ「だ」で終わるというものである。その例として(2)～(4)が挙げられる。

(2) 事業は住民の意向調査後に具体的な計画をつくる予定だ。(BCCWJ)

(3) 実績は遠くおよばなかった模様だ。(BCCWJ)

(4) 彼らはぶらぶら歩いているところだ。(BCCWJ)

この種の文について、角田(2011, 2012)は、奇妙な構造を持つ文であり、世界的に見ても珍しいと繰り返し述べている。奇妙である理由として角田(2011)は、例えば(2)において、意味の面では、事業は予定ではないこと、また、統語面では、文の前半が動詞述語文と同じ構造を持っているにも関わらず、後半が「<名詞>だ」で終わる名詞述語文と同じ構造を持っているといった特徴があることを指摘している。文が「<名詞>だ」で終わるため、角田(1996)は「体言締め文」(noun-concluding construction)と名付けているが、1つの文において異質な前半部と後半部が合体しているという意味で、角田(2011)はこれを「人魚構文」(mermaid construction)と呼び直している(谷守2014: 158)。本論文ではこの「人魚構文」という名称を用いる。

人魚構文は特殊な構文として日本語研究の中で注目が高まっているが、中国語研究の中では管見の限りほとんど言及されてこなかった。これは恐らくは、従来の中国語研究の中で、構造的に日本語の人魚構文に対応するものが、「連体修飾節+名詞」構造を含む普通の文と見なされており、特別な構文として扱われていないからだと思われる。例えば、構造的に(2)のような人魚構文に対応する中国語の例文(5)(6)(7)(8)は(9)のような「連体修飾節+名詞」構造を含む文と同様に扱われる。なお、議論の便宜上、本章では以下中国語と日本語における「連体修飾節+名詞」構造を含む文を「連体文」と呼ぶことにする。

(5) 他 就 是 以权谋财 的 想法。(MLC)

彼 ほかでもなく COP 権力で財物を取得する 助詞 考え

[彼は権力を利用して財物を取得する考えだ。]

(6) 菲律宾 到底 是 什么样 的 打算?(MLC)

フィリピン 一体 COP どのような 助詞 予定

[フィリピンは一体どのような予定なのか?]

(7) 我 当时 就 是 被 糖弹 打中 的 感觉。(CCL)

私 当時 ほかでもなく COP られる 糖衣砲弾 命中する 助詞 感じ

[私はその時糖衣砲弾に撃たれた感じだった。]

(8) 他 完全 是 教训 我 的 口吻。(CCL)

彼 完全に COP 叱る 私 助詞 口振り

〔彼は完全に私を叱る口振りだった。〕

(9) 莱特小姐 是 教 英语语法 的 老师。(BCC)

ライト姉さん COP 教える 英文法 助詞 先生

〔ライト姉さんは英文法を教える先生だ。〕

日本語の人魚構文と同じく、上述の(5)～(8)の文も、意味の面では、それぞれ“他(彼)”＝“想法(考え)”、“菲律宾(フィリピン)”＝“打算(予定)”、“我(私)”＝“感觉(感じ)”、“他(彼)”＝“口吻(口振り)”とはならない。一方、(9)の文は“莱特小姐(ライト姉さん)”＝“老师(先生)”という意味を表す。

この点から分かるのは、(5)(6)(7)(8)と(9)は、表面上は同じ構造を持つ文であるように見えるが、実際には異なる特徴を持っているということである。したがって、両者を一様に連体文と見なすのは妥当であるとは思えない。

本章では、日本語の人魚構文と対照しながら、中国語で日本語の人魚構文に対応する構造を持つものが、単純な連体文なのか、それとも日本語と同じく特別な構文なのかを明らかにする。そしてもし中国語に人魚構文の存在が認められるとすれば、それは一体どのような特徴を持つものなのか、日本語との違いは何なのか、といった点も併せて検討していく。

### 3.2 先行研究とその問題点

前述のように、中国語研究の中では、日本語の人魚構文に対応する構造を持つ文が人魚構文として言及されてこなかった。しかし、日本語との対照の観点から中国語における人魚構文の有無の問題を扱っている先行研究はいくつか挙げられる。

まず、井上(2010:66)は、以下の例文(10)～(12)のような日本語の人魚構文<sup>7</sup>が中国語で人魚構文の形で表せないことを理由に、中国語には日本語の人魚構文に相当する構造が基本的にないと述べている。(10)～(12)の不成立は井上(2010)に

<sup>7</sup> 井上(2010)は「体言締め文」という用語を使用している。

基づく。

(10) 彼は疲れた様子だ。(井上 2010 : 65)

\*他 是 很 累 的 样子。

彼 COP とても 疲れる 助詞 様子

(11) 私は夏休みに北京に留学に行く予定だ。(井上 2010 : 66)

\*我 是 暑假 去 北京 留学 的 计划。

私 COP 夏休み 行く 北京 留学する 助詞 予定

(12) この住宅は震度七の地震にも耐える構造だ。(井上 2010 : 66)

\*这个 房屋 是 可以 抗 七级地震 的 结构。

この 住宅 COP できる 耐える 震度七の地震 助詞 構造

しかし、筆者を含む 8 人の中国語母語話者の判断では、(11) と (12) は自然な文であり、(10) も少し不自然であるが、絶対に言えないわけではない。このことから、中国語に人魚構文に相当する構造がないと結論付けるには根拠が十分ではないと思われる。実際に、例文 (5) のような日本語の人魚構文に対応する例が中国語には確かに存在する。

他方、Ono (2013) では、人魚構文は基本的に SOV 語順を持つ言語に存在するものではあるが、SVO 語順を持つ中国語にも人魚構文があるという反対の意見が述べられている。Ono (2013) は、中国語の人魚構文の構造を次のように示している。

(13) Subject + Copula + Clause + Noun (Ono 2013 : 677)

(14) Subject (Clause-1) + Copula + Clause-2 + Noun (Ono 2013 : 677)

Ono (2013 : 677) によれば、(13) は「Clause」に主語が現れない場合、あるいは、「Clause」の主語がコンピュータによって「Clause」から分離されている場合であり、(14) は最初の節 (Clause-1) が主文の主語である場合だという。それぞれの例は、(15)、(16) の通りである。本論文では日本語の人魚構文に直接対応する (13) のタイプの

みを研究対象とする<sup>8</sup>。

(15) 大家 都 是 松了 一口气 的 样子。(Ono 2013 : 678)

みんな 全て COP 緩める-PERF 一息 助詞 様子

[みんなホッとした様子だ。]

(16) 冯庆 从小 便 长得 细小 精瘦, 大概 是 吃饭

馮慶 小さい頃 既に 育つ-接尾辞 小柄 痩せている 恐らく COP 食事

始终 没 有 胃口 的 缘故。(Ono 2013 : 678)

ずっと NEG ある 食欲 助詞 わけ

[馮慶は小さい頃から小柄で痩せているが、恐らく食欲不振のためだ。]

また、Ono (2013 : 679) は、中国語では「Clause」が助詞“的”を伴うために、この構造が連体修飾構造に見えやすくなることを指摘している。Ono (2013) は、人魚構文が通常の連体修飾構造とは異なるものとして中国語に存在することを主張する論考であるが、その形式的類似性を強調するだけにとどまっており、両者の違いについてはそれ以上踏み込んだ議論を行っていない。ここでの「Clause」が連体修飾節とどう違うのかという点についても言及がなされていない。

以上の先行研究から、少なくとも中国語に人魚構文が存在する可能性があることが指摘できる。ただ、その人魚構文らしき構造と連体修飾構造との違いについて未だ明らかでない側面が多く残されているため、結果として、現状では人魚構文の存在を厳密な意味で規定できるまでには至っていない。以下では、構造的に日本語の人魚構文に対応するものを仮に「疑似人魚構文」と呼ぶこととし、連体修飾構造との差異の分析を通して、改めて「人魚構文」の定義を確認し直した上で、疑似人魚構文の中に真に人魚構文と呼べるものが存在するか否かを検証する。議論の便宜上、以下では、日本語の人魚構文を「[X は Z] + Y だ」、中国語の疑似人魚構文を“X 是 Z 的 Y”という形で示すことにする。

中国語の疑似人魚構文の性質を明らかにするため、次節ではまず日本語の人魚構文

---

<sup>8</sup> Ono (2013) は (14) の構造を持つ文も、人魚構文と見なしているが、この種の文は一般的な複文と同じ構造を持っており、日本語の人魚構文の構造とは一致しないため、本章ではひとまず検討しないことにする。



の一般的な特徴を見ていくことにする。

### 3.3 日本語の人魚構文の統語的特徴

日本語の人魚構文に関しても、高橋（1959）、寺村（1992）などのように、連体文と見なしている研究がある。これに対して、角田（2011）は、「の/が」の交替、「話題」の「は」の用法という統語的側面などから、人魚構文は連体文と異なるものであることを明らかにした。また、「XはY」単独で文として成立することや「N」が修飾を受けられないことも人魚構文の特徴であると指摘している。以下はそれぞれの詳細を見ていく。

まず、「の/が」交替は、連体修飾節では可能であるが、人魚構文では不可能であるという。(17)、(18)を参照されたい。

(17) 明夫が／明夫の 書いた本。(角田 2011 : 65)

(18) [明日 花子が／\*花子の 着く] 予定だ。(角田 2011 : 65)

また、角田（2011 : 65）は、話題の「は」は連体修飾節の中には現れることができないのに対して、人魚構文には現れることができると述べている。

(19) \*花子は書いた本。(角田 2011 : 65)

(20) 花子は名古屋に行く予定だ。(角田 2011 : 65)

この点に関して、川島（2016）は、話題が人魚構文に入れない場合もあると指摘する。川島（2016 : 55）によれば、とりたて詞「シカ」は同一の最小節内で否定辞と共起しなければならないが（久野 1999）、以下の例文の主題をシカで取り立てると容認度に差が生じるという。

(21) a. 太郎は子ども達の面倒を見る立場だ。

b. \*太郎しか子ども達の面倒を見ない立場だ。(川島 2016 : 54)

(22) a. 太郎は来月会社を辞める見込みだ。

b. 太郎しか会社を辞めない見込みだ。(川島 2016 : 54)

同じ人魚構文でも、「立場」という名詞によって構成される(21)は節内での否定辞の共起を許容しないのに対して、「見込み」という名詞からなる(22)はこれを許容する。以上から、川島(2016 : 50)は人魚構文には以下の2つの文構造タイプがあると指摘する。

(i) Xハ「……………N」ダ

(ii) 「Xハ……………」Nダ (川島 2016 : 50)

川島(2016 : 50)によれば、(i)は「Xハ—Nダ」という構造を基底とした名詞文であり、連体節によって修飾された名詞句が主語に対して叙述しており、全体として措定文に近い。一方、(ii)は「文」に「Nダ」が助動詞のように下接しているタイプであり、構造的には動詞文に近いという。

更に、人魚構文の「XはZ」の部分について、角田(2011 : 54)は、人魚構文は(少なくとも、その原型においては)「XはZ」の部分だけで文として独立できると述べている。言い換えれば、(23)の文から「Yだ」を削除しても、(23′)のような形で文が成立する。

(23) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。(角田 2011 : 53)

(23′) 太郎は名古屋に行く。(角田 2011 : 54)

しかし、「XはZ」が単独で成立しない場合もある。次の(24)から「Yだ」を削除し(24′)のようにすると、文として成立しなくなる。

(24) 彼はけわしい表情だった。(井上 2010 : 62)

(24′) \*彼はけわしい。

角田(2011)でははっきりと言及されていないが、「XはZ」が独立可能である背景

には名詞「Y」の文法化が関わっていると思われる。「Y」の文法化が進み、「XはZ」の外側に付加されるモダリティ要素に近づいていけば、削除しても「XはZ」の成立に支障をきたさないからである。構造から言えば、川島(2016)で述べられている(ii)タイプに当たる。反対に、名詞の文法化が進んでいなければ、「Y」は命題の内部に留まり、「Z」の修飾対象となるため、削除されると「XはZ」だけでは成立しにくいのである。これは(i)タイプの構造に当たる。

最後に人魚構文の「Y」の部分について、角田(2011:62)は、「Y」には別の修飾語を加えることができないと指摘している。

(25) a. [花子は名古屋に行く] 予定だ。

b. \* [花子は名古屋に行く] 急な予定だ。(角田 2011 : 62)

しかし、(26) (27) に示すように、「Y」が修飾語を受けられる場合もある。

(26) a. 弥生さんは自分のことを語らない性格だ。(BCCWJ)

b. 弥生さんは自分のことを語らない内気な性格だ。

(27) a. この車は時速 300 キロで走る構造だ。(角田 2011 : 58)

b. この車は時速 300 キロで走ることができる頑丈な構造だ。

つまり、文末の名詞の全てが修飾語を受けられないわけではない。個別の名詞によって、事情が異なる。例えば、「性格」、「体質」、「構造」、「スタイル」などの名詞は修飾語を受けることができる。(25) のような例では、文法化が進んで、既に名詞としての特徴を失っていることから、この違いにも名詞の文法化が関わっている可能性があると考えられる。

上述の人魚構文の統語的特徴から分かるように、角田(2011)の言う人魚構文はその内実が複雑である。まず、川島(2016)が指摘するように、構造的に(i)と(ii)の2つのタイプに分けられる。更に、両者の境界は判然としたものではない。川島

---

<sup>9</sup> 日本語母語話者7人へのアンケートでは「この車は時速300キロで走る頑丈な構造だ。」という文を用いていたが、協力者から「ことができる」を加えたほうがより自然になるという指摘があった。

(2017 : 69) では同一の文に対する解釈が 1 つに定まらない場合があると述べられている。(28) を参照されたい。

(28) a. 彼の部屋はよく整理整頓されている感じだ。

b. [彼の部屋しかよく整理整頓されていない]感じだ。(川島 2017 : 69)

(28) は節内にシカが入り得るので、(ii) タイプの構造を持つ文ということになる。しかしながら、川島 (2017 : 69) によれば、(28) を、「彼の部屋」を主題として、叙述を行っているとして解釈しても不自然ではないという。つまり、川島 (2017 : 75) が指摘するように、人魚構文は (i) タイプと (ii) タイプの典型的な例を両極として、その間に多種多様な用例を含みながら、緩やかに繋がって全体的な体系をなしていることになる。

また、川島 (2016) の指摘とも関連するが、「Y」のタイプによって統語的振る舞いが異なってくることも、人魚構文の内実を複雑にしている要因の 1 つと言える。既に述べたように、この背景には名詞「Y」の文法化が関わっていると考えられる。

次節では、上で整理した日本語の人魚構文の特徴を参照しながら、中国語における疑似人魚構文と連体修飾節との違いを検証する。

### 3.4 疑似人魚構文の統語的特徴

次に中国語の疑似人魚構文の特徴を見てみよう。以下では、連体修飾語“Z”の中の名詞の主題化、“XZ”の独立性、“Z 的 Y”の関係節化および“Z 的 Y”の前の数量詞の生起という観点から中国語の疑似人魚構文の特徴を考察していく。

#### 3.4.1 “Z”の中の名詞の主題化

連体修飾節はその中の一部を取り出して主題化しにくいことがよく知られている。野田 (1996 : 190) では、普通は、名詞節のような強い従属節の中の成分の名詞を主

題にすることはできないと述べられている。(29)、(30)を見られたい。

(29) この問題をとくのが私のライフワークだ。(野田 1996 : 190)

(30) \*この問題はとくのが私のライフワークだ。(同上)

これは中国語でも同じである。例えば、次の(31)(32)が示すように、連体修飾節の中の名詞は主題化することができない。

(31) a. 装 衣服 的 那个 箱子 已经 运走 了。(刘月华他 2001 : 474)

入れる 服 助詞 あの 箱 既に 運んでいく SFP

[服を入れるあの箱は既に運ばれていった。]

b. \*衣服, 装 的 那个 箱子 已经 运走 了。

服 入れる 助詞 あの 箱 既に 運んでいく SFP

[服は入れるあの箱が既に運ばれていった。]

(32) a. 莱特小姐 是 教 英语语法 的 老师。(BCC)

ライト姉さん COP 教える 英文法 助詞 先生

[ライト姉さんは英文法を教える先生だ。]

b. \*英语语法, 莱特小姐 是 教 的 老师。

英文法 ライト姉さん COP 教える 助詞 先生

[英文法はライトお姉さんが教える先生だ。]

一方、疑似人魚構文、例えば、(33)～(35)では、“Z”の中の名詞を主題化することができる。

(33) a. 我们公司 是 进行 民意调查 之后 再 制定 具体 计划

我が社 COP 行なう 住民の意向調査 後 改めて 作る 具体的な 計画的 打算。

助詞 予定

[我が社は住民の意向調査後に具体的な計画を作る予定だ。]

b. 具体 计划，我们公司 是 进行 民意调查 之后 再 制定  
具体的な 計画 我が社 COP 行なう 住民の意向調査 後 改めて 作る  
的 打算。

助詞 予定

[具体的な計画については我が社は住民の意向調査後に作る予定だ。]

(34) a. 我 是 公司 的 名字 也 使用 “证券公司 抹布” 的 打算。

私 COP 会社 助詞 名前 も 使う 「株式会社 ぞうきん」 助詞 予定

[私は社名も「株式会社ぞうきん」にする予定だ。]

b. 公司 的 名字，我 是 也 使用 “证券公司 抹布” 的 打算。

会社 助詞 名前 私 COP も 使う 「株式会社 ぞうきん」 助詞 予定

[社名については私は「株式会社ぞうきん」にする予定だ。]

(35) a. 当事人 是 再 找找 看 其它 工作 的 想法。(BCCWJ 筆者訳)

当人 COP 改めて 探す みる 別の 仕事 助詞 考え

[当人は別の仕事を探してみる考えだ。]

b. 其它 工作，当事人 是 再 找找 看 的 想法。

別の 仕事 当人 COP 改めて 探す みる 助詞 考え

[別の仕事については当人は探してみる考えだ。]

ただし、以下の (36) ~ (38) が示すように、文末名詞の“Y”が属性・性質、様態・状況を表すものである場合は<sup>10</sup>、“Z”の中の名詞が主題化しにくい。

(36) a. 娘家 爹妈 都 是 爱 显摆 的 脾气。(CCL)

実家 親 全て COP 好き 見せびらかす 助詞 性格

[実家の親は見せびらかすのが好きな性格だ。]

b. \*显摆， 娘家 爹妈 都 是 爱 的 脾气。

見せびらかす 実家 親 全て COP 好き 助詞 性格

[見せびらかすことについては、実家の親は好きな性格だ。]

<sup>10</sup> 角田 (2011) は人魚構文における文末名詞をまず大きく、実質名詞、形式名詞と後接語の「の」の3類に分け、更に実質名詞を12類に細かく分類している。本章では角田 (2011) の名詞に対する意味分類に基づき、それぞれの意味タイプの名詞が中国語で人魚構文に用いられるかを確認した。

(37) a. 他 完全 是 教训 我 的 口吻。(CCL)

彼 完全に COP 叱る 私 助詞 口振り

[彼は完全に私を叱る口振りだった。]

b. \*我, 他 完全 是 教训 的 口吻。

私 彼 完全に COP 叱る 助詞 口振り

[私については彼は完全に叱る口振りだった。]

(38) a. 很多 人 都 是 无法 展现 自己 的 状态。(MLC)

多くの 人 全て COP できない 見せる 自分 助詞 状態

[多くの人は本当の自分を見せることができない状態だ。]

b. \*自己, 很多 人 都 是 无法 展现 的 状态。

自分 多くの 人 全て COP できない 見せる 助詞 状態

[本当の自分については多くの人は見せることができない状態だ。]

以上のことから分かるように、連体文では、修飾節の中の名詞が主題化できないのに対して、疑似人魚構文では、個別の事例によって事情が異なるものの、名詞成分が主題化できるものが確かに存在する。この点において、3.3 節で述べた日本語の人魚構文における主題の「は」の用法と共通している。

### 3.4.2 “XZ” の独立性

前述のように、日本語では、典型的な人魚構文は「Y だ」の部分を削除しても、「X は Z」単独で文として成立する。これは疑似人魚構文でも同じである。(39b) のように、“Y” と “是” を削除しても、“XZ” 単独で成立する。

(39) a. 他 就 是 以权谋财 的 想法。(MLC)

彼 ほかでもなく COP 権力で財物を取得する 助詞 考え

[彼は権力を利用して財物を取得する考えだ。]

b. 他 以权谋财。

彼 権力で財物を取得する

[彼は権力を利用して財物を取得する。]

一方、連体文では、中心語とコピュラを除くと、文が成立しにくい。

(40) a. 故宫 过去 是 封建帝王 住 的 地方。(刘月华他 2001:481)

故宫 昔 COP 封建帝王 住む 助詞 所

[故宫は昔帝王が住む所だった。]

b. ?故宫 过去 封建帝王 住。

故宫 昔 封建帝王 住む

[故宫は昔帝王が住んだ。]

その理由は節と名詞との意味関係が違うからである。角田 (2011)、川島 (2016) で指摘されているように、典型的な人魚構文では、「Y だ」が助動詞のようなものとして文に付加されているため、削除されても、文の成立に影響を与えない。疑似人魚構文でも、“XZ” 単独で使えるものに関しては、人魚構文と同じような構造を持っていると推測することができる。この点についての具体的な説明は 3.5 節で行う。一方、中国語の通常の連体文は、“是” を述語とし名詞がその目的語の主要部となるコピュラ文であるため、その根幹である“是” と名詞は基本的には削除してはならない。もちろん、(41) のように、“是” と中心語が削除されても文が成立する場合もある。

(41) a. 莱特小姐 是 教 英语语法 的 老师。(BCC)

ライト姉さん COP 教える 英文法 助詞 先生

[ライト姉さんは英文法を教える先生だ。]

b. 莱特小姐 教 英语语法。

ライト姉さん 教える 英文法

[ライト姉さんが英文法を教える。]



しかし、(41) のようなものは、前節で述べた“Z”の中の名詞の主題化の面や、以下で述べる“Z的Y”の関係節化および“Z的Y”の前の数量詞の生起の面において、(39) のような疑似人魚構文とは歴然とした違いがあるため、これらを同一視することはできない。

### 3.4.3 “Z的Y”の関係節化

前節で述べたように、疑似人魚構文における“Z”と“Y”は修飾と被修飾の関係にはない。言い換えれば、“Z的Y”は名詞句にはなっていない。その証拠として、普通、名詞句は(42)(43)のように、名詞を修飾することができるが、疑似人魚構文における“Z的Y”は名詞を修飾することができないということが挙げられる。

(42) a. 莱特小姐 是 教 英语语法 的 老师。(BCC)

ライト姉さん COP 教える 英文法 助詞 先生

[ライト姉さんは英文法を教える先生だ。]

b. 教 英语语法 的 老师 的 知识 要 丰富。

教える 英文法 助詞 先生 助詞 知識 なければならない 豊富

[英文法を教える先生の知識は豊富でなければならない。]

(43) a. 故宫 过去 是 封建帝王 住 的 地方。(刘月华他 2001 : 481)

故宫 昔 COP 封建帝王 住む 助詞 所

[故宫は昔帝王が住む所だった。]

b. 封建帝王 住 的 地方 的 设施 非常 豪华。

封建帝王 住む 助詞 所 助詞 設備 とても 豪華

[帝王が住む所の設備はとても豪華だった。]

(42)(43) に示したように、連体文では、節と名詞の部分(“Z的Y”)が問題なく名詞を修飾することができる。

一方、疑似人魚構文では、(44)～(46)のように、“Z的Y”が名詞を修飾することができない。

(44) 他 就 是 以 权 谋 财 的 想 法。(MLC)

彼 ほかでもなく COP 権力で財物を取得する 助詞 考え

[彼は権力を利用して財物を取得する考えだ。]

b. \*以 权 谋 财 的 想 法 的 人 很 多。

権力で財物を取得する 助詞 考え 助詞 人 とても 多い

[権力を利用して財物を取得する考えの人は多い。]

(45) a. 我 当 时 就 是 被 糖 弹 打 中 的 感 觉。(CCL)

私 当時 ほかでもなく COP られる 糖衣砲弾 命中する 助詞 感じ

[私はその時糖衣砲弾に撃たれた感じだった。]

b. \*被 糖 弹 打 中 的 感 觉 的 出 现 让 我 失 去 了

られる 糖衣砲弾 命中する 助詞 感じ 助詞 出現 させる 私 失う-PERF

自我。

自分

[糖衣砲弾に撃たれた感じの出現で、私は自分を失った。]

(46) a. 他 完 全 是 教 训 我 的 口 吻。(CCL)

彼 完全に COP 叱る 私 助詞 口振り

[彼は完全に私を叱る口振りだ。]

b. \*教 训 我 的 口 吻 的 人 是 个 不 懂 礼 貌 的 后 辈。

叱る 私 助詞 口振り 助詞 人 COP CL NEG 知る 礼儀 助詞 後輩

[私を叱る口振りの人は礼儀知らずの後輩である。]

ただし、一部例外がある。(47) ~ (49) に示すように、文末名詞の“Y”が属性・本質または様態・状況を表す場合、“Z 的 Y”が名詞を修飾することがある。

(47) a. 我 也 是 说 了 就 干 到 底 的 性 格。(CCL)

私 も COP 言う-PERF すぐ やる-とことん 助詞 性格

[私も言った以上はやる性格だ。]

b. 说 了 就 干 到 底 的 性 格 的 人 并 不 多 见。

言う-PERF すぐ やる-とことん 助詞 性格 助詞 人 決して NEG 多く 見る

[言った以上はやる性格の人はそれほど多くない。]

- (48) a. 很多 青少年 是 易 成癮 的 体质。(MLC)  
 多く 青少年 COP しやすい 中毒になる 助詞 体質  
 [多くの青少年は中毒になりやすい体質だ。]
- b. 易 成癮 的 体质 的 人 最好 不要 抽烟。  
 しやすい 中毒になる 助詞 体質 助詞 人 したほうがいい しない たばこを吸う  
 [中毒になりやすい体質の人はタバコを吸わないほうがよい。]
- (49) a. 这个 地方 是 急缺 医生 的 状况。(井上 2010 : 59 筆者訳)  
 この 地域 COP 足りない 医師 助詞 状況  
 [この地域は医師が不足している状態だ。]
- b. 急缺 医生 的 状况 的 改善 让 当地人 非常 开心。  
 足りない 医師 助詞 状態 助詞 改善 させる 現地の人 とても 喜ぶ  
 [医師が不足している状態の改善は現地の人を喜ばせた。]

つまり、この点に関しても、疑似人魚構文では、名詞によって成立の可否が異なってくる。しかし、連体文での節と名詞の部分が関係節化できるという事実と比べれば、一部とはいえ、疑似人魚構文での“Z 的 Y”が関係節化できないというのは特徴的である。

#### 3.4.4 “Z 的 Y” の前の数量詞の生起

中国語では、数量詞は名詞あるいは名詞句を修飾することができる。次の (50b)、(51b) は、数量詞が連体修飾節を伴う名詞句を修飾する例である。

- (50) a. 莱特小姐 是 [ 教 英语语法 的 老师 ]。(BCC)  
 ライト姉さん COP [教える 英文法 助詞 先生]  
 [ライトお姉さんは英文法を教える先生だ。]  
 [ライト姉さんは英文法を教える先生だ。]
- b. 莱特小姐 是 [ 一个 [ 教 英语语法 的 老师 ] ]。  
 ライト姉さん COP [ 1人 [教える 英文法 助詞 先生]]  
 [ライト姉さんは1人の英文法を教える先生だ。]

(51) a. 故宫 过去 是 [封建帝王 住 的 地方]。(刘月华他 2001 : 481)

故宫 昔 COP [封建帝王 住む 助詞 所]

[故宫は昔帝王が住む所だった。]

b. 故宫 过去 是 [一个 [封建帝王 住 的 地方] ]。

故宫 昔 COP [1つ [封建帝王 住む 助詞 所]]

[故宫は昔1つの帝王が住む所だった。]

(50b) では、数量詞の“一个 (1 人)”が連体修飾節を伴う名詞句“教英语语法的老师 (英文法を教える先生)”を修飾している。(51b) も同様である。

しかし、疑似人魚構文、例えば、(52)、(53) では、“Z 的 Y”の前に数量詞が生起しない。

(52) a. 我们公司 是 [进行 民意调查 之后 再 制定 具体计划

我が社 COP [行なう 住民の意向調査 後 改めて 作る 具体的な計画  
的 打算]。

助詞 予定]

[我が社は住民の意向調査後に具体的な計画を作る予定だ。]

b. \* 我们公司 是 [一个 [进行 民意调查 之后 再 制定

我が社 COP [1つ [行なう 住民の意向調査 後 改めて 作る  
具体计划 的 打算]]。

具体的な計画 助詞 予定]]

[我が社は1つの住民の意向調査後に具体的な計画を作る予定だ。]

(53) a. 当事人 是 [再 找找看 其他工作 的 想法]。

当人 COP [改めて 探す みる 別の 仕事 助詞 考え]

[当人は別の仕事を探してみる考えだ。]

b. \*当事人 是 [一个 [再 找找看 其他工作 的 想法]]。

当人 COP [1つ [改めて 探す みる 別の 仕事 助詞 考え]]

[当人は1つの別の仕事を探してみる考えだ。]

(52b) と (53b) から分かるように、疑似人魚構文では数量詞が後方の“Z 的 Y”

を修飾することができない。

ただし、数量詞が生起しないのは意志・計画を表す名詞を用いる文に限られ、ほかの名詞の場合は数量詞が生起できる。(54) (55) を参照されたい。

(54) a. 我 当时 就 是 [被 糖弹 打中 的 感觉]。(CCL)

私 当时 ほかでもなく COP [られる 糖衣砲弾 命中する 助詞 感じ]

[私はその時糖衣砲弾に撃たれた感じだった。]

b. 我 当时 就 是 [一种 [被 糖弹 打中 的 感觉]]。

私 当时 ほかでもなく COP [1種 [られる 糖衣砲弾 命中する 助詞 感じ]]

[私はその時1種の糖衣砲弾に撃たれた感じだった。]

(55) a. 他 完全 是 [教训 我 的 口吻]。(CCL)

彼 完全に COP [叱る 私 助詞 口振り]

[彼は完全に私を叱る口振りだった。]

b. 他 完全 是 [一副 [教训 我 的 口吻]]。

彼 完全に COP [1つ [叱る 私 助詞 口振り]]

[彼は完全に1つの私を叱る口振りだった。]

要するに、数量詞の生起可否も名詞のタイプにより事情が変わる。ただし、ごく一部であるが、意志・計画類の名詞を用いる疑似人魚構文は数量詞の修飾を受けられないという点において、連体修飾節と大きな違いがあるということが指摘できる。

### 3.4.5 まとめ

本章で述べた疑似人魚構文と連体文の特徴は、次表のようにまとめられる。

表 1 中国語疑似人魚構文と連体文の特徴

項目	特徴	名詞の主題化	“XZ”の独立性	“Z的Y”の関係節化	数量詞の生起
連体文		—	±	+	+
疑似人魚構文を構成する名詞					
意志・計画類	想法、打算、 計画、方針	+	+	—	—
感情・感覚類	感覚、心情、 態度、氣勢、 架势、势头	±	+	—	+
様態・状況類	様子、表情、 口吻、状況、 状態	—	+	±	+
属性・本質類	性格、脾气、 徳性、体质、 体格、構造	—	+	+	+

表 1 から分かるように、疑似人魚構文の統語的な振る舞いは名詞の意味タイプにより異なる。意志・計画類は、主題化、関係節化および数量詞の生起の面で、連体文との間に歴然とした違いがある。また、意志・計画類は日本語の人魚構文と最も多くの共通性を見せる 1 類でもある。一方、属性・本質類は、これらの面で、完全に連体文と同じ統語的な振る舞いをしている。感情・感覚と様態・状況類は、連体文と疑似人魚構文どちらの特徴も併せ持っているため、両者の間に位置する中間的なものであると言える。

以上のことから、本論文は意志・計画類の疑似人魚構文こそが最も人魚構文らしい 1 類であると推測する。以下では、このタイプの文の構造について更に考察を深めていく。

### 3.5 枠構造と疑似人魚構文

中国語では、動詞の前方は文全体をスコープとする副詞や助動詞の生起する位置である。これらの位置に生起する語の中には文末助詞と呼応するものがある。例えば、(56)、(57) のようなものが挙げられる。

(56) 快要……了 [もうすぐ～する]

太阳 快要 下山 了。 (BCC)

日 もうすぐ 沈む SFP

[日はもうすぐ沈むだろう。]

(57) 会……的 [～するはずだ]

他 会 一切 顺利 的。 (BCC)

彼 はず 全て うまくいく SFP

[彼は全てがきつとうまくいくはずだ。]

これらは中国語研究で“框式结构 (枠構造)”と呼ばれている特殊な構造である。「枠構造」について、邵敬敏 (2008 : 353) は“框式结构指前后有两个不连贯的词语相互照应, 相互依存, 形成一个框架式结构。(枠構造とは前後 2 つの連続しない語がお互いに呼応・依存し、1 つの枠のような構造をなしているものである。)”と定義する。

枠構造の観点から例文 (56) の構造を分析すると、次のようになる。

(56') a. 太阳 快要 下山 了。 [日はもうすぐ沈むだろう。]

b. 太阳 下山 。

[日は沈む。]

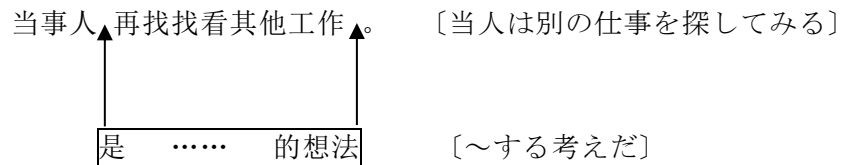
c. 快要……了 [もうすぐ～する]

つまり、(56'a) の文は、(56'b) の“太阳下山 (日は沈む)”を基礎として、(56'c) の枠構造“快要……了 (もうすぐ～する)”がはめ込まれることによって構成されているのである。

本論文は意志・計画類の疑似人魚構文もこれらに近い構造を持つものであると考える<sup>11</sup>。具体的に例文 (58) で言えば、まず“当事人再找找看其他工作 (当人は別の仕事を探してみる)”という文があり、“是……的想法 (～する考えだ)”が後から枠構造のように文にはめ込まれる。図示すると、次のようになる。

<sup>11</sup> “是……的 N”が文中において“快要……了”のような枠構造と同様の位置を占めていることに注意されたい。ただし、動詞前に生起する“是”は副詞でも助動詞でもなく、そして文末にそれと呼応する成分である“的 N”も文末助詞ではないという点で、典型的な枠構造とは異なっている。

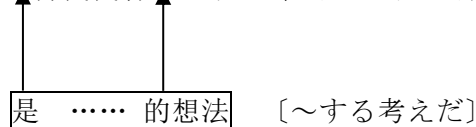
(58) 当事人 是 再找找看其他工作 的想法。[当人は別の仕事を探してみる考えだ。]



このように考えれば、4章で述べた意志・計画類の特徴を統一的に説明できる。

まず、“Z”の中の名詞の主題化に関しては、中国語には日本語のような主題を提示する助詞がないが、語順やポーズなどで主題化を実現することができる。意志・計画類の疑似人魚構文では、“XZ”は独立した文であるため、“Z”の目的語の語順を変えることによって、つまり、文頭に移動することによって主題化することができる。その主題化した文に、(59)のように枠構造がはめ込まれる。

(59) 其他工作，当事人 是 再找找看 的想法。[別の仕事は当人が探してみる。]



また、関係節化の不成立に関しては、枠構造は独立した文形式でのみ成立し、従属節の中には現れることができないという制約から説明ができる<sup>12</sup>。例文(60b)が成立しないのは“是……的想法”(～する考えだ)という構造を無視して関係節化しているからである。

(60) a. 当事人 是 再 找找看 其他工作 的想法。

当人 COP 改めて 探す みる 別の 仕事 助詞 考え

[当人は別の仕事を探してみる考えだ。]

b. \*再 找找看 其他工作 的想法 的 人 很 多。

改めて 探す みる 別の 仕事 助詞 考え 助詞 人 とても 多い

[別の仕事を探してみる考えの人が多。]

<sup>12</sup> “\*如果太阳 快要 下山 了 的话，我们得赶紧回家。”(もし日がもうすぐ沈むなら、私たちは急いで帰らなければいけない。)のように、枠構造は従属節の中に現れることができない。



最後に数量詞が生起しないという点に関して見てみよう。(61a)で、動詞句“(再)找找看(探してみる)”の前に数量詞が生起するためには、(61b)が示すように、“再找找看其他工作的想法(別の仕事を探してみる考え)”が1つの名詞句になっていなければならない。しかし、実際の文の構造は(61c)が示している通りであるため、構造の境界(文と枠構造)を超えて数量詞を付加することになってしまい、不成立となるのである。

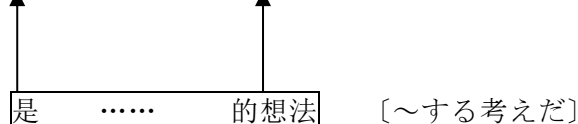
(61) a. 当事人是再找找看其他工作的想法。

[当人は別の仕事を探してみる考えだ。]

b. 当事人 是 [再找找看其他工作的想法]。

当人 COP [別の仕事を探してみる考え]

c. 当事人 再找找看其他工作。 [当人は別の仕事を探してみる]



以上のことから、意志・計画類の疑似人魚構文は独立した文“XZ”に“是……的Y”が枠構造のようにはめ込まれることによって形成されている、という解釈が有効であることが分かった。これは独立した文「XはZ」に「Yだ」が付加されるという日本語の人魚構文の成立過程とも一致している。ここまでの分析に基づき、本論文では、疑似人魚構文の中でも意志・計画類は、真の意味で人魚構文として位置付けることができるものであると結論付けたい。

### 3.6 おわりに

本章では、日本語の人魚構文と対照しながら、中国語に人魚構文はあるかという問題を検証した。その結果、わずかながら、中国語に人魚構文が存在しているということが明らかになった。それは従来中国語研究で連体文と見なされていたものの一部であり、本論文の分類で言えば、意志・計画類に属するものである。この1類の文は、主題化、関係節化および数量詞の生起という面で、連体文との間に歴然とした違いが

ある。日本語の人魚構文も、形式的には連体文に見えるが、実際には連体文と異なる振る舞いをするものであり、その点において、中国語の人魚構文は日本語の人魚構文と非常に似ていると言ってよい。また、統語構造から見ても、独立した文“XZ”に“是……的 Y (～ (の) Y だ)”が枠構造としてはめ込まれた中国語人魚構文の構造は、独立した文「X は Z」に「Y だ」が付加された日本語人魚構文の構造と並行的に捉えることができる。

また、川島 (2017) が指摘するように、典型的な人魚構文と連体文の間には明確な違いはあるが、両者を完全に別の構文と見なすことはできない。人魚構文は両者の典型的な例を両極として、その間に多種多様な用例を含みながら、緩やかに繋がって全体的な体系をなしている。同じような指摘が中国語でも可能である。表 1 から分かるように、意志・計画類の人魚構文と属性・本質類の連体文の間には、両者どちらの特徴も併せ持つ感情・感覚と様態・状況類という中間的なものがある。

つまり、人魚構文と連体文、そして両者の特徴を併せ持つ中間的なものが 1 つの連続体をなしているという点において、日中両言語は共通していると言える。ただし、人魚構文と連体文どちらの性質がより強く現れるかという点に関しては、日本語では文末名詞の文法化の度合いに強く影響される傾向があるが、中国語ではこのような傾向は見られない。この点は次表から見てとることができる。

表 2 日中の典型的な人魚構文が担う意味タイプおよび使用される抽象名詞

日本語		中国語	
意味タイプ	抽象名詞	意味タイプ	抽象名詞
意志・計画	つもり、予定、気 …	意志・計画	想法 (考え)、 打算 (つもり)、 計画 (予定)、 方針 (方針)
感情・感覚	感じ、気持ち、格好 …		
様態・状況	模様、様子 …		
推量	見込み、見通し、段取り …		
伝達	由、話、こと …		
その他	はず、ところ、もの、こと、わけ、次第 …		

表 2 から分かるように、日本語の典型的な人魚構文を構成する抽象名詞の中には、「つもり」、「はず」、「ところ」、「もの」などの文法化が進んだ形式名詞が多く見られる。一方、中国語では、日本語のような形式名詞は存在せず、人魚構文を構成する抽象名詞も文法化がほとんど進んでいないものと考えられる。この点にも、日本語と比べ、中国語で人魚構文が発達していない一因があるように思われる。

## 第4章 日本語と中国語の連体修飾構造を含む属性叙述構文

第3章では、日本語と中国語の人魚構文の特徴を考察した。これらは従来連体修飾構造を含むコピュラ文とされていたが、実際にはコピュラ文と異なる文法機能と統語構造を持つものであった。しかし、日本語にも中国語にも、意味的には人魚構文と似ていながら、文法的にはそれと異なる振る舞いをするコピュラ文が存在する。本章では、そうしたコピュラ文—「属性」を表す抽象名詞からなり、人物の属性を叙述する<sup>13</sup>コピュラ文、およびそれらと同じく人物の属性叙述機能を持つ所有文を対象とし、両言語における類義形式間の異同および日本語と中国語の構文間の異同を明らかにすることを目的とする。

### 4.1 はじめに

ある人物がどういう人間かを語ろうとするとき、我々はしばしばその人物の特徴的な<一部分>や<側面>を引き合いに出す。日本語では、そうした<部分>や<側面>を表す名詞（Y）に連体修飾語（Z）を加えた（1a）（1b）のような表現によって、人物の属性を叙述する場合がある。

- (1) a. 彼はやさしい性格だ。
- b. 彼はやさしい性格をしている。

中国語にも、（1）のような連体修飾構造を含む特定の人物の属性叙述表現がある。（1a）（1b）は中国語ではそれぞれ（2a）（2b）のように“是 shì（コピュラ）”と“有着（所有動詞“有 yǒu”＋持続アスペクト助詞“着 zhe”）”で言い分けることができる。記述の便宜のため、以下（2a）（2b）をそれぞれ“X 是 Z 的 Y”と“X 有着 Z 的 Y”で表記する。

---

<sup>13</sup> ここで言う「叙述」は、益岡（1987, 2000, 2004, 2007, 2008）の一連の研究において文の基本的な類型として提示されている「事象叙述」と「属性叙述」のことを指す。

(2) a. 他 是 那种<sup>14</sup> 温柔的 性格。

彼 COP そのような やさしい 助詞 性格

[彼はそのようなやさしい性格だ。]

b. 他 有着 温柔的 性格。

彼 ある-DURA やさしい 助詞 性格

[彼はやさしい性格をしている]

“X 有着 Z 的 Y”は (3) のように持続アスペクト助詞の“着”が付加されずに用いられる場合もある。

(3) 这 孩子 非常 活泼, 有 勇敢的 性格, 有 幽默感。(CCL)

この子供 とても 元気 ある 勇敢な 助詞 性格 ある ユーモア

[この子はとても元気で、勇敢な性格をしており、ユーモアがある。]

ただし、“着”が付加されていない“X 有 Z 的 Y”のうち、純粋な「特定の人物の属性叙述」に用いられるものは決して多くない。コーパスによる調査の結果<sup>15</sup>、“X 有 Z 的 Y”には以下の傾向が見られることが分かった。第一に、“X 有 Z 的 Y”の用例の中には、(4)の“邓小平有邓小平的性格(鄧小平は鄧小平なりの性格を持つ)”のように、“有”の前後で同一語句を呼応させるものがしばしば現れる。(4)は「鄧小平」という「特定の人物」に対する「属性叙述」ではあるものの、属性の内容として主語と同一の語(“邓小平”)を用いているという点で、特殊な形式と見なすべきものである。中国語においてこのような繰り返し形式が特殊な意味を持つことは、大河内(1997: 21)などで既に指摘されている通りであり、扱いには注意を要する。第二に、(5)の“人人都有值得钦佩的性格(人間は誰でも他人の関心に値する性格を持つ)”のように

<sup>14</sup> 中国語の“X 是 Z 的 Y”では、“温柔(やさしい)”のような形容詞一語だけでは、文が不自然になり、中心名詞に“那种(そのような)”という指示連体詞を付加する必要がある。日中でこのような表面上の差異はあるものの、「～性格だ」と中国語の“是～性格”という中核部分は構造的に対応しているため、両者を比較することは可能であると考え。なぜ“那种(そのような)”の付加が必要であるかについては後節で説明する。

<sup>15</sup> 抽象名詞「性格」「体質」を中心に調査して得られた結果に基づくものである。コーパスから得られた用例の数から言えば、“有～的性格/体質”の数量が、“有着～的性格/体質”を大きく上回っているが、“有～的性格/体質”には本文中で述べるような多様な用例が含まれており、「特定の人物の属性叙述」として用いられるものは一部にとどまる。

主語が特定の個人ではなく、不特定多数になるものが多い。第三に、(6) (7) のように従属節や助動詞（“要（～必要だ）”）を伴い、「非現実」の環境に用いられるものが見しばしばある。ほかに、(8) のように人間以外についての説明に用いられるものも見られる。

(4) 邓小平 有 邓小平 的 性格, 拒 不 相见。 (CCL)

鄧小平 ある 鄧小平 助詞 性格 拒む NEG 会う

[鄧小平は鄧小平なりの性格を持ち、会見を拒否した。]

(5) 我 要 爱 每个人 的 言谈举止, 因为 人人 都

私 ~するつもり 愛する 全ての人 助詞 言動 からだ 誰でも 全て

有 值得 钦佩 的 性格。 (CCL)

ある 値する 関心する 助詞 性格

[私は全ての人々の言動を愛する。人間は誰でも他人の関心に値する性格を持つからだ。]

(6) 没 有 适应 本职工作 的 体质, 提高 劳动生产率 和 发展 生产

NEG ある 適応する 職務 助詞 体質 高める 労働生産性 と 発展する 生産

就 无从谈起。 (CCL)

もし～ならば 話にならない

[もし職務に適応する体質を持たなければ、労働生産性の向上と生産の発展は話にならない。]

(7) 跨 世纪 的 青年一代, 不但 要 具备 较高 的 知识水平,

跨ぐ 世紀 助詞 若い世代 だけでなく 必要だ 備える 高い 助詞 知識水準

还 要 有 强健 的 体质。 (CCL)

も 必要だ ある 強靱な 助詞 体質

[世紀を跨ぐ若い世代は高度の知識のほかに、強靱な体質を持つことも必要だ。]

(8) 我们 喜欢 太阳花, 因为 这 种 花 也 有 战士 一样 的 性格。 (CCL)

私達 好き 日照り草 からだ この CL 花 も ある 兵士 ような 助詞 性格

[私達は日照り草が好きだ。この種の花も兵士のような性格を持つからだ。]

以上のように、“X有Z的Y”の用例には、「特定の人物の属性叙述」とは言えない

ものが多く含まれている。また、「特定の人物の属性叙述」として用いられるものの中にも、繰り返し形式のような特殊なものが含まれる。一方、“着”が付加されている“X有着Z的Y”は(4)～(8)のような用法がほとんど見られない。すなわち、「特定の人物の属性叙述」という機能に即して言えば、“有着”形式のほうが、上述のような多様な制約を持たず、より安定して用いられているということである。そこで、本章では「特定の人物の属性叙述」という目的に即して、“有着”形式のみを考察対象とし、アスペクト助詞“着”を伴わない“有”形式のものは扱わないことにする。

続いて、「している」と“有”の関係についても確認しておきたい。(1b)と(2b)の述語動詞である「している」と“有”は一見すると、対応していないようであるが、どちらも「所有」の意味を表すという点において共通している。角田(1991)は、(1b)の述語動詞「している」は所有の意味を表しており、この「している」と同じく所有を表す「ある」が相補分布をなしているという。角田(1991)は、「性格」のような人間から切り離して認識することのできないいわゆる譲渡不可能な所有物を、誰にでもある「普通所有物」(目、頭、脚、体重、身長など)と、誰にでもあるとは限らない「非普通所有物」(あざ、白髪、ニキビ、風格など)に分類している。そして、この分類から、「している」と「ある」が次のように分布していると指摘している<sup>16</sup>。

表1 「している」と「ある」の相補分布

	修飾要素なし	修飾要素あり
普通所有物	*目をしている *目がある	青い目をしている *青い目がある
非普通所有物	*あざをしている あざがある	*大きなあざをしている 大きなあざがある

中国語では、所有の意味において、日本語の「している」と「ある」のような使い分けがなく、普通所有物と非普通所有物のどちらにも所有動詞の“有”を用いる。要するに、中国語の所有動詞“有”は日本語の所有動詞「する」と「ある」両方に対応している。

<sup>16</sup> 表1は角田(1991:155-159)の説明を一部簡略化しまとめたものである。なお表1は澤田(2003:55)を参考にした。

また、普通所有物と非普通所有物という分類に基づくと、(1a) のような「Xは [Z +Y] だ」の叙述対象も普通所有物に傾く傾向があると考えられる。

(9) 彼は呑気な質だ。

(10) \*彼は高いところに登る勇氣だ。

(11) \*彼はどんな困難にも立ち向かっていく根性だ。

(9) ~ (11) が示すように、「質」のような普通所有物を表す名詞は「Xは [Z+Y] だ」と共起できるが、「勇氣」、「根性」のような非普通所有物を表す名詞は「Xは [Z +Y] だ」と共起できない、または共起しにくい。

したがって、本論文で扱う「属性叙述」は普通所有物を用いた属性叙述に限定されることになる。普通所有物には、「性格」「質」のような抽象名詞のほかに、「顔」「目」などのような具体名詞もあるが、本論文は前者のみを主な考察の対象とし、「顔」「目」などの具体名詞は必要がある場合に限って言及することにする。

上記の「Xは [Z+Y] をしている」と「Xは [Z+Y] だ」およびそれに対応する中国語の“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”はいずれも人物の属性を叙述することができるが、(12) ~ (14) が示すようにそれぞれの構文の成立条件は必ずしも同じではない。

(12) a. 彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。

b. ?他 有着 什么 事情 都 要 说出来 的 性格。

彼 ある-DURA どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格

[彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。]

(13) a. 彼は呑気な質だ。

b. \*彼は呑気な質をしている。

(14) a. 他 是 什么 事情 都 要 说出来 的 性格。

彼 COP どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格

[彼はどんなことでも口に出したがる性格だ。]



b. ?他 有着 什么 事情 都 要 说出来 的 性格。  
彼 ある-DURA どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格  
[彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。]

それでは、人物の属性叙述に用いられる「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」、「X有着Z的Y」と「X是Z的Y」はそれぞれどのような文法的・意味的特徴を持っているのだろうか。また、日本語の両構文と中国語の両構文の間にはどのような違いがあるのか。本章は、日本語と中国語における(1)と(2)のような「連体修飾語+抽象名詞」を用いた人物の属性叙述文を対象とし、これらの問題の解決を試みる。分析にあたっては文を構成する要素や文型といった構文論からのアプローチと、それらの文を取り巻く文脈から得られる情報を取り入れ、各構文の特徴および構文間のすみわけを探っていく。

## 4.2 先行研究とその問題点

### 4.2.1 日本語の両構文に関する先行研究

日本語では、人物の属性叙述に用いられる「Xは[Z+Y]だ」と「Xは[Z+Y]をしている」に関しては、個々の構文を扱う研究はあるが、前者を用いる場合と後者を用いる場合とで、どのような違いが生じるかといった構文間のすみわけを説明する研究はそれほど多くない。

まず、「Xは[Z+Y]をしている」に関して、佐藤(2003)は「度胸」「根性」などの非普通所有物でも(15)のようにこの構文を成り立たせることから、角田(1991)の普通所有物/非普通所有物という分類は有効ではないと指摘した上で、捉えられた対象の「根源的属性」を述べるこそがこの構文の基本的性格であると主張している。「根源的属性」とは「対象XがXとして成り立つ以上は常に有されるXの内在的なものであり、Xの成立後に外的に付与される可能性はない属性である」(佐藤2003:19)としている。したがって、佐藤(2003)では、(16)の「ほくろ」や(17)の「こぶ」などのような根源的属性に該当しないものはこの構文に入れたいとしている。

(15) 太郎は{いい度胸／いい根性／すばらしいセンス}をしている。(佐藤 2003: 26)

(16) \*花子は黒くて大きなほくろをしている。(佐藤 2003: 23)

(17) \*こぶとりじいさんは顔に大きなこぶをしていた。(佐藤 2003: 23)

しかしながら、(16) (17) の不成立は角田 (1991) の普通所有物／非普通所有物の分類からも説明できる。そして同じく根源的属性に該当しないものでも「髪型」であれば問題なく使えるようである。

(18) 夫はやせて、硬い髪を針金のブラシで無理に寝かせたような髪型をしている。(BCCWJ)

また、(15) の「度胸」「根性」などの非普通所有物は「X は [Z+Y] をしている」を成立させることができるが、実際にはその成立条件はかなり制限されており、(15) のように、修飾語が「いい」、「すばらしい」に限定されている場合のみ成立する。(19) (20) のように、修飾語が「いい」、「すばらしい」以外の場合は文が成立しない。

(19) \*彼は上司の指示に従わない度胸をしている。

(20) \*彼はどんな困難にも立ち向かっていく根性をしている。

したがって、本論文は角田 (1991) の普通所有物と非普通所有物という分類はより有効であると考えられる。

ほかに、森山・富永 (2015) は、「X は [Z+Y] をしている」<sup>17</sup>は次のような「属性カテゴリー名詞」を用いるものをアーキタイプとすると述べている。

属性カテゴリー名詞：

「姿，様，色，形」などの描写につながる一般的な名詞

「体つき，背格好，顔つき，目つき，顔立ち，目鼻立ち，面構え」など身体部

---

<sup>17</sup> 森山・富永 (2015) は「属性シテイル構文」という名称を使用している。

分を抱合して様態を表す名詞

「門構え、建て方、枝振り、枝つき、構造」などの構造様態を表す名詞

「性格、気性、性分」など描写に使われる心性を表す名詞

(森山・富永 2015 : 161)

これらのカテゴリー名詞の特徴からも分かるように、この構文は視覚的に見てとれる特徴を表すことが典型的である(森山・富永 2015 : 171)。しかし、なぜ視覚的属性が優位であるのか。その理由については、森山・富永(2015)では言及されていない。

一方、「Xは[Z+Y]だ」に関しては、澤田(2010)は話し手による主体的な属性の付与や評価がこの構文による属性叙述に必要であると述べている。

(21) a. ??彼女は {青い／まるい／大きい} 目だ。

b. ?彼女は {きれいな／かわいらしい} 目だ。

c. 彼女はなんともきれいな目だ。 (澤田 2010 : 264)

澤田(2010)によれば、(21b)のように修飾語が評価に直接結びつく形容詞であったり、(21c)の「なんとも」のように、驚きや関心など属性を付与する主体の感情を伴うなどすればより自然さが上がるという。

興味深い指摘であるが、澤田(2010)は修飾語Zの特徴のみに注目しており、構文に入る名詞Yの特徴を考察していない。本論文は澤田(2010)に基づいて更に名詞Yの性質からこの構文の特徴を分析する。

#### 4.2.2 中国語の両構文に関する先行研究

“有”と“是”は現代中国語で使用頻度の高い動詞として、さまざまな観点からの分析が行われている。しかし、“有”と“是”からなる人物の属性叙述表現“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”に関する詳細な研究はそれほど多くない。

澤田(2010)は日中対照の観点から、“X是Z的Y”の成立条件について、“X是Z的Y”が成立するのは外の関係節の場合に限られ、形容詞一語の場合は文が不自然に

なると述べている。

(22) 他 是 不 会 发 火 的 (那种) 性格。(澤田 2010 : 267)

彼 COP NEG できる 腹を立てる 助詞 そのような 性格

[彼は腹を立てることのできない性格だ。]

(23) \*他 是 { 温柔 / 顽固 / 急躁 } 的 性格。(同上)

彼 COP {やさしい/頑固な/せっかちな} 助詞 性格

[彼は {やさしい/頑固な/せっかちな} 性格だ。]

筆者の語感でも、形容詞一語の場合は“X是Z的Y”が成立しにくい。しかし、澤田(2010)では形容詞一語が成立しない理由については説明されていない。

ほかに、王冬梅(2014)、沈家煊(2016)がマクロな観点から“有”と“是”の違いを考察し、“有”は“叙述”機能を、“是”は“肯定”機能を持つと指摘している。具体的に王冬梅(2014:23-26)では、“有”和“了”相通，都和动作的实现相关，都出现在叙述性的句子里；“是”和“的”相通，都出现在肯定性的句子中，起到加强肯定的作用。“有”和“是”的区别是叙述和肯定的区别（“有”は“了”と相通しており、両者とも動作の実現と関わりを持ち、事象叙述文に用いられる。一方、“是”は“的”と相通しており、肯定文に現れ、肯定の語気を強める働きをしている）と述べられている。したがって、王冬梅(2014)は、“有”と“了”、そして“是”と“的”は(24)(25)のように互いに置き換えられると指摘している。

(24) a. 他 有 进步。

彼 ある 進歩

[彼は進歩した。]

b. 他 进步 了。(王冬梅 2014:25)

彼 進歩 SFP

[彼は進歩した。]

(25) a. 小王 是 黄头发。

王先生 COP 金髪

[王先生は金髪だ。]

b. 小王 黄头发 的。 (王冬梅 2014:23)

王先生 金髮 SFP

[王先生は金髪なのよ。]

しかし、王冬梅 (2014) は、(24a) のような“有”が動詞性の目的語を伴う文のみを扱っており、本論文で扱う“X有着Z的Y”のような名詞性の目的語を伴う文には触れていない。実際に名詞性の目的語を伴う(26)では、“有”は“了”に置き換えられない。

(26) a. 他 有 着 急躁 的 性格。

彼 ある DURA せっかち 助詞 性格

[彼はせっかちな性格をしている。]

b. \*他 急躁 的 性格 了。

彼 せっかち 助詞 性格 SFP

[彼はせっかちな性格になった。]

“是”についても、王冬梅 (2014) で指摘しているように、“是”は常に“的”と互換できるわけではない。

(27) a. 他 是 那种 急躁 的 性格。

彼 COP そのような せっかち 助詞 性格

「彼はせっかちな性格だ。」

b. \*他 那种 急躁 的 性格 的。

彼 そのような せっかち 助詞 性格 SFP

「彼はせっかちな性格なのよ。」

したがって、“叙述”と“肯定”の観点からは、本論文で扱う(28a)と(28b)の違いや(29)(30)の不成立を説明することができない。

(28) a. 他 有着 温柔的 性格。

彼 ある-DURA やさしい 助詞 性格

〔彼はやさしい性格をしている〕

b. 他 是 那种 温柔的 性格。

彼 COP そのような やさしい 助詞 性格

〔彼はそのようなやさしい性格だ。〕

(29) ?他 有着 什么事情 都要 说出来的 性格。

彼 ある-DURA どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格

〔彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。〕

〔彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。〕

(30) \*他 是 温柔的 性格。

彼 COP やさしい 助詞 性格

〔彼はやさしい性格だ。〕

以上から分かるように、個別の構文を扱う研究はあるものの、その詳細については十分な議論が尽くされているとは言い難い所がある。また、それぞれの構文の間にもどのような違いがあるかといった構文間のすみわけを検討するものも十分とは言えない。本論文は先行研究を踏まえながら、改めてそれぞれの構文の特徴および日本語と中国語の表現の間の相違を考察していく。

### 4.3 「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」の特徴

#### 4.3.1 「Xは[Z+Y]をしている」の特徴

「Xは[Z+Y]をしている」の特徴を見る前に、まず動詞の「ている」形の機能を確認しておきたい。主節末尾の動詞の「ている」形はこれまでアスペクトの標識と見なされることが多かった(金田一(1950)、寺村(1984)、工藤(1995)など)。一方、「ている」をアスペクトの標示に特化した形式と見なす分析には限界があることも、多くの研究で指摘されている(定延(2006)、高見・久野(2006)、永井(2017)など)。定延(2006)は「ている」は1つの形式なのに、さまざまなアスペクト的な意味を持っているとした上で、これらを全て含んだ「ている」の一般的な意味は、アスペクト

的な観点では捉え難いと指摘している。そして、「ている」が抽象性を嫌い具体性と結びつく、観察対象を必要とするといった6つの面から、「ている」の意味をアスペクト的に捉えることの問題点を詳しく検討した上で、「ている」は「観察によれば現在これこれこうである」という形で情報源（つまり、いま語られる情報が観察に基づくものなどということ）を表すエビデンシャルである」（定延 2006: 157）と主張している<sup>18</sup>。

本論文は定延（2006）のこの「ている」は観察を表すエビデンシャルであるという考えを支持したい。以下では、「X は [Z+Y] をしている」の統語的特徴の具体的な分析を通して、「ている」のエビデンシャルな意味を検証していきたい。

#### 4.3.1.1 名詞 Y の特徴

本節では「X は [Z+Y] をしている」に入る名詞 Y の特徴を考察する。Y のスロットにどのような特徴を持つ名詞が入るのかを明らかにするため、本論文では BCCWJ を用い、検索アプリケーション「中納言」で下記の方法で検索を行った。

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1) 前方共起：活用形＝連体形  | 2) 前方共起：活用形＝連体形 |
| キー：品詞＝名詞-普通名詞-一般 | キー：語彙素＝「見出し語」   |
| 後方共起 1：書字形出現形＝を  | 後方共起 1：書字形出現形＝を |
| 後方共起 2：書字形出現形＝し  | 後方共起 2：書字形出現形＝し |
| 後方共起 3：書字形出現形＝て  | 後方共起 3：書字形出現形＝て |
| 後方共起 4：語形＝イル     | 後方共起 4：語形＝イル    |

まず、上述の方法 1) で検索した結果得られた名詞から人物の属性を表す名詞計 73 語を選出し、次に選出された 73 個の名詞を方法 2) で検索し、「X は [Z+Y] をして

---

<sup>18</sup> 定延（2006）は、具体的に以下の6つの面から「ている」のアスペクト的把握の問題点を述べている。

- 1) 「ている」が抽象性を嫌い具体性と結びつくことが説明できない
- 2) 「ている」が観察対象を必要とすることが説明できない
- 3) 内部状態表現の人称制限が説明できない
- 4) 「当然の理屈」の例外性が説明できない
- 5) 期間表現のえり好みがあることが説明できない
- 6) 瞬間的なデキゴトを表せることが説明できない

いる」構造を持つと判断される各名詞の出現数を統計する<sup>19</sup>。比較の便宜のため、ここでは名詞の出現数で上位 10 語のみを示すことにする。更に 73 語全ての出現数を合計し、それを 100 とした場合の各語の出現数の割合を併せて示す。詳細は表 2 の通りである。

表 2 「X は [Z+Y] をしている」に入る名詞（上位 10 語）

名詞	出現数（件）	割合（％）
顔	306	63.9
目	37	7.7
体	22	4.6
顔付き	16	3.3
顔立ち	12	2.5
姿	9	1.9
性格	7	1.5
肌	7	1.5
身形	6	1.3
瞳	5	1.0
その他	52	10.9
合計	479	100.0

表 2 から分かるように、「X は [Z+Y] をしている」に入る名詞の中には、人物の「顔」「目」「体」のような視覚的に捉えられる名詞の割合が大きく、全体の出現数の 8 割以上を占めている。一方、「性格」のような視覚的に捉えられにくい名詞の割合は非常に少ない。視覚のほかに、味覚的、聴覚的に捉えられる名詞もあるが、それぞれ「味」（1 例）と「声」（2 例）しか見つからなかった。また、人物の属性を表す名詞で

<sup>19</sup> 統計にあたっては、「中西は、しんけんな顔をしていた」のように、完全に「X は [Z+Y] をしている」の形で現れ、かつ文が終止するもののみを対象とし、「田城は、六年もの懲役のせいで、体が弱っていたのであろう。ひどく憔悴し、病人のように青白い顔をしていた」のような、「は」で提示される主題と属性を表す名詞が同一の文に現れていないものと、「中禅寺はいつも不機嫌な顔をしているから、つき合いの短い物にはその機嫌の良し悪しは判らないのだ」と、以前関口が云っていた」のような「X は [Z+Y] をしている」が複文に用いられるものなどは対象から除外した。



はないが、出現数が比較的が多い「形」(55例)と「色」(22例)も視覚的に捉えられる名詞である。こうした名詞の偏りに注目するならば、この構文にとって視覚的属性が優位であることは明らかだろう。これは「ている」の観察を表すエビデンシャルと密接に関わっていると考えられる。なぜなら、視覚的に捉えられる属性を述べることはそれ自体が観察を述べることにほかならないからである。

それでは、視覚的に捉えられにくい「性格」の出現はどのように解釈すればよいだろうか。これも「ている」の観察を表すエビデンシャル的意味と関係しているのだろうか。次節では「性格」を中心に、「Xは[Z+性格]をしている」の特徴を考察しながら、「ている」のエビデンシャル的意味との関わりを検証していく。

#### 4.3.1.2 叙述の根拠の有無

「Xは[Z+性格]をしている」では、「性格」を導き出す根拠が存在する。その根拠は文脈に現れることが多い。

(31) マコは惚れっぽい性格をしていた。こんなこともあった。『いれーぬ』に飲みに行く……新しい婚約者ができたという。聞くと羽田から浜松町までのモノレールの中で知り合い、その乗ってる最中にキスをして結婚することを決めたということだった。(BCCWJ)

(32) そんなエッチな言葉は、聞いたことがなかったから。平気で口にするなんて、よっぽどいやらしい性格をしているんだわ。こんな人がお兄さんだなんて、あみ、嫌だよー、悲しすぎるよー (BCCWJ)

(31) では、「惚れっぽい性格」を導き出す根拠は「こんなこともあった」という話者の経験した具体的な事柄で示されている。(32) では、「いやらしい性格」を導き出す根拠は「エッチな言葉を平気で口にする」という出来事によって提示されている。

もちろん、根拠が文脈の中で示されていない場合もある。しかし、日本語母語話者によれば、根拠が文脈の中で明示されていない場合でも、発話者が「Xは[Z+性格]をしている」を用いる際、その「性格」と関連する何らかのエピソードを

想起するという。例えば、(33)では、「仲秋は果敢な性格をしている」根拠が文脈には現れていないが、話者がこの文を述べる際、何らかのエピソード（例えば、仲秋が沢山の選択からすぐ結論を出した）を思い浮かべる。

(33) 仲秋は風貌も雄々しく、果敢な性格をしている。一族の中では武将として最も頼りになる男だった。ただ、侍所頭人の要職にある。それを辞任させて同道することに、了俊はためらいを感じていた。(BCCWJ)

したがって、叙述の根拠が想起しにくい状況では、「X は [Z+性格] をしている」が用いられにくい。(34) と (35) を比較してみよう。

(34) (<連続殺人犯逮捕>の顔写真付きの記事を一目見て)

??この犯人は残忍な性格をしている。

(35) (上の記事に出ている殺人犯に関する詳しいプロフィールを見て)

この犯人は残忍な性格をしている。<sup>20</sup>

(34) と (35) を比べてみると分かるように、犯人に関する詳しいプロフィールを見た場合、言い換えれば、話し手自ら観察して十分な根拠を得た場合、「この犯人は残忍な性格をしている」と言うのは極自然である。一方、犯人に関しては、「連続殺人」という単純に報道から得た情報をもとに、「犯人は残忍な性格をしている」と述べるのはかなり不自然である。このことから「X は [Z+性格] をしている」によって人物の「性格」を述べる際、話し手が常に自分が観察した、あるいは経験した出来事を根拠にして叙述していることが分かる。これも「ている」の観察を表すエビデンシャル的意味と一致している。

叙述の根拠と関連するもう1つの現象は、「X は [Z+性格] をしている」は、話し手が観察した個別の出来事のような具体性の高い修飾語との親和性が高いということである。(36)のように、「明るい」のような抽象概念を表す修飾語は、「X は [Z+性

---

<sup>20</sup> (34) と (35) について、日本語母語話者に対するアンケート調査を行なったところ、(34) は7人中4人がかなり不自然、2人が非文と判断している。それに対して、(35) は7人全員が自然と判断している。

格]をしている」と「Xは[Z+性格]だ」どちらとも共起することができる。しかしながら、修飾語の具体性が高まると、「Xは[Z+性格]をしている」は問題なく成立するのに対して、「Xは[Z+性格]だ」は容認度が下がる。(37)のaとbを比較してみよう。

(36) a. 花子は明るい性格をしている。

b. 花子は明るい性格だ。

(37) a. 彼女は母に対してすら海外に留学したいと言えない性格をしている。

b. 彼女は母に対してすら海外に留学したいと言えない性格だ。

(37)のa、bについて、日本語母語話者に対するアンケート調査を行なったところ、7人中5人がどちらも言えるが、aとbを比べるとaの方がより言いやすいと判断している。他方、残る2人はどちらも不自然と判断しているが、そのうちの1人は、bと比べるとaの方がまだ容認できると判断している。以上から、「Xは[Z+性格]だ」と比べると、「Xは[Z+性格]をしている」の方が(37)のような具体性の高い修飾語との親和性がより高いということが言えるだろう。「ている」は観察を表すエビデンシャルであるため、観察した出来事がそのまま修飾語になりやすいのである。

#### 4.3.1.3 否定文での使用可否

「Xは[Z+性格]をしている」による属性叙述は(38)のように、否定文に使われにくい。それに対して、「Xは[Z+性格]だ」は(39)のように問題なく否定文に用いることができる。

(38) a. 彼はやさしい性格をしている。

b. ??彼はやさしい性格をしていない。

(39) a. 彼はやさしい性格だ。

b. 彼はやさしい性格ではない。

なぜ「Xは[Z+Y]をしている」が否定文に用いられにくいのか。その背景に、「ている」が観察のエビデンシャルであることが関わっていると考えられる。なぜかと言えば、「ている」は観察のエビデンシャルである以上、普通は「観察」自体を否定することはできないと考えられるからである。

ただし、次のような一時的な状態を表す場合は、「している」の否定が成立する。

- (40) a. 彼は怖い顔をしている。  
b. 彼は怖い顔をしていない。

なぜ「性格」のような恒常的属性を表す場合は否定が成立しにくく、「怖い顔」のような一時的状態を表す場合は否定が成立するのかわについては、今後更に検討する必要がある。ここではひとまず否定文での使用に制限があることを指摘するだけに止まっておく。

以上では、まず「Xは[Z+Y]をしている」に入る名詞の特徴を考察した。結果として、視覚的に捉えられる名詞が優勢であることが明らかになった。続いて、視覚的に捉えられにくい「性格」を中心に、叙述の根拠の有無、否定文での使用可否から「Xは[Z+性格]をしている」の特徴を分析した。「Xは[Z+Y]をしている」によって人物の「性格」を述べる際、常に話し手の観察に基づいた根拠が存在し、その属性は否定することが難しい。これらの特徴から、「Xは[Z+Y]をしている」による属性叙述には話し手の観察が必要であると結論付けられる。

#### 4.3.2 「Xは[Z+Y]だ」の特徴

「Xは[Z+Y]をしている」と異なり、「Xは[Z+Y]だ」は必ずしもエビデンシャルリティと関わらない。前節で述べたように、叙述の根拠が想起しにくい場合、「Xは[Z+Y]をしている」が用いられない。一方、「Xは[Z+Y]だ」はこのような制約を持たない。(34')と(35')を比較してみよう。

(34') (<連続殺人犯逮捕>の顔写真付きの記事を一目見て)

a. この犯人は残忍な性格だ。<sup>21</sup>

b. ??この犯人は残忍な性格をしている。

(35') (上の記事に出ている殺人犯に関する詳しいプロファイリングを見て)

a. この犯人は残忍な性格だ。

b. この犯人は残忍な性格をしている。

(34') と (35') から分かるように、「X は [Z+Y] をしている」と異なり、「X は [Z+Y] だ」は根拠があってもなくても用いることができる。

また、前述のように否定文での使用に制限があるかどうかという点においても、「X は [Z+Y] だ」は「X は [Z+Y] をしている」と異なる振る舞いをしている。(41) のように、「X は [Z+Y] をしている」は否定文に使われにくいのに対して、「X は [Z+Y] だ」は問題なく否定文に用いられる。

(41) a. 彼はやさしい性格ではない。

b. ??彼はやさしい性格をしていない。

これらの特徴から分かるように、観察のエビデンシャルティは「X は [Z+Y] だ」には働かない。むしろ、澤田 (2010) で指摘されているように、「X は [Z+Y] だ」による属性叙述には話し手による主体的な属性の付与や評価が必要である。これはまず修飾語の特徴から見てとれる。

(42) a. ??彼女は {青い/まるい/大きい} 目だ。

b. ?彼女は {きれいな/かわいらしい} 目だ。

c. 彼女はなんともきれいな目だ。 (澤田 2010 : 264)

澤田 (2010) によれば、「青い」「まるい」「大きい」のような色、形、大きさを表す

---

<sup>21</sup> (34') の a について、日本語母語話者に対するアンケート調査を行なったところ、7人中5人が自然と判断しており、2人が不自然と判断している。一方で、b が a よりも自然だとする人はいなかった。したがって、aの方が容認度が高いのだと考えられる。

客観的形容詞が修飾語になる(42a)はかなり不自然であり、(42b)のように修飾語が評価に直接結びつく形容詞であったり、(42c)の「なんとも」のように、驚きや関心など属性を付与する主体の感情を伴うなどすればより自然さが上がるという。

実は修飾語のほかに、「Xは[Z+Y]だ」に入る名詞の性質からもこの特徴を窺うことができる。3.1.1節で述べたように、「Xは[Z+Y]をしている」は視覚的に捉えられる属性を表す名詞が圧倒的に多く用いられる。しかし、(43)に示すように、これらの名詞は「Xは[Z+Y]だ」に現れにくい。

- (43) a. ??彼女は {小さい顔／大きい目／高い鼻／長い髪／白い肌} だ。  
b. 彼女は {小さい顔／大きい目／高い鼻／長い髪／白い肌} をしている。

これは恐らく視覚的に捉えられる名詞が本質的に形状や色、大きさ、長さなどの客観的な属性と結びつきやすいことと、「Xは[Z+Y]だ」の話し手による主体的な属性の付与や評価を表すこととが、意味的に矛盾しているからだと思われる。これらの名詞が「Xは[Z+Y]だ」に入って文を成立させるためには、(42c)のように話し手の感情や主観的な評価を表す要素を付け加えなければならない。

実際に「Xは[Z+Y]だ」においてどのような名詞がよく使われるのかを明らかにするために、前述の「Xは[Z+Y]をしている」と同じような検索方法で「Xは[Z+Y]だ」と共起し、言及対象Xの属性を表す名詞を検索した。その結果、125個の人物の属性を表す名詞を得た。「Xは[Z+Y]をしている」との比較の便宜上、ここでも上位10語のみを示すことにする。また、「Xは[Z+Y]をしている」と同様に、ここで125語全ての出現数を合計し、それを100とした場合の各語の出現数の割合も併せ示す。詳細は表3の通りである。

表3 「Xは[Z+Y]だ」に入る名詞（上位10語）

名詞	出現数(件)	割合 (%)
性格	54	14.6
顔	48	13.0
タイプ	42	11.4
身	29	7.8
運命	19	5.1
質	19	5.1
性分	18	4.9
顔付き	13	3.5
口	12	3.2
肚	12	3.2
その他	104	28.1
合計	370	100.0

表3から分かるように、視覚的に捉えられやすい名詞が優位である「Xは[Z+Y]をしている」と異なり、「Xは[Z+Y]だ」は視覚的に捉えられる名詞（例えば、「顔」「顔付き」など）と視覚的に捉えられにくい名詞（例えば、「性格」「タイプ」「運命」など）どちらもとることができる。ただし、「Xは[Z+Y]をしている」と比べると、視覚的に捉えられない名詞と共起しやすい傾向が見られる。例えば、「性格」は「Xは[Z+Y]だ」に54例（14.6%）見つかったが、「Xは[Z+Y]をしている」には7例（1.5%）しか見つかっていない。また、「Xは[Z+Y]だ」に出現数が比較的多い「タイプ」「運命」「質」が「Xは[Z+Y]をしている」には1例も出ていない。反対に、「Xは[Z+Y]をしている」に出現数が比較的多い「目」「体」は、「Xは[Z+Y]だ」では出現数が少ない。「Xは[Z+Y]だ」には、例えば、「顔」「口」「肚」などのように、一見すると出現数が比較的多い視覚的名詞もあるようである。しかしながら、これらの視覚的名詞の具体的な使い方を見てみると分かるように、いずれも比喩的な意味として用いられる傾向がある。具体的に言えば、「顔」が「Xは[Z+Y]をしている」に用いられる場合、(44)のように、視覚的に捉えられる具体名詞としての「顔」

であるが、「Xは[Z+Y]だ」に現れる場合、ほとんどは(45)のように表情を表す換喩(メトニミー)として用いられている。

(44) 睦月は短いまつ毛がまっすぐにそろっていて、きれいな顔をしている  
(BCCWJ)

(45) 最初、向こうは怖い顔だった。それが、しばらくすると、ふたりで冗談を言い合いながら、笑っているんです。(BCCWJ)

同様に、視覚的に捉えられる「口」と「肚」も「Xは[Z+Y]だ」に用いられる際、(46)(47)のように、それぞれ「タイプ」の意味と、「心づもり」の比喩的な意味として用いられている。つまり、いずれも視覚的に捉えられる具体名詞として用いられているのではなく、抽象的な意味として用いられているのである。

(46) 小坂はアルコールのほうもいける口である。(BCCWJ)

(47) 谷社長は、日本に帰らず、一段落したらまたそこで事業再開する肚だった。  
(BCCWJ)

以上から分かるように、「Xは[Z+Y]だ」は視覚的に捉えられる名詞と視覚的に捉えられない名詞どちらもとることができるが、「Xは[Z+Y]をしている」と比べ、視覚的に捉えられない名詞と共起しやすい傾向がある。一方、視覚的に捉えられる名詞と共起する場合は意味的な制約がある。視覚的に捉えられる名詞と異なり、視覚的に捉えられない名詞は、本質的に形状や色、大きさ、長さなどの客観的な属性と結びつきにくく、属性の叙述に必然的に話し手の評価を内在していることになる。そうした性質が「Xは[Z+Y]だ」の評価機能と相性がよいのだと考えられる。

以上の分析から、話し手の観察に基づき、人物の属性を叙述する「Xは[Z+Y]をしている」と異なり、「Xは[Z+Y]だ」は人物の属性を主体的に評価する機能を持つことが明らかになった。



### 4.3.3 まとめ

3 節では、観察のエビデンシャルティの観点から人物の属性叙述に用いられる「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」の特徴を考察した。結果を表4にまとめる。

表4 「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」の特徴

エビデンシャルティ性	構文	Xは[Z+Y]をしている	Xは[Z+Y]だ
	視覚的に観察できる名詞が優勢	+	-
	叙述の根拠がある	+	±
	否定文での使用に制限がある	+	-

表4に示したように、「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」は観察のエビデンシャルティの点において違いがある。「Xは[Z+Y]をしている」は話し手の観察に基づく内容しか述べられない。そのため、当該の構文に現れる名詞は視覚的に観察できるものが優勢であり、叙述の根拠を必要とする。そして、その根拠は文脈に現れる場合が多い。また、「観察」そのものを否定することは難しい。一方、「Xは[Z+Y]だ」はエビデンシャルティの面において「Xは[Z+Y]をしている」のような制約を持たない。上述のように、「Xは[Z+Y]だ」はむしろ視覚的に捉えられない名詞と共起しやすく、叙述の根拠も必要とせず、根拠があってもなくてもよい。そして否定文にすることもできる。この構文は、観察のエビデンシャルティではなく、むしろ話し手による主体的な属性の付与や評価に基づいて成立するものである。

本節の分析を通して、日本語の「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」は観察のエビデンシャルティの点に違いがあることが明らかになった。中国語の“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”もこの点において違いがあるのだろうか、もしなければ中国語の両構文はどのような特徴を持つのだろうか。以下、4.4節では中国語の“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”の特徴を考察していく。

#### 4.4 “X 有着 Z 的 Y” と “X 是 Z 的 Y” の特徴

本節では、まず中国語の“X 有着 Z 的 Y”と“X 是 Z 的 Y”が観察のエビデンシャルティの点において違いが見られるかどうかを検証していく。

(48) 他 有着 [圆圆的 脸 / 大大的 眼睛 / 悲惨的 命运 / 开朗的 性格]。

彼 ある-DURA [真丸な 顔 / パッチリとした 目 / 悲惨な 助詞 運命 / 明るい 助詞 性格]

[彼は [真丸な顔 / パッチリとした目 / 悲惨な運命 / 明るい性格] をしている。]

(49) a. ??他是 [辨识度 很 高的 脸 / 能 看穿 人心的 眼睛 /

彼 COP [認識度 とても 高い 助詞 顔 / できる 見通せる 人の心 助詞 目 /

四处流浪 的 命运] <sup>22</sup>。

方々を流浪する 助詞 運命]

[彼は [特徴のある顔 / 人の心を見通せる目 / 方々を流浪する運命] だ。]

b. 他是 [什么 事情 都 要 说出来 的 性格 /

彼 COP [どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格 /

怎么 吃 都 不 会 胖 的 体质]。

どう 食べる も NEG だろう 太る 助詞 体質]

[彼は [どんなことでも口に出したがる性格 / どう食べても太らない体質] だ。]

(48) に示したように、“X 有着 Z 的 Y”は“脸 (顔)”、“眼睛 (目)”のような視覚的に観察できる名詞も、“命运 (運命)”、“性格 (性格)”のような視覚的に観察できない名詞も自由にとれる。一方、“X 是 Z 的 Y”は (49a) のように、“脸 (顔)”、“眼睛 (目)”のような視覚的に観察できる名詞も、“命运 (運命)”のような視覚的に観察できない名詞もどちらもとりにくい。実際に、“X 是 Z 的 Y”は (49b) のように、“性格

<sup>22</sup> (49a) について、中国北方出身の 7 人の母語話者に対するアンケート調査を行ったところ、全員が不自然と判断した。CCL で検索した結果でも、“眼睛 (目)”と“命运 (運命)”は 1 例も検出されず、“脸 (顔)”は下記のような並列という特殊な文脈に用いられるものが、1 例のみ見つかった。

天亮以后，他看清了屋里的人们，有些穿着矿工服装，有些穿着农民服装，他们都是蓬着头发，菜色的脸，眼睛陷在深深的眼眶里。(CCL) (夜が明けたら、彼は部屋の中の人々をはっきり見ることができた。彼らの一部が鉱夫の服装をしており、一部が農民の服装をしていた。誰もかれも髪が乱れていて、青白い顔で、目が落ちくぼんでいた。)

しかしながら、“??他们都是菜色的脸。(誰もかれも青白い顔だ。)”のように単独で現れる場合は、かなり不自然である。

(性格)、“体质 (体質)” など極少数の名詞しかとれず、エビデンシャルティとは全く別の制約があるようである。

また、(50) に示すように、“X 有着 Z 的 Y” は“从这件事也可以看出 (このことから分かるように)” のような根拠を示す成分と共起できない。一方、“X 是 Z 的 Y” は根拠があってもなくても文が成立する。

(50) a. (\*从 这 件 事 也 可 以 看 出), 他 有 着 开 朗 的 性 格。

(から この CL こと も できる 分かる) 彼 ある-DURA 明るい 助詞 性格  
[(このことから分かるように) 彼は明るい性格をしている。]

b. (从 这 件 事 也 可 以 看 出), 他 是 那 种 开 朗 的 性 格。

(から この CL こと も できる 分かる) 彼 COP そのような 明るい 助詞 性格  
[(このことから分かるように) 彼は明るい性格だ。]

更に、否定文に用いられるかどうかという点において、(51) のように、“X 有着 Z 的 Y” は否定文に用いられない。一方、“X 是 Z 的 Y” は否定文に用いられる。

(51) a. \*他 没 有 着 温 柔 的 性 格。

彼 NGR ある-DURA やさしい 助詞 性格  
[彼はやさしい性格をしていない。]

b. 他 不 是 那 种 温 柔 的 性 格。

彼 NGR COP そのような やさしい 助詞 性格  
[彼はそのようなやさしい性格ではない。]

上述のエビデンシャルティの観点から見られた中国語の両構文の特徴をまとめると、表 5 の通りになる。

表 5 観察のエビデンシャリティと中国語の両構文

構文 エビデンシャリティ性	X 有着 Z 的 Y	X 是 Z 的 Y
視覚的に観察できる名詞が優勢	—	— <sup>①</sup>
叙述の根拠がある	— <sup>②</sup>	±
否定文に用いられにくい	+	—

①視覚的に観察できるかどうかと関係なく、使える名詞が極めて限られている。

②叙述の根拠を表す成分と共起できない。

表 5 から分かるように、中国語の両構文は観察のエビデンシャリティの点において日本語のような違いが見られなかった。むしろ観察のエビデンシャリティと関わらないと言える。

“X 有着 Z 的 Y” と “X 是 Z 的 Y” はエビデンシャリティの面では違いが見られなかったが、談話機能の面では大きな違いがある。以下では、“X 有着 Z 的 Y” と “X 是 Z 的 Y” 両方を成立させる “性格” を中心に談話機能の面から両構文の特徴を考察していく。

#### 4.4.1 “X 有着 Z 的 Y” と “X 是 Z 的 Y” の談話機能

“X 有着 Z 的 Y” と “X 是 Z 的 Y” の談話機能を考察する前に、まず両構文の修飾語の特徴を整理しておきたい。

##### 4.4.1.1 “X 有着 Z 的 Y” と “X 是 Z 的 Y” の修飾語の特徴

まず、“X 有着 Z 的 Y” がどのような修飾語を伴うかを見ていく。

- (52) a. 他 有着 [ 温柔 / 倔强 / 坚韧不拔 ] 的 性格。  
 彼 ある-DURA [ やさしい / 強情な / 粘り強い ] 助詞 性格  
 [ 彼は [ やさしい / 強情な / 粘り強い ] 性格をしている。 ]

b. ? 他 有着 什么事情 都要 说出来的 性格。

彼 ある-DURA どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格

[彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。]

(53) a. 他 有着 强健 的 体质。

彼 ある-DURA 強靱な 助詞 体質

[彼は強靱な体質をしている。]

b. ? 他 有着 怎么 吃 都不会 胖 的 体质。

彼 ある-DURA どう 食べる も NEG だろう 太る 助詞 体質

[彼はどう食べても太らない体質をしている。]

(52) (53) のように、“温柔 (やさしい)”、“强健 (強靱な)” のような 2 音節形容詞や“坚韧不拔 (粘り強い)” のような四字成語は問題なく修飾語になるが、“什么事情都要说出来 (どんなことでも口に出したがる)”、“怎么吃都不会胖 (どう食べても太らない)” のように習慣的行動の側面から中心名詞の内容を説明する成分は修飾語になりにくい。実際に、“性格 (性格)” を中心名詞にとる“X 有着 Z 的 Y”を CCL で検索した結果、(52b) のように習慣的行動の側面から中心名詞“性格 (性格)”の内容を説明する成分が修飾語になる用例は 1 例も見つからなかった。(52a) のように 2 音節形容詞および四字成語が修飾語になるものがほとんどである<sup>23</sup>。

反対に、“X 是 Z 的 Y”は (54) (55) のように、“温柔 (やさしい)”、“强健 (強靱)” のような形容詞一語だけでは修飾語にならず、むしろ“什么事情都要说出来 (どんなことでも口に出したがる)”、“怎么吃都不会胖 (どう食べても太らない)” のような中心名詞の内容を具体的に説明する成分や“那种 (そのような)”の付加が必須である。形容詞一語だけが修飾語になる“X 是 Z 的 Y”は CCL で 1 例も見つからなかった<sup>24</sup>。

<sup>23</sup> (52) と (53) について、中国北方出身の 7 人の母語話者に対するアンケート調査を行った結果、7 人中 4 人が a は自然、b は不自然と判断している。残りの 3 人は a、b どちらも言えるが、a の方がより自然と判断している。

<sup>24</sup> 形容詞一語だけが修飾語になる (54a) (55a) について、中国北方出身の 7 人の母語話者全員が非文と判断している。

(54) a. \*他 是 温柔 的 性格。

彼 COP やさしい 助詞 性格

[彼はやさしい性格だ。]

b. 他 是 什么 事情 都 要 说出来 的 性格。

彼 COP どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格

[彼はどんなことでも口に出したがる性格だ。]

c. 他 是 那种 温柔 的 性格。

彼 COP そのような やさしい 助詞 性格

[彼はそのようなやさしい性格だ。]

(55) a. \*他 是 强健 的 体质。

彼 COP 強靱な 助詞 体質

[彼は強靱な体質だ。]

b. 他 是 怎么 吃 都 不 会 胖 的 体质。

彼 COP どう 食べる も NEG だろう 太る 助詞 体質

[彼はどう食べても太らない体質だ。]

c. 他 是 那种 强健 的 体质。

彼 COP そのような 強靱な 助詞 体質

[彼はそのような強靱な体質だ。]

“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”の修飾語におけるこのような違いは両構文の談話機能と深く関わっているものと思われる。以下、それぞれの構文の談話機能を検討していく。

#### 4.4.1.2 “X有着Z的Y”の談話機能

“X有着Z的Y”はよく複数の属性が並列的に現れる文脈に用いられる。

(56) 他 身材 高大, 有着 深古铜色 的 皮肤, 一双 灰蓝色 的 眼睛。 (CCL)

彼 身長 高い ある-DURA 濃い褐色 助詞 肌 1つ 納戸色 助詞 目

[彼は背が高く、濃い褐色の肌、納戸色の目をしていた。]

また、(57) (58) のように、属性の列挙ではなく、その属性に関するエピソード（波線の部分）を述べる文脈にも用いられる。これは一見すると、日本語の「している」が叙述の根拠となるエピソードとともに用いられることと類似しているように感じられる。

(57) 黄阳光 来自 广西桂林, 童年时 因 误 撞 高压电线 而

黄陽光 から 広西省桂林 子供の頃 ため 誤る ぶつかる 高压線 接続詞

失去 双臂。但 他 的确 人如其名, 虽然 无 臂, 却

失う 両腕 しかし 彼 確かに その名の通り にも関わらず ない 腕 むしろ

有着 阳光 一般 开朗 的 性格。他 不仅 能 生活

ある-DURA 陽の光 ような 明るい 助詞 性格 彼 だけでなく できる 生活

自理, 还能 做 许多 田里 的 事, 甚至 还能 用 双脚

自立する も できる やる 沢山 畑 助詞 こと 更に も できる 使う 両足

编织。 生活中 的 黄阳光 和 舞台上 的 黄阳光 一样 让

織物をする 生活中 助詞 黄陽光 と 舞台上 助詞 黄陽光 同様に させる

人 感动。 (CCL)

人 感動する

[黄陽光は広西省桂林の出身であり、子供の頃高圧線に誤って接触し両腕を失った。しかし、彼はその名の通り、腕がないにも関わらず、陽の光のような明るい性格をしていた。彼は自立した生活を送れるだけでなく、畑仕事もでき、更に両足で織物をすることもできた。実生活での黄陽光も舞台上の黄陽光と同様に、人を感動させた。]

(58) 黄铁 是 革命烈士 黄负生 的 女儿, 自幼 由 陈潭秋、恽代英

黄鉄 COP 革命烈士 黄負生 助詞 娘 小さい頃 によって 陳潭秋 恽代英

等 抚养长大……黄铁 是 个 刚直不阿 的 女性, 有着 倔强

など 育てる 黄鉄 COP CL 剛直 助詞 女性 ある-DURA 強情

的 性格，面对 邪恶，她 没有 屈服。尽管 当时 环境  
助詞 性格 直面する 悪 彼女 NEG 屈服 にも関わらず 当時 環境  
十分 恶劣，重病缠身，但 她 置 个人 安危 于 不顾，  
とても 劣悪 重病を抱える しかし 彼女 置く 個人 安危 に 度外視する  
一次又一次地 给 党中央、云南省委 写 信。(CCL)

何度も-接尾辞 に 党中央 雲南省委員会 書く 手紙

[黄鉄は烈士である黄負生の娘であり、陳潭秋、憚代英などに育てられていた……黄鉄は剛直な女性で、強情な性格をしており、悪に対して彼女は屈服しなかった。当時は環境が劣悪で、重病を抱えてもいたが、彼女は自分の状況を度外視して、何度も党中央や雲南省委員会に手紙を書いた。]

しかし、“X 有着 Z 的 Y” を取り巻く文脈を詳しく見ると、そのエピソードは、叙述の根拠として用いられているのではなく、人物の属性描写の補足として用いられていることが分かる。(57) (58) の文脈では、まず登場人物が現れており、それからその出身や身分、人柄などの属性が述べられる。その属性叙述の中で人物の性格が他の属性と並列して列挙され、更にその性格と関連するエピソードが語られるという流れになっている。要するに、“X 有着 Z 的 Y” が置かれた文脈は「登場人物→人物の属性→人物の性格→性格と関連するエピソード」というように、大きな視野から小さな対象、外観から内面にズームインしている。それによって、人物の属性描写が首尾よく実現されているのだと考えられる<sup>25</sup>。“X 有着 Z 的 Y” に現れるエピソードは、属性を叙述するための根拠ではなく、人物の属性連続描写の一環として引き出されているだけにすぎない。この点において、“X 有着 Z 的 Y” に現れるエピソードは日本語の「している」のそれとは異なっている。また、属性描写の補足として用いられているという意味では (57) (58) のエピソードは背景情報であると言え、後に述べる“X 是 Z 的 Y” の関連エピソードとも質的な違いがある。このような背景情報は場合により、削除しても文の成立に支障をきたさない。例えば、(57) はエピソード部

<sup>25</sup> 澤田 (2006) は“来到楼下，在候诊室里站着神情沮丧的兼彦（階下に降りると、診察の待合室にはがっかりした表情の兼彦が立っていた）。”のような定名詞存現文はズームイン効果によって人物の表情や心情を描写するものだと指摘している。本稿は“X 有着 Z 的 Y” も定名詞存現文と同じようなズームイン効果を持つと考える。



分を削除しても成立する。

(57) 黄阳光来自广西桂林，童年时因误撞高压电线而失去双臂。但他的确人如其名，虽然无臂，却有着阳光一般开朗的性格 [φ]。生活中的黄阳光和舞台上的黄阳光一样让人感动。

[黄陽光は広西省桂林の出身であり、子供の頃高圧線に誤って接触し両腕を失った。しかし、彼はその名の通り、腕がないにも関わらず、陽の光のような明るい性格をしていた [φ]。実生活での黄陽光も舞台上の黄陽光と同様に、人を感動させた。]

もちろん、(59) のように属性の並列描写のみで、「性格」と関連するエピソードが現れない場合もある。

(59) 阳辉 是个 憨厚 而 少言寡语 的 小伙子，陈燕 快乐、活泼、  
陽輝 COP CL 実直な そして 無口 助詞 青年 陳燕 朗らか 明るい  
快言快语，有着 川妹子 火辣 的 性格。(CCL)

率直 ある-DURA 四川娘 激しい 助詞 性格

[陽輝は素直で無口な青年であり、陳燕は明るく、率直で、四川娘らしい激しい性格をしていた。]

上述のように、“X 有着 Z 的 Y” は人物の属性を描写する機能を持っている。「描写」というのは、小野 (2008) が述べるようにある人物・事物の有り様を「描く」ことである。そのため、“X 有着 Z 的 Y” は (60) (61) のように“温柔 (やさしい)”、“强健 (強靱な)” のような 2 音節形容詞、“坚韧不拔 (粘り強い)” のような四字成語など、事物の有り様を描く修飾語との相性がよい。一方、“什么事情都要说出来 (どんなことでも口に出したがる)”、“怎么吃都不会胖 (どう食べても太らない)” のような習慣的行動を表す修飾語と共起しにくい。恐らく“什么事情都要说出来 (どんなことでも口に出したがる)” のような節形式は、事態に対する話者自身の分析的な理解が含まれるものであるため、描写にはそぐわないのだと思われる。

(60) a. 他 有着 [ 温柔 / 倔强 / 坚韧不拔 ] 的 性格。

彼 ある-DURA [ やさしい / 強情な / 粘り強い ] 助詞 性格

[ 彼は [ やさしい / 強情な / 粘り強い ] 性格をしている。 ]

b. ?他 有着 什么 事情 都 要 说出来 的 性格。

彼 ある-DURA どんな こと も しようとする 口に出す 助詞 性格

[ 彼はどんなことでも口に出したがる性格をしている。 ]

(61) a. 他 有着 强健 的 体质。

彼 ある-DURA 強靱な 助詞 体質

[ 彼は強靱な体質をしている。 ]

b. ?他 有着 怎么 吃 都 不 会 胖 的 体质。

彼 ある-DURA どう 食べる も NEG だろう 太る 助詞 体質

[ 彼はどう食べても太らない体質をしている。 ]

なお、このような属性描写の文脈に用いられる“X有着Z的Y”は“X是Z的Y”で置き換えられにくい<sup>26</sup>。

(57') a. 黄阳光来自广西桂林，童年时因误撞高压电线而失去双臂。但他的确人如其名，虽然无臂，却有着阳光一般开朗的性格。他不仅能生活自理，还能做许多田里的事，甚至还能用双脚编织。(CCL)

b. ??他不仅能生活自理，还能做许多田里的事，甚至还能用双脚编织。黄阳光来自广西桂林，童年时因误撞高压电线而失去双臂。但他的确人如其名，虽然无臂，却是阳光一般开朗的性格。他不仅能生活自理，还能做许多田里的事，甚至还能用双脚编织。

[ 黄陽光は広西省桂林の出身であり、子供の頃高圧線に誤って接触し両腕を失った。しかし、彼はその名の通り、腕がないにも関わらず、陽の光のような明るい性格をしていた／陽の光のような明るい性格だった。彼は自立した生活が送れるだけでなく、畑仕事もでき、更に両足で織物をする事もできた。 ]

<sup>26</sup> (57'b) と (58'b) について、中国北方出身の7人の母語話者に対するアンケート調査を行ったところ、7人中6が不自然と判断している。

(58') a. 黄铁是革命烈士黄负生的女儿，自幼由陈潭秋、恽代英等抚养长大……黄铁是个刚直不阿的女性，有着倔强的性格，面对邪恶，她没有屈服……

(CCL)

b. ??黄铁是革命烈士黄负生的女儿，自幼由陈潭秋、恽代英等抚养长大……黄铁是个刚直不阿的女性，是那种倔强的性格，面对邪恶，她没有屈服……

[黄鉄は烈士である黄負生の娘であり、陳潭秋、恽代英などに育てられていた……黄鉄は剛直な女性で、強情な性格をしております／強情な性格であり、悪に対して彼女は屈服しなかった……]

このことは、両構造に機能上の差異が存在することを端的に示している。

#### 4.4.1.3 “X是Z的Y”の談話機能

属性の連続描写に用いられる“X有着Z的Y”と異なり、“X是Z的Y”はよく対話の場面または地の文において言及対象の属性を別の事実に対する説明として述べる際に用いられる。

(62) — “对了，我们要往哪儿去？”我问。

そうだ 私達 するつもり へ どこ 行く 私 聞く

[「これからどこに行くの?」と僕は訊いてみた。]

— “医院。家父入院了……”

病院 父 入院する SFP

[病院よ。お父さんが入院していて……]

— “关于家父的事，”阿绿说。“他可不是坏人。

について 父 助詞 こと 绿 言う 彼 決して NEG COP 悪い 人

虽然 有时 说话 过分得 人气岔。不过 基本上 是

にも関わらず 時々 話す ひどい-接尾辞 人 怒る しかし 基本的に COP

个 老实 人，而且 真心 爱 我 母亲。他以 自己 的 生活  
 CL 正直な 人 そして 心から 愛する 私 母 彼 で 自分 助詞 生活  
 方式 活 到 今天， 尽 避 性格 软弱， 没 有 生意  
 方式 生きる まで 今日 できるだけ 避ける 性格 弱い NEG ある 商売  
 头脑，人缘 也 不 好， 但是 比起 周围 那些 满口谎言，  
 才觉 人望 も NEG 良い けれど 比べる 周り あれらの 嘘ばかりつく  
 处事圆滑， 投机取巧 的 家伙，他 算 非常 正经  
 うまく立ちまわる 小賢しい 助詞 連中 彼 どちらかといえば 非常に まともな  
 的 了。 我也是 说了 就 干到底 的 性格，所以  
 接尾辞 SFP 私 も COP 言う-PERF すぐ やる- とことん 助詞 性格 だから  
时常 跟他 吵架。 不过，他 绝 不 是 坏 人。”(CCL)  
 よく と 彼 喧嘩する けれど 彼 決して NEG COP 悪い 人  
 [「お父さんのことだけだね」緑は言った。「あの人、悪い人じゃないのよ。  
 とときどきひどいこと言うから頭にくるけど、少なくとも根は正直な人だ  
 し、お母さんのことを心から愛していたわ。それにあの人のはあの人なりに  
 一所懸命生きてきたのよ。性格もいささか弱いところがあったし、商売の  
 才覚もなかったし、人望もなかったけど、でもうそばかりついて要領よく  
 たちまわってるまわりの小賢しい連中に比べたらずっとまともな人よ。私  
 も言った以上はやる性格だから、いつも彼と喧嘩をした。でも、彼は悪  
 い人じゃないのよ。」]

(63) “阿巧姐， 你 跟 宁波人 打过 牌 没有？”

阿巧姉さん あなた と 寧波の人 する-EXPE 麻雀 NEG

[阿巧姉さん、寧波の人と麻雀をしたことある？]

“当然 打过。”

もちろん する-EXPE

[もちろん。]

“有没有 在 这种 船上 打过？”

疑問副詞 で この CL 船の中 する-EXPE

[このような船の中でしたことある？]

“这种船我还是第二次坐。”阿巧姐说：“麻将总是麻将；  
このCL船私まだCOP2回目乗る阿巧姉さん言う麻雀やはり麻雀  
船上岸上有啥分别？”

船の中陸上あるどのような違い

[このような船に乗るのは2回目だった。麻雀はやはり麻雀で、船の中でやるのと陸上でやるのと、どう違うの？]

“这种麻将要记性好。”

このCL麻雀必要だ記憶力良い

[船の中でやる場合、いい記憶力が必要だ。]

“那自然。”阿巧姐认为萧家骥无须关照，“打麻将

それもちろん阿巧姉さん思う蕭家驥NEG必要だ説明するする麻雀

记性不好，上下家出张进张都弄不清楚，

記憶力NEG良い上下家牌を捨てる牌を鳴らすもするNEGはっきり

这还打什么？”听这一说，他不便再说

それでもするなに聞くこういうCL言う彼しづらい更に言う

下去了。等拉开一张活腿小方桌，分好筹码，

続けるSFPしてから設置する1つ移動式角テーブル配るチップ

只见船老大将一系在舱顶上的绳子放了

見ると船頭処置する1縛るに船室の天井助詞紐下げる-PERF

下来；拿只竹篮挂在绳端的钩子上，位置恰好

下りてくる持つCL竹籠かけるに紐先助詞釣上位置ちょうど

悬在方桌正中，高与头齐，伸手可及，

ぶら下るに角テーブル真ん中高さと頭同じ伸ばす手できる届く

却不知有何用处。阿巧姐也是争强好胜

しかしNEG知るあるどのような用途阿巧姉さんもCOP負けず嫌い

的性格，一物不知，引以为耻，所以不肯开口相问；

助詞性格1物NEG分かる恥とするだからNEGしたい聞く

反正总有用处，看着好了。扳庄就位，阿巧姐

どのみち結局のところある用途見る-DURA良い席順が決まる阿巧姉さん

坐 在 张医生 下家…… (CCL)

座る に 張医師 下家

「それはもちろん。」阿巧姉さんは簫家驥がわざわざ説明する必要がないと思っている。「いい記憶力がなければ、左右に座っている人が何を捨てたか、何を鳴いたかすら覚えられなくてどうやって麻雀やるの？」そう言われて、簫家驥は何も言えなくなった。移動式の角テーブルを設置し、チップを配った後に、船頭が船室の天井に縛られている紐を下げて、竹籠を紐先の鉤にかけた。竹籠はちょうど角テーブルの真ん中にぶら下がって、人の頭と同じ高さで、手を伸ばしたら届く。阿巧姉さんはそれを見ても、何に使うか分からなかった。姉さんも負けず嫌いの性格で、知らないことを恥だと考えたので、あえて尋ねようとはしなかった。どのみち何かの用途があるんだ、見ていればいい。席順が決まって、阿巧姉さんが張医師の下家に座っていた。]

(62) の対話では、話し手が聞き手に“我也是说了就干到底的性格（私も言った以上はやる性格だ）”と伝えた後にそのまま続けてその「性格」と関連するエピソード“时常跟他吵架（いつも彼と喧嘩をした）”を述べている。(63) でも語り手が単純に人物の「性格」を述べるだけではなく、その後“不肯开口相问；反正总有用处，看着好了（尋ねようとはしなかった。どのみち何かの用途があるんだ、見ていればいい。）”という「性格」と関連するエピソードも語っている。これらのエピソードは実は談話の中で重要な意味を持つ不可欠な情報であり、これらの導入がなければ、“X 是 Z 的 Y” は意図不明な文になってしまう。

(62') “关于家父的事，”阿绿说。“他可不是坏人。虽然有时说话过分得人气  
岔……??我也是说了就干到底的性格 [φ]。不过，他绝不是坏人。”

「お父さんのことだけどね」緑は言った。「あの人、悪い人じゃないのよ。ときどきひどいこと言うから頭にくるけど……私も言った以上はやる性格だから [φ]。でも、彼は悪い人じゃないのよ。」]

(63') 只见船老大将一系在舱顶上的绳子放了下来……却不知有何用处。??阿巧姐也是争强好胜的性格，一物不知，引以为耻 [φ]。扳庄就位，阿巧姐坐在张医生下家。

[船頭が船室の天井に縛られている紐を下げて……何に使うか分からなかった。阿巧姉さんも負けず嫌いの性格で、知らないことを恥だと考えたので  
[φ]。席順が決まって、阿巧姉さんが張医者さんの下家に座っていた。]

したがって、エピソードが背景情報として現れる“X 有着 Z 的 Y”と異なり、“X 是 Z 的 Y”の関連エピソードは重要な意味を持つ前景情報であると言える。一方、人物の「性格」はその前景となる出来事を語るために必要な背景的情報を与える役割をしている。具体的に言えば、(62)では、談話全体が父の人柄について述べているのに、いきなり“时常跟他吵架 (いつも彼と喧嘩をした)”という話者自身に関わる出来事を語ると、聞き手にとっては唐突であり、理解し難いため、その前に出来事が起こった背景として“我也是说了就干到底的性格 (私も言った以上はやる性格だ)”を提示しているのである。(63)でも、まず船での麻雀の準備作業を目撃した“阿巧姐”がそれについて“不知有何用处 (どんな用途があるのかは分からない)”と述べているのに、その後何の説明もなく、いきなり“不肯开口相问 (尋ねようとはしなかった)”が続くと、論理的におかしくなるため、その背景情報である“阿巧姐也是争强好胜的性格 (阿巧姉さんも負けず嫌いの性格だ)”の提示が不可欠となる。要するに、“X 是 Z 的 Y”は前景となる出来事の理解を円滑にするため、背景情報としての属性を「確認」するという談話機能を担っているのである。“X 是 Z 的 Y”のこの背景情報としての役割は、(64)においてダッシュ“——”の後にこの構文が現れていることから裏付けられる。

(64) 退朝后，刘秀 不免 要 询问 儿子 对 政事 的 看法。

退朝後 劉秀 免れない しようとする 聞く 息子 に 政治 助詞 見方  
于是 问题 来 了。刘疆 对 政务 的 见解 倒 也 中规中矩，  
すると 問題 起こる SFP 劉疆 に 政務 助詞 見解 かえっても 適切  
可是 他 对 军事 却 显得 过于 热衷，常常 表现出 日后  
しかし 彼 に 軍事 むしろ 見える 過ぎる 熱中 よく 見せる 今後  
要 开疆拓土、 四方征战 的 心思。这 可 太  
しようとする 国土を拡大する 戦争を起こす 助詞 考え これ 確かに とても

让 刘秀 受不了 了。——刘秀 虽然 是 个 军事  
 させる 劉秀 受け入れられない SFP 劉秀 けれど COP CL 軍事  
 天才，但是 他 实在 不 是 喜欢 征战 杀伐 的 性格。 (CCL)  
 天才 しかし 彼 全く NEG COP 好む 征战する 戦う 助詞 性格  
 [退朝後、劉秀は政治に関する息子の見方を聞くことがあった。すると、  
 トラブルが起こった。劉彊が政務に関する見解は適切であったが、軍事  
 に対しては、過度な情熱を見せていた。よくこれから戦争を起こし、国  
 土を拡大しようとしている態度を示していた。このことは劉秀に受け入  
 れ難さを感じさせた。——劉秀は軍事の天才ではあるが、全く戦争を好  
 む性格ではなかった。]

(64) では、はじめに劉秀が政治に関する劉彊の見方を尋ねたところ、トラブルが  
 起こったという結果だけが先に述べられており、その後でそのトラブルの内容、すな  
 わち劉彊の戦争によって国土を拡大しようとする考えが劉秀には受け入れられないと  
 いうことが語られている。しかし、これだけではどうしてそのようなトラブルが起こ  
 ったか、どうして劉秀が劉彊の考え方を受け入れられないのかが理解できない。そこ  
 で、出来事に関する読み手の理解を促すため、そのトラブルが起こった背景である“刘  
 秀实在不是喜欢征战杀伐的性格（劉秀は全く戦争を好む性格ではなかった）”を後から  
 補足しているのである。

これらの文脈では、前景となる出来事について聞き手（読み手）の理解を促すた  
 めに、その出来事が起こる背景情報、すなわち人物の属性を確認する必要がある。

“X 是 Z 的 Y” は正に談話の中で背景情報としての人物の属性を聞き手（読み手）  
 に確認させる機能を持つものである。“X 是 Z 的 Y” が背景情報であることはこれら  
 が常に複文の従属節や (64) のような内容補足節の位置に現れることから窺え  
 る。

また、“X 是 Z 的 Y” が担う前景となる出来事の理解を円滑にする機能とは、言い  
 換えればそれまでの文脈とその出来事の橋渡しをする働きにほかならない。そうであ  
 る以上は、当然、それによって表される属性は文脈と関連性を持つ内容でなければな  
 らない。例えば、(62) における“说了就干到底的性格（言った以上はやる性格）”  
 が表す意味は“倔强的性格（頑固な性格）”などによっても表現できるが、あえて



“说了就干到底的性格（言った以上はやる性格）”を使用するのはこれが前文脈に現れる“（家父）有时说话过分得人气岔（お父さんはときどきひどいことを言うから頭にくる）”と関連性を持ち、後続の“时常跟他吵架（いつも彼と喧嘩をした）”をより理解しやすくするからである。（63）の“争强好胜的性格（負けず嫌いの性格）”もまた前文脈での“阿巧姐”の言動と強く関連している。同様に、（64）における“不是喜欢征战杀伐的性格（戦争を好む性格ではなかった）”も前文脈に出ている“开疆拓土, 四方征战（国土を拡大し、戦争を起こす）”と関連するものである。

このように、“X 是 Z 的 Y”が表す属性の内容は文脈に依存する。（65）のような修飾語が形容詞一語である文が成立しない点には、このことが原因の1つとして関わっていると考えられる。

（65）\*他是 温柔的 性格，不会 跟你 发脾气 的。

彼 COP やさしい 助詞 性格 NEG だろう に あなた 怒る SFP

〔彼はやさしい性格なので、あなたに怒ったりしないだろう。〕

（65）の“温柔的性格（やさしい性格）”のような修飾語が形容詞一語だけであるものは、特定の文脈に依存せず、誰にもあてはまるような既存の「性格」のタイプを表すものである。これは聞き手の理解を促すために、文脈と関わる形で言及対象に具体的な属性を付与するというこの構文の特性と合致しないため、文としては成立しない。

しかし、非文である（65）も修飾語の直前に指示連体詞の“那种（そのような）”を挿入すれば、適格な文になる。

（65′）他是 那种 温柔的 性格，不会 跟你 发脾气 的。

彼 COP そのような やさしい 助詞 性格 NEG だろう に あなた 怒る SFP

〔彼はそのようなやさしい性格なので、あなたに怒らないだろう。〕

“那种（そのような）”は指示詞“那（その）”と量詞“种（種）”からなるものである。木村（2012）などで指摘されているように、“那（あの／その）”は話し手と聞き手の共有知識に登録されている指示対象を指す機能を持つ。“温柔的性格（やさしい性格）”そのものは文脈に依存しない既存の「性格」のタイプを表すものであるが、“那种（そ

のような)”を加えると、その指す対象が共有知識という広い意味での文脈との関わりの中で再解釈されるため、容認度が上がる。

また、人物の「性格」は、しばしば次のように“就是这样／那样的性格（まさにこういう／ああいう性格だ）”、“就是这种／那种性格（まさにこのような／そのような性格だ）”といった“就是／真是＋指示連体詞＋性格”の形式で現れる。

(66) “打一” 走 在 最前头的 这 位 “非党员” 的 毕竟，举起

戦う 歩くに 先頭 助詞 この CL 非党员 助詞 畢竟 上げる  
大 棒，雷鸣 似的 吼着。 那 股 偷袭 的 匪徒，看到  
大きい 棒 雷鳴 のように 叫ぶ-DURA あの CL 奇襲する 助詞 強盗 見たら  
这 支 严阵以待 的 队伍， 犹豫了 一阵 以后，别转马头  
この CL 待ち構える 助詞 部隊 躊躇する-PERF 暫く 後 向きを変える  
跑 了……毕竟 就 是 这 样 的 性 格，连 把 他  
逃げる SFP 畢竟 まさに COP こういう 助詞 性格 さえ を 彼  
在 那 茫茫的 柴达木盆地 找到， 也 是 怪 不  
で あの 茫々たる ツアイダム盆地 見つかる も COP とても NEG  
一般 的。(CCL)

一般 SFP

(「戦おう」——先頭に立っている党员ではない畢竟は、太い棒を掲げて雷鳴のような大声で叫んでいた。穀倉を奇襲しようとしていた強盗たちは、この攻撃を待ち構える部隊を見たら、暫く躊躇して向きを変えて逃げた……畢竟はまさにこういう性格だった。ツアイダム盆地で友人の伊汝を見つけたのも普通の人にはできないことだった。)

(67) 还 能 怎么办？ 你 说 怎么办？ 我们 被 人 议论

ほかに できる どうする あなた 言う どうする 私達 られる 人 うわさする  
了！ 妈妈 因此 生病 了！ 呸！ 我 要 走 了，  
SFP 母 それで 病気になる SFP ふん 私 したい 離れる SFP  
我 的 声音 这么 大， 万一 被 妈妈 听见 可 就 糟了。  
私 助詞 声 こんなに 大きい 万が一 られる 母 聞こえる 実になら 大変だ

她 虽 躺 在 床 上， 仍 然 在 想 着 这 事，  
彼女 けれど 横になる に ベッド 依然として ている 考える-DURA この こと  
一 刻 也 不 放 松， 我 知 道 她 就 是 这 种 性 格。(CCL)  
一 刻 も NEG 休む 私 分かる 彼女 まさに COP この ような 性 格  
(どうするか？ どうしたらいいっていうの？ 私たちはうわさされたよ！ 母  
がそれで病気になった！ ふん！ 私離れるよ、こんなに大きい声でしゃべ  
ってしまって母さんに聞こえたら大変だ。母さんは横になっているけ  
ど、このことをずっと心配していて、少しも休めない。母さんはまさに  
このような性格だと私にはわかっている。)

(68) “去 哪 了？” 市子 追 问 道……

行く どこ SFP 市子 問い詰める 言う

(「どこへ行った？」市子が問い詰めた……)

“强罗。她 说 她 想 去 深 山……”

強羅 彼女 言う 彼女 したい 行く 山の奥

(強羅へ行った。彼女は山の奥へ行きたいって……)

“去 那 儿 做 什 么？” 佐 山 脸 上 现 出 不 快 的 神 色。

行く そこ する なに 狭山 顔 現れる 不愉快な 助詞 表情

(「そこへ行って何するんだ？」佐山が不愉快な顔をしていた。)

“我 也 不 清 楚”

僕 も NEG 分かる

(「僕もよく分からない。」)

“这 倒 符 合 那 孩 子 的 性 格” 市 子 幽 幽 地 说。

これ むしろ 合う あの 子 助詞 性格 市子 微かに-接尾辞 言う

(「あの子らしいなあ」と市子は微かな声で言った。)

“的确，她 真 是 那 样 的 性 格……” 光一 立 刻 接 过 了

確かに 彼女 まさに COP ああいう 助詞 性格 光一 すぐに 引き継ぐ-PERF

市子 的 话 头，“她 可 把 我 弄 惨 了。”

市子 助詞 話 彼女 本当に を 私 ひどい目に遭わせる SFP

(「確かに、彼女はまさにああいう性格だ……」光一は市子の話を引き継  
ぎ、「彼女のせいでさんざんな目に遭った」。)

“她的 心目中 只有 她自己，无论 周围 的人 受到 多大  
 彼女 助詞 心の中 のみ ある 彼女自身 いくら 周り 助詞 人 受ける どのような  
 的 伤害，她 完全 不在乎。她 是 什么 事 都  
 助詞 傷つき 彼女 全然 気にしない 彼女 COP どんな こと ても  
 干得出来 的！” (CCL)  
 やってのける SFP

(彼女は自分のことしか考えていなく、周りの人がどんなに傷付いても全然  
 気にしない。彼女はどんなことでもやってのける。)

(66) ~ (68) では、その人物に関する具体的な行動を述べた後に、“他就是这样  
 的／那样的／这种／那种性格 (彼はまさにこういう／ああいう／このような／そのよ  
 うな性格だ)” という形で人物の「性格」が用いられている。この場合、前文脈の行  
 動を照応する指示連体詞の“这样 (こういう) / 那样 (ああいう) / 这种 (このよう  
 な) / 那种 (そのような)” が修飾語として用いられ、更に“就 / 真 (まさに / 確か  
 に)” のような副詞によって“是”が強調されていることから、明らかに背景情報で  
 ある「属性の確認」を行なっていると見なすことができる。例えば、(66) では、強  
 盗の攻撃が迫っているところ、党員ではないにも関わらず畢竟が先頭に立って強盗と  
 戦ったという畢竟の具体的な行動を紹介した上で、その行動の背景にある“毕竟就是  
 这样的性格 (畢竟はまさにこういう性格だ)” という事実を聞き手に確認させてい  
 る。(67) と (68) も (66) と同様に、出来事が起こった背景または出来事を引き  
 起こした原因として「性格」を提示している。

“X 是 Z 的 Y” の、前景となる出来事の理解を円滑にするため、その出来事が起  
 った背景情報として「性格」を提示するという属性「確認」の機能は、日本語の「あ  
 あいう性格だ」と非常に類似している。日本語の「ああいう性格だ」も言及対象の  
 「性格」を確認しながら、その「性格」を背景情報とした前景の出来事を述べる機能  
 を持っている。(69b) のように、前景となる出来事の導入がなければ、意図不明な  
 文になる。

(69) a. 彼はああいう性格だから、黙ってられないんだ。

b. ?彼はああいう性格だ [φ]。

このような属性を確認する文脈に用いられる“X是Z的Y”は“X有着Z的Y”で置き換えられにくい<sup>27</sup>。

(70) a. “关于家父的事,” 阿绿说。“他可不是坏人。虽然有时说话过分得人气岔……我也是说了就干到底的性格, 所以时常跟他吵架。不过, 他绝不是坏人。” (CCL)

b. ?? “关于家父的事,” 阿绿说。“他可不是坏人。虽然有时说话过分得人气岔……我也有着倔强的性格, 所以时常跟他吵架。不过, 他绝不是坏人。”

[「お父さんのことだけだね」緑は言った。「あの人、悪い人じゃないのよ。ときどきひどいこと言うから頭にくるけど……私も言った以上はやる性格だから／私も頑固な性格をしているから、いつも彼と喧嘩をした。でも彼は悪い人じゃないのよ。」]

(71) a. 只见船老大将一系在舱顶上的绳子放了下来……却不知有何用处。阿巧姐也是争强好胜的性格, 一物不知, 引以为耻。所以不肯开口相问…… (CCL)

b. ??只见船老大将一系在舱顶上的绳子放了下来……却不知有何用处。阿巧姐也有着争强好胜的性格, 一物不知, 引以为耻。所以不肯开口相问……

[船頭が船室の天井に縛られている紐を下げて……何に使うか分からなかった。阿巧姉さんも負けず嫌いの性格であり／阿巧姉さんも負けず嫌いの性格をしており、知らないことを恥だと考えたので、あえて尋ねようとはしなかった……]

上述のように、“X有着Z的Y”は人物の属性を描写する機能を持つのに対して、“X是Z的Y”は人物の属性を確認する機能を持つ。一方、日本語の「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」は談話機能の面では中国語のような違いが見られ

<sup>27</sup> (70b) と (71b) について、中国北方出身の7人の母語話者に対するアンケート調査を行ったところ、7人全員が不自然と判断している。

ない。

- (72) a. ハイユークは背の低い、がっしりした体格の、浅黒い、切れ上った青  
い目の青年で、人懐っこい、几帳面な、無口な性格だった。(BCCWJ)
- b. ハイユークは背の低い、がっしりした体格の、浅黒い、切れ上った青  
い目の青年で、人懐っこい、几帳面な、無口な性格をしている。
- (73) a. 彼はそういう性格だから、黙ってられないんだ。
- b. 彼はそういう性格をしているから、黙ってられないんだ。

(72) (73) のように、「Xは [Z+Y] をしている」と「Xは [Z+Y] だ」はどちら  
も人物の属性を描写する文脈にも、人物の属性を確認する文脈にも用いられる。更  
に、「描写」と「確認」の他に、両構文は次のようなこれまで認知されていなかった  
属性を自分の観察や獲得した情報に基づいて新たに付与する文脈にも用いられる。本  
論文ではこれを「認定」の機能と呼ぶことにする。

- (74) (太郎の発表を聞いて独り言を言う場面)
- a. 太郎は細かいところに気を配れる性格をしている。
- b. 太郎は細かいところに気を配れる性格だ。

それに対して、中国語の両構文はこのような文脈には用いられない。

- (74') (听完太郎的演讲后，自言自语道：)
- a. #太郎 有着 细致入微 的 性格。  
太郎 ある-DURA 几帳面な 助詞 性格  
[太郎は几帳面な性格をしている。]
- b. #太郎 是 那种 细致入微 的 性格。  
太郎 COP そのような 几帳面な 助詞 性格  
[太郎はそのような几帳面な性格だ。]

c. 太郎 真 认真!

太郎 本当に まじめ

[太郎はまじめだね。]

#### 4.4.2 まとめ

本節では、談話機能の観点から人物の属性、主に人物の「性格」を叙述する中国語の“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”の特徴を考察した。同時に、日本語の「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」との対照の観点から、日本語と中国語の構文間の違いを検討した。結果は次表のようにまとめられる。

表6 人物の「性格」を叙述する日中の各構文の談話機能

談話機能 \ 構文	X有着Z的Y	X是Z的Y	Xは[Z+Y]をしている	Xは[Z+Y]だ
属性を「描写」	+	-	+	+
属性を「確認」	-	+	+	+
属性を「認定」	-	-	+	+

表6に示したように、人物の「性格」を叙述する中国語の両構文はそれぞれ「描写」と「確認」の機能を持ち、どちらも「認定」の機能を持たない。一方、日本語の両構文はどちらも「確認」「描写」と「認定」の機能を持つ。

日本語と中国語の談話機能におけるこのような違いが生じている理由の1つとして中国語の連体修飾は既知性などの面でより厳しい制約を受けていることが挙げられる。中国語の連体修飾構造“X的N”(例えば、“我的书(私の本)”、“新的书(新しい本)”、“我买的书(私が買った本)”)について、小野(2008:37-38)は「まず特定の「事物N(例えば“书(本)”)」の存在が認知され、その「モノ」に対して、所有者・性質・関与した行為などの情報を、あとから“X的”で付加することによってできる構造形式である」と指摘している。中心名詞“N”が特定・既知の事物や属性であるとすれば、それは認定の対象になりえない。なぜならば、「認定」というのは普通、観察や情報の

獲得を経てからこれまで認知されていなかった属性を新たに付与するものであるからだと考えられる。既に認知されている既知の属性をわざわざ認定するのは当然不自然である。そのため、連体修飾構造を含む中国語の“X 有着 Z 的 Y”と“X 是 Z 的 Y”は(74')のような「認定」の文脈には用いられない。一方、日本語では中心名詞が既知性の面で制約を持たないため、「認定」の文脈に問題なく用いられる。

#### 4.5 おわりに

本章では、人物の普通所有物の属性、特に人物の「性格」を叙述する日本語の「Xは [Z+Y] をしている」、「Xは [Z+Y] だ」と中国語の“X 有着 Z 的 Y”、“X 是 Z 的 Y”の特徴およびそれぞれの構文の間の違いを考察した。結果をまとめると次表の通りになる。

表7 日中の属性叙述文の構文機能および文法的特徴

構文	構文機能	文法的特徴			
		名詞 Y	叙述の根拠	否定可否	修飾語 Z
Xは [Z+Y] をしている	意味レベルにおいて、人物の属性を話し手の観察に基づき叙述する	視覚的に観察できる名詞が優勢 (顔、目、体、顔付き、顔立ち、性格 など)	必要	制限あり	具体性の高い修飾語との親和性が高い
Xは [Z+Y] だ	意味レベルにおいて、人物の属性を主体的に評価する	視覚的に観察できない名詞を取りやすい (性格、質、身、運命、タイプ、顔、顔付き など)	不必要	可	具体性の高い修飾語との親和性が低い
X 有着 Z 的 Y	談話レベルにおいて、人物の属性を並列的に描写する	視覚的に観察できる名詞も観察できない名詞も自由に取れる (脸、眼睛、五官、性格、体质、命运 など)	関係なし	不可	二音節形容詞や四字成語のような描写性を持つ修飾語が生起しやすい
X 是 Z 的 Y	談話レベルにおいて、人物の属性を話し手と聞き手の間で確認する	文を成立させる名詞が限られている (性格、体质)	関係なし	可	文脈と関わりがある修飾成分が必須



表7から分かるように、同じく人物の属性を叙述する表現であっても、表現形式が異なれば担う機能も異なる。「Xは[Z+Y]をしている」は人物の属性を話し手の観察に基づき述べる機能を持つのに対して、「Xは[Z+Y]だ」は人物の属性を主体的に評価する機能を持つ。また、中国語の“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”については、本章では、両者に共通して用いることができる“性格”を中心に考察を行った。その結果、前者は言及対象の複数の属性を並列させながら、大きな視野から小さな対象、外観から内面にズームインすることによって人物の属性を描写する機能を持つに対して、後者は談話の中で人物の属性を話し手と聞き手の間で確認する機能を持つということが明らかになった。

表7からもう1つ指摘できるのは、各構文の構文機能が構文に入る名詞Yに選択制限をもたらしているということである。例えば、「Xは[Z+Y]をしている」は話し手の観察に基づき、人物の属性を描写する機能を持つため、名詞Yのスロットに視覚的に観察できる名詞が生起しやすい一方、視覚的に観察できない名詞が生起しにくい。同様に、「Xは[Z+Y]だ」においては言及対象の属性を主体的に評価するという構文機能の影響から、Yのスロットは話し手の評価が内在する抽象名詞と相性がよい。また、“X有着Z的Y”の人物の属性を描写する機能は名詞Yそのものに直接的な意味制約をかけるわけではないが、名詞Yにつく修飾語Zに制限をもたらしている。すなわち、名詞Yを修飾するZは描写的な成分でなければならない。同じく、“X是Z的Y”の談話の中で言及対象の属性を確認する機能も、名詞につく修飾語Zに影響を与えている。修飾語Zは文脈（共有知識を含む）と関連性を持ち、かつ話し手と聞き手の間で確認できるようなものでなければならない。

## 第5章 日本語の「ある」構文と中国語の“有”連動文

第4章では、“有 Z 的 Y”という連体修飾構造を含む“有”属性叙述文の特徴を見てきた。実は、中国語には、構造上“有 Z 的 Y”と関わっているもう1つの“有”構文がある。それはすなわち、“有+Y+Z”連動文である。文の構成素だけから見れば、この2種類の“有”構文は非常に類似しているものの、統語構造が変わるため、当然それぞれの構文機能や構文の成立条件なども異なっている。本章はこの中国語の“有”連動文およびそれに対応する日本語の「ある」構文を中心に考察していく。

### 5.1 はじめに

中国語には、動詞“有”が目的語名詞 Y (“资格 (資格)”、“机会 (機会)”) を伴った動詞句に、更に動詞 (句) Z (“到这个公司工作 (この会社に入社する)”、“来日本 (日本に来る)”) が後続することで構成された、次のような連動文 (serial verb construction)<sup>28</sup>がある。以下、これを“有+Y+Z”と表記する。

(1) 你 有 资格 到 这个 公司 工作。(竹島 1993: 43)

あなた ある 資格 来る この 会社 働く

[君はこの会社に入社する資格がある。]

(2) 如果 你 有 机会 来 日本, 一定 到 我家 来 玩儿。(竹島 1993: 42)

もし あなた ある 機会 来る 日本 ぜひ 来る 私のうち来る 遊ぶ

[日本に来る機会があったら、ぜひ私のうちに遊びに来て下さい。]

この“有+Y+Z”連動文は構成素の間の意味関係から言えば、名詞 Y は Z を実現させるための条件を表し、動詞“有”はその条件 Y の存在を表し、Z は条件 Y の存在 (“有+Y”) を前提に行う目的行為を表す。例えば、(1)における名詞 Y “资格 (資

<sup>28</sup> 中国語の連動文の特徴については、5.3 節で詳しく説明する。

格)”の存在、つまり“有資格（資格がある）”は、Zの“到这个公司工作（この会社に入社する）”が表す行為を実現させるための条件と言える。

一方、日本語では、構造的に、中国語の“有+Y+Z”連動文に対応するものは存在しない。しかしながら、“有+Y+Z”連動文と同じような意味を表す構文がある。それはすなわち、「[Z+Y]がある」である。

(1′) 君はこの会社に入社する資格がある。

(2′) 日本に来る機会があったら（ぜひ私のうちに遊びに来て下さい。）

(1′)(2′)のような日本語の「[Z+Y]がある」は、形式的にZとYが修飾と非修飾の関係になっているため、日本語の研究では、ZがYの内容を補充説明すると解釈されることが多い。しかし、意味の面からみれば、例えば(1′)について、竹島(1993)で述べられているように、「資格」の実質的内容は、「高卒以上」や「要普通免許」のようなものであるはずだが、Zである「会社に入社する」は、そういった具体的な資格ではなく、入社するための資格を指すため、Zを「目的内容」と解釈することができる。(2′)におけるZの「日本に来る」も名詞「機会」の実質的内容を説明しているのではなく、「日本に来るための機会」という「機会」の目的を述べている。この点においては、中国語の“有+Y+Z”連動文と平行的に捉えることができると言える<sup>29</sup>。

また、文中の“有+Y”と「Yがある」については、どちらの言語においてもモダリティ論の立場から論じられることがある。例えば、中国語の“有+Y+Z”連動文における“有+Y”について、朱德熙(1986)、竹島(1993)などでは、“有+Y”が助動詞のように事態Zが実現する可能性や必要性などを示すことができ、助動詞機能を持つと述べられている。

---

<sup>29</sup> 「[Z+Y]がある」は、ほかに「靴を履いて寝る習慣がある」のように、ZがYの実質的内容を補充説明する用法もある。これに対応する中国語は“有+Y+Z”ではなく、“有Z的Y”である。ただし、本論文の目的は「[Z+Y]がある」がどのような場合に“有+Y+Z”と対応し、どのような場合に“有Z的Y”と対応するのかを明らかにすることにはないため、ここでは、「[Z+Y]がある」が中国語の“有+Y+Z”連動文と同じような意味を表すことを確認するのみに留める。

(3) 我 有责任 告诉 你。(竹島 1993 : 45)

私 ある 責任 言う あなた

[私には君に言う責任があるんだ。]

(4) 她 有必要 知道 他 过去 的 情况。(竹島 1993 : 46)

彼女 ある 必要 知る 彼 過去 助詞 こと

[彼女は彼の今までのことを知る必要があった。]

日本語の「[Z+Y] がある」についても、大塚 (2018) では、「～がある」文が表す意味は、単にあるものの存在を示すという語彙的意味にとどまらず、意志、願望、可能性といった対人機能的意味を持つとした上で、この対人機能的意味は、これまでの日本語研究ではモーダルな意味とされていると述べられている。

(5) 私には君を助ける意志がある。(大塚 2018 : 281)

(6) 私には世界一周旅行をしたいという願望がある。(大塚 2018 : 281)

(7) 犯人は女性である可能性がある。(大塚 2018 : 281)

ほかに、仁田 (1981, 2009) も、次のような可能性を表す「～がある」形式を助動詞相当の表現と見なしている。

(8) 彼は生きている公算がほとんどない。(仁田 2009 : 52)

(9) 「一般的な消費税という言葉は反発をまねく恐れがある」との声が強く、…  
(仁田 2009 : 60)

(10) 彼は人がいいから、彼に頼めば貸してくれる可能性がある。(仁田 2009 : 60)

要するに、中国語の“有+Y+Z”においても、日本語の「[Z+Y] がある」においても、名詞 Y の性質によって、“有+Y”と「Y がある」はさまざまなモーダルな意味を表すことができるとされている。本章では、この“有+Y”および「Y がある」は本当にモダリティと言えるのかどうか、もしモダリティであるとすれば、その根拠は何か、もしモダリティでなければ、先行研究で言われているモーダルな意味はどのような

に生み出されたのか、といった問題を明らかにすることを目的とする。

## 5.2 先行研究とその問題点

### 5.2.1 中国語の“有+Y+Z”連動文に関する先行研究

まず、中国語の“有+Y+Z”に関しては、朱德熙（1986）では、“有+Y”とZの関係に着目して、“有+Y”は話し手のZを実現するための必要性や可能性に対する態度(modality)を表しており、その意味は普通、助動詞の“能、会(～することができる)”、“可以(～してもよい)”、“应该(～するべきだ)”で言い換えることができると指摘している。

(11) 有 理由 不 去 → 可以 不 去 (朱德熙 1986 : 83)

ある 理由 NEG 行く                      AUX NEG 行く

[行かない理由がある。]                      [行かなくてもいい。]

(12) 有 条件 上大学 → 能 上大学 (朱德熙 1986 : 83)

ある 条件 大学に進学する                      AUX 大学に進学する

[大学に進学するための条件が備わっている。]                      [大学に進学することができる。]

朱氏によると、“有理由(理由がある)”を助動詞の“可以(～してもよい)”に、“有条件(条件がある)”を助動詞の“能(～することができる)”に置き換えることができ、しかも、“有理由不去(行かない理由がある)”と“可以不去(行かなくてもよい)”、“有条件上大学(大学に進学するための条件が備わっている)”と“能上大学(大学に進学することができる)”はそれぞれ意味が近いのだという。興味深い指摘であるが、実際は、具体的な文脈において、(13)のように“有+Y”が助動詞で置き換えられない場合もある。

(13) a. 在 大学期间, 我 有 条件 读到了 更多 的 书籍。(CCL)

に 大学の間 私 ある 条件 読む-PRRF より多くの 助詞 本

[大学の間、条件が備わっていて、私はより多くの本を読んだ。]

b. \*在 大学期间, 我 可以 读到了 更多 的 书籍。

に 大学の間 私 AUX 読む- PERF より多くの 助詞 本

[大学の間、私はより多くの本を読むことができた。]

朱德熙 (1986) の解釈とは対照的に、原 (1991 : 68) では、Y と Z の関係に着目し、Y は 1 つの class を表し、Z はその class を区分する指標であるとし、“有+Y+Z” 全体は Z を指標とする subclass の有無のみを表すと述べている。すなわち、“有+Y+Z” は単に Z に区分される Y そのものの有無を言うだけであり、モダリティを表さないということである。“有+Y+Z” は Y の有無を表すという指摘は興味深い、「Z に区分される Y」という言い方には問題がある。もし“有+Y+Z” の構文的意味が原 (1991) の記述する通りであるとすれば、“有+Y+Z” 連動文と“有+Z 的+Y” 連体文の違いが不明瞭になる。中国語の連体修飾構造“X 的 N” (例えば、“我的书 (私の本)”、“新的书 (新しい本)”、“我买的书 (私が買った本)”) について、小野 (2008 : 37-38) は主名詞の「本」に対して、所有者・性質・関与した行為などを“X 的” で付加し、「限定」するものであると述べている。そもそも、原 (1991) の言う「Z に区分される Y」という解釈は、構造的に見た場合、大きな問題がある。もし原 (1991) の分析が正しいとするならば、「Z に区分される Y」も構造上、「Z に限定される Y」 (例えば (14b)) のように Z が Y に先行し、Y を修飾するというような階層になるはずである。(14a) が示しているように、“有+Y+Z” は、まず、Y が“有” と結びつき、更に Z を後続するという階層構造になっている。Z と直接構成素の関係にあるのは“有+Y” であり、Y ではない。要するに、直接構成素ではない Z と Y の意味関係を「Z に区分される Y」と解釈するのは明らかに不適切である。「Z に限定される Y」を表す (14b) において、“Z 的” と Y が直接構成素の関係になっているのとは対照的である。また、中国語普通話には修飾語が後ろから被修飾語にかかっていくいわゆる後置修飾構造は存在しないため、ここでは Z が後ろから Y を修飾しているという解釈も成立しない。

(14) a. 他 有 能力 解决 这个 问题。

彼 ある 能力 解決する この 問題

[彼はこの問題を解決する能力がある。]

b. 他 有 解決 这个问题 的 能力。

彼 ある 解決する この 問題 助詞 能力

[彼はこの問題を解決する能力がある。]

竹島（1993：45）は上述の2つの先行研究を取り入れながら、「Yは事態Zが実現するために欠かせない二次的な要素（動作の仕手や受け手は一次的な要素）であり、その有無を言うことで、結果的に事態Zの実現する可能性・必要性などのモダリティを示す。要するに、Yが“有”と結び付くと、単に「Yがある」というだけにとどまらない意味を持つ。それがすなわち、助動詞に相当する機能である」と指摘している。「Yの有無を言うことで、結果的に事態Zの実現する可能性・必要性などのモーダルな意味を表す」という竹島（1993）の考えを本稿も支持したい。しかし、“有+Y”が本当に助動詞の機能を持っているかどうか、あるいはどの程度助動詞のように働けるのかといった点について、事態の実現可能性や必要性などを表せるという意味の面だけから判断しており、論証が不十分であるように思われる。これに対して本論文では、意味だけでなく、文法機能からの検証も必要であると考えられる。

### 5.2.2 日本語の「[Z+Y]がある」に関する先行研究

日本語の「[Z+Y]がある」に関しては、モダリティ研究および動詞「ある」の用法を考察する中で言及されることが多い。

仁田（2009）は、文末・句末の構造と体系を十全に明らかにするためには、考察を助動詞や助詞に限定してはならず、それらに類似やつながりがある文末・句末表現を分析・記述する必要もあると指摘した上で、「ことがある」、「可能性がある」、「かもしれない」のような可能性や蓋然性を表す文末・句末の組み立て表現と、推量を表す「だろう」との関係性を論じている。その中で、本論文の考察対象と関係があるのは可能性を表す表現形式である。具体的に言えば、仁田（2009）では、「ことがある」、「公算がある」、「恐れがある」、「可能性がある」という4つの可能形式が取り上げられ、それ自身が否定形や「タ形」になりうるかどうかという観点から、それらの形式と「だろう」との違いが述べられている。

- (15) a. 説明書どおり作っていけば失敗する ことはない。  
 b. \*説明書どおり作っていけば失敗するだろう ない。(仁田 2009 : 56)
- (16) a. 当時は盲腸の手術ですら命を落とすことがあった。(仁田 2009 : 59)  
 b. \*本人がやって来るだろう た。(仁田 2009 : 66)

(15) (16) に示したように、可能性を表す表現形式は、自らが否定形や「タ形」になるが、推量を表す「だろう」はそれ自身が否定形や「タ形」になることはない。このようなことから、仁田 (2009) は、「だろう」が〈推量〉といった真のモードであるのに対して、「ことがある」、「公算がある」、「恐れがある」、「可能性はある」が疑似モードであると指摘している。具体的な使い方から、モーダルな意味を表す「[Z+Y] がある」を助動詞と比較していることは非常に示唆的である。しかしながら、仁田 (2009) は、可能性を表す「[Z+Y] がある」のみに言及し、他の意味タイプの「[Z+Y] がある」には触れていない。

それに対して、大塚 (2018) は、「～がある」文が表す意志、願望、可能性といった対人機能的意味は動詞「ある」に上接するガ格名詞句の意味によって生じているのであり、動詞「ある」やその語尾の部分などをモダリティ形式と見なすことはできないと主張している。その一方、「恐れがある」、「可能性はある」、「見込みがある」、「感じがある」、「憾みがある」などはモダリティを表すものであるとも述べている。どこまでがモダリティ形式で、どこからが「名詞+がある」と考えるか、その判断の根拠は大塚 (2018) では説明されていない。

ほかに、高橋・屋久 (1984) は同じ存在を表す「いる」と比較しながら、「～がある」の意味・用法から共起する名詞の種類まで詳しく記述している。しかしガ格の名詞と「ある」との統語的な関係についての言及は十分になされていない。

上述のように、“有+Y”と「Yがある」が助動詞機能を持つかどうかという問題について、先行研究では、意味の面だけから判断するものが多く、文法機能から検証するものは少ない。そこで、以下では、文法機能の面から改めて“有+Y+Z”と「[Z+Y] がある」における“有+Y”および「Yがある」の機能を検討していく。まず、中国語の“有+Y”を見ていきたい。



### 5.3 “有+Y”の文法機能および“有+Y+Z”連動文の特徴

“有+Y+Z”における“有+Y”は真のモダリティであるかどうかを明らかにするため、本論文では、モダリティを表す助動詞と比較しながら検証していく。“有+Y”と助動詞の比較に入る前に、次節では、まず“有+Y”と助動詞の意味分類を整理しておきたい。

#### 5.3.1 “有+Y”と助動詞の意味分類

##### 5.3.1.1 “有+Y”の意味分類

Yの意味により、“有+Y”はさまざまな意味を表すことができる。本稿では、陳力衛(1992)と竹島(1993)の分類に基づいて、“有+Y”を意味的に次の4類に分ける。

表1 Yの意味による“有+Y”の意味分類

“有+Y”の意味	Y
A.意志・願望	決心(決心)、毅力(根性)、勇气(勇氣)、胆量(度胸)、意思(意思)、心思(気持ち)、心情(気持ち)、兴趣(興味)、诚意(誠意)、意向(意向)
B.可能性	能力(能力)、实力(実力)、力量(力)、精力(精力)、本事(腕)、信心(自信)、耐心(根気)、可能(可能)、希望(見込み)、把握(自信)、指望(見込み)、条件(条件)、办法(方法)、机会(機会)、时间(時間)
C.必要性	必要(必要)、责任(責任)、义务(義務)
D.許可	权利(権利)、资格(資格)、理由(理由)

##### 5.3.1.2 助動詞の意味分類

研究者により、助動詞の意味分類の方法が異なっているが、全体的に助動詞の意味

タイプはほぼ同じである。すなわち、可能性、意志・願望、必要性、許可の4つの意味タイプはどの先行研究でも扱われている。本稿では、丁声树(1961)、马庆株(1988)、刘月华他(2001)などの先行研究を参照しながら、助動詞を以下の5種類に分けることにする。

表2 助動詞の意味分類

助動詞の意味	助動詞
A.意志・願望	想、要、肯、敢、愿意(～したい/～しようとする/～する度胸がある)
B.可能性	能、会、可以(～する可能性がある/～することができる/～はずだ)
C.必要性	应该、应当、得、必须(～するべきだ/～しなければならない)
D.許可	可以、能(～してもよい/～することが許される)
E.評価	值得、配(～する価値がある/～に値する)

### 5.3.1.3 比較の対象とする“有+Y”と助動詞

“有+Y”と助動詞の意味分類を比べてみると分かるように、「E.評価」に該当する“有+Y”が存在しないため<sup>30</sup>、AからDの4類に属する“有+Y”と助動詞が主たる考察の対象となる。なお、考察の便宜上、“有+Y”と助動詞との意味上の対応関係を主な基準とし、比較の対象を選出した。比較の対象とする“有+Y”と助動詞は表3の通りである。

<sup>30</sup> 評価を表す“有+N”は存在はしているものの、単独でしか使えず、VPを伴うことができないため、分類の対象としない。例えば、“有教养(教養がある)”は“她很有教养。(彼女は教養が高い。)”のように単独で使うことができるが、“\*她很有教养做事。(彼女は教養があって、仕事している。)”のように後ろに動詞句を伴うことができない。

表3 比較の対象とする“有+Y”と助動詞

意味タイプ	(有)Y	助動詞
A. 意志・願望	決心(決心)、勇气(勇氣)、 意思(意思)、意向(意向)	要、想、愿意(～しようとする/ ～したい) 敢(～する度胸がある/～する勇 気がある)
B.可能性	能力(能力)、信心(自信)、 可能(可能)、希望(見込み)、 把握(自信)、条件(条件)、 机会(機会)	能、会、可以、应该(～すること ができる/～する可能性がある/ ～はずだ)
C.必要性	必要(必要)、责任(責任)	应该、得(～するべきだ/～しな ければならない)
D.許可	权利(権利)、资格(資格)、 理由(理由)	可以(～してもよい/～すること が許される)

### 5.3.2 “有+Y”と助動詞の文法的特徴

上述の“有+Y”と助動詞の意味分類に基づいて、以下では、各意味タイプの“有+Y”と助動詞の文法的特徴を見ていく。

#### 5.3.2.1 “有+Y”と助動詞の連用順序

中国語では、助動詞の連用に順序がある。马庆株(1988:27)では、助動詞を意味により、可能A(可能性)、必要、可能B(能力可能)、願望、評価、許可の6種類に分けて、その6種類の助動詞の連用順序を以下のようにまとめている。

①可能A(可能性) > ②必要 > ③可能B(能力可能) > ④願望 > ⑤評価 > ⑥許可

一般的に異なるタイプの助動詞が連用する際、上述のような順序に従わなければならないとされている。

(17) 这本书 写得 比较 通俗, 你 应该① 能③ 懂。

この CL 本 書く-接尾辞 比較的 分かりやすい あなた AUX AUX 分かる  
[この本は分かりやすく書いているので、あなたは分かるはずだ。]

(18) 他 会① 愿意④ 跟我 一起 去 吗?

彼 AUX AUX と 私 一緒に行く SFP  
[彼は私と一緒にいきたいと思うかなあ。]

(19) 领导干部 得② 能③ 识别 人才, 选拔 人才。

指導者 AUX AUX 見分ける 人材, 選抜する 人材  
[指導者は人材を見分け、選抜することができなければならない。]

(20) 球员 应该① 可以⑥ 这样 做。

選手 AUX AUX このように する  
[選手はこうしても大丈夫だろう。]

(17) は、推測を表す“应该(～はずだ)”と能力可能を表す“能(～することができる)”が連用するものであり、上述の①>③の連用順序に従っている。(18)において、推測を表す“会(～だろう)”が願望を表す“愿意(～したい)”の前に生起するのも、助動詞の①>④の連用順序に従っている。(19)の必要性を表す“得(～しなければならない)”と能力可能を表す“能(～することができる)”の連用順序も上述の②>③という規則に合致する。(20)は推測を表す“应该(～だろう)”と許可を表す“可以(～してもよい)”が連用するものであり、その順序も①>⑥という規則を守っている。(17)～(20)における助動詞の連用順序を入れ替えると、いずれも非文になる。

(17') \*这本书 写得 比较 通俗, 你 能③ 应该① 懂。

この CL 本 書く-接尾辞 比較的 分かりやすい あなた AUX AUX 分かる  
[この本は分かりやすく書いているので、あなたは分かるはずだ。]

(18′) \*他 愿意④ 会① 跟 我 一 起 去 吗?

彼 AUX AUX と 私 一 緒 に 行 く SFP

[彼は私と一緒にいきたいと思うかなあ。]

(19′) \*领导干部 能③ 得② 识 别 人 才, 选 拔 人 才。

指 導 者 AUX AUX 見 分 け る 人 材, 選 抜 す る 人 材

[指導者は人材を見分け、選抜することができなければならない。]

(20′) \*球员 可以⑥ 应该① 这 样 做。

選 手 AUX AUX こ の よ う に す る

[選手はこうしても大丈夫だろう。]

続いて、“有+Y”が連用する際、助動詞と同じ連用順序を守っているかどうかを見ていく。

(21) 我 们 有 决心④、有 信心① 把 这 个 事 业 坚 持 下 去。(CCL)

私 達 ある 決 心 ある 自 信 を こ の 事 業 続 け る て いく

[私たちはこの事業を続けていく決心、自信がある。]

(22) 只 有 一 个 成 功 的 企 业 才 有 能力③、有 条件① 服 务 社 会。(CCL)

の み 1 つ 成 功 す る 助 詞 企 業 こ そ ある 能 力 ある 条 件 奉 仕 す る 社 会

[成功した企業だけが社会に奉仕する能力、条件がある。]

(23) 凡 被 授 予 者, 都 有 资格⑥、有 希望① 完 成 工 作。

凡 そ ら れ る 授 与 す る 人 全 て ある 資 格 ある 見 込 み 完 成 す る 仕 事

[凡そ授与された人であれば、みな仕事を完成する資格、見込みがある。]

(24) 您 认 为 两 岸 是 否 有 必要②、有 可能① 签 署 和 平 协 议。(CCL)

あ な た 思 う 両 岸 か ど う か ある 必 要 ある 可 能 性 結 ぶ 平 和 協 定

[两岸が平和協定を結ぶ必要、可能性があると思っているのか?]

(21) は意志・願望を表す“有决心(決心がある)”と可能性を表す“有信心(自信がある)”が連用するものであるが、①>④という連用順序には従っていない。(22)における能力可能を表す“有能力(能力がある)”と可能性を表す“有条件(条件がある)”の連用順序も、①>③の連用順序とは逆になっている。(23)では、許可を表す“有資

格（資格がある）”が可能性を表す“有希望（見込みがある）”に先行しており、これも①>⑥という連用順序に従っていない。(24)は必要性を表す“有必要（必要がある）”と可能性を表す“有可能（可能性がある）”が連用するものであるが、ここでも必要性を表す助動詞は可能性を表す助動詞より後ろに生起するという連用順序には従っていない。

このように、“有+Y”の連用順序は助動詞の連用順序と正反対になっているように見える。しかしながら、(21)～(24)における連用する2つの“有+Y”はその順序を入れ替えても、文が成立する。

(21′) 我们 有信心①、有决心④ 把这个事业坚持下去。

私達 ある自信 ある決心 を この事業 続ける ていく

[私達はこの事業を続けていく自信、決心がある。]

(22′) 只有一个成功的企业才 有条件①、有能力③ 服务社会。

のみ 1つ 成功する 助詞 企業 こそ ある 条件 ある 能力 奉仕する 社会

[成功した企業だけが社会に奉仕する条件、能力がある。]

(23′) 凡被授与者,都 有希望①、有资格⑥ 完成工作。

凡そ られる 授与する 人, 全て ある 見込み ある 資格 完成する 仕事

[凡そ授与された人であれば、みんな仕事を完成する見込み、資格がある。]

(24′) 您认为两岸是否 有可能①、有必要② 签署和平协议。

あなた 思う 两岸 かどうか ある 可能性 ある 必要 結ぶ 平和協定

[两岸が平和協定を結ぶ可能性、必要があると思っているのか?]

このように、“有+Y”が連用する場合は順序が自由であるのに対して、助動詞が連用する場合は一定の順序に従わなければならない。“有+Y”と助動詞のこのような違いから“有+Y”が完全な助動詞ではないことが窺える。

### 5.3.2.2 “有+Y”と助動詞の後続成分

周知のように、助動詞は述詞目的語、すなわち、動詞性または形容詞性の目的語両

方をとることができる。それに対して、“有+Y”は動詞性成分しかとらず、形容詞性成分を伴うことができない。

(25) a. 妈, 到时 您 准 能 高兴。(CCL)

お母さん、その時 あなた きっと AUX 嬉しい

[お母さん、その時、あなたはきっと嬉しく思うだろう。]

b. \*妈, 到时 您 准 有 希望 高兴。

お母さん、その時 あなた きっと ある 見込み 嬉しい

[お母さんはその時、嬉しく思う見込みがある。]

(26) a. 我们 做事 应该 堂堂正正。(CCL)

私たち やる こと AUX 正々堂々

[私たちは全ての事に正々堂々と行動すべきだ。]

b. \*我们 做事 有 必要 堂堂正正。

私たち やる こと ある 必要 正々堂々

[私たちは全ての事に正々堂々と行動する必要がある。]

(27) a. 对 这个问题 的 理解 大家 可以 不 一致。

に対する この 問題 助詞 理解 みんな AUX NEG 同じだ

[この問題に対する理解はみんな同じでなくてもよい。]

b. \*对 这个问题 的 理解 大家 有 理由 不 一致。

に対する この 問題 助詞 理解 みんな ある 理由 NEG 同じだ

[この問題に対する理解はみんな同じでない理由がある。]

(25) では、助動詞の“能(～だろう)”は形容詞の“高兴(嬉しい)”を伴うことができるのに対して、“有希望(見込みがある)”はそれができない。同様に、(26)では、助動詞の“应该(～するべきだ)”には形容詞の“堂堂正正(正々堂々)”が後続することができるのに対して、“有必要(必要がある)”にはそれができない。(27)も同じである。

ただし、注意されたいのは、一部の“有+Y”は、助動詞ほど自由に形容詞を伴うことができないが、形容詞を後続させることも可能である。これについては 5.3.3 節で詳しく説明する。

(28) 他说, 结婚 有可能 很 快, 也 可能 遥遥无期。(CCL)

彼 言う 結婚 ある 可能性 とても 早い も 可能 はるか遠い

[彼は結婚が早いかもしれないし、はるかに遠いかもしれないと言った。]

(29) 王上 没 有必要 完美, 而且 那 也 是 不可能 的。(BCC)

王 NEG ある 必要 完璧 しかも それ も COP 不可能 SFP

[王は完璧である必要がない。それは不可能でもある。]

(30) 一个 人 如果 不 能 在 过程中 找到 幸福, 这辈子 不太

1人 人 もし NEG AUX に 過程 見つける 幸せ 一生 あまり

有 希望 幸福 了。(BCC)

ある 見込み 幸せ SFP

[人がもし過程に幸せを見つめることができなかつたら、この一生は幸せになる見込みはあまりないと思う。]

上述のように、助動詞は形容詞性成分と動詞性成分両方を伴うことができるのに対し、“有+Y”は基本的に動詞性成分しか伴うことができない。このことも“有+Y”が助動詞と同じ文法機能を持っていないことを示している。

### 5.3.2.3 完了アスペクト助詞“了”との共起

中国語には2種類の「了」がある。動詞の直後に後続し動作の実現・完了を表すアスペクト助詞の「了」(通称「了<sub>1</sub>」)と、文末に現れ、新状況の発生や変化を表す文末助詞の「了」(通称「了<sub>2</sub>」)である。

(31) a. 他 一个人 做 了<sub>1</sub> 所有 的 工作。

彼 1人 やる アスペクト助詞 全て 助詞 仕事

[彼は1人で全ての仕事をやった。]

b. 天气 终于 晴 了<sub>2</sub>!

天気 やっと 晴れる 文末助詞

[やっと晴れた!]



野村 (2003) などでは、モダリティは一般的に「非現実」を表す意味論的カテゴリーとして考えられると指摘されている。そこから「非現実」を表すモダリティは完了を表すアスペクト助詞「了」との共起が困難であると考えられる。本節では、モダリティとの共起が困難である「了」を対象とし(以降「了」とする)、“有+Y”と助動詞の共起状況について検討していく。

(32) a. 我 终于 有 勇气 完成了 这 篇 论文。(CCL, 以下も同じ)

私 やっと ある 勇氣 完成する-PERF この CL 論文

[私はやっと勇氣を持って、この論文を書き上げた。]

b. \*我 终于 敢 完成了 这 篇 论文。

私 やっと AUX 完成する-PERF この CL 論文

[私はやっこの論文を書き上げる度胸があった。]

(33) a. 直到 80年代末, 我 才 有 能力 为 这个 家 购置了 电视。

まで 80年代末, 私 初めて ある 能力 ために この 家 買う-PERF テレビ

[80年代末になってはじめて、私は十分な能力を持つようになり、この家のために、テレビを買っていた。]

b. \*直到 80年代末, 我 才 能 为 这个 家 购置了 电视。

まで 80年代末, 私 初めて AUX ために この 家 買う-PERF テレビ

[80年代末になってはじめて、私はこの家のために、テレビを買うことができた。]

(34) a. 我 很快 有 机会 在 戏 中 扮演了 一个 英雄形象。

私 すぐに ある 機会 で ドラマ 中 演じる-PERF 1つ 英雄イメージ

[私はすぐにチャンスがあつて、ドラマで英雄役を演じた。]

b. \*我 很快 可以 在 戏 中 扮演了 一个 英雄形象。

私 すぐに AUX 介詞 ドラマ 中 演じる-PERF 1つ 英雄イメージ

[私はすぐにドラマで英雄役を演じることができた。]

(35) a. 在 年近八十 的 时候, 老师 终于 有 资格 当上了 夜校 的 日语老师。

に 80歳近く 助詞 時 先生 やっと ある 資格 なる-PERF 夜学 助詞 日本語の先生

[80歳近くになった時、先生はやっと資格を持つようになって、夜学の日本語の先生になった。]

b. \*在 年近八十 的 时候, 老师 终于 可以 当上了 夜校 的 日语老师。

に 80歳近く 助詞 時 先生 やっと AUX なる-PERF 夜学 助詞 日本語の先生  
[80歳近くになった時、先生はやっと夜学の日本語の先生になることができた。]

(32) では、意志を表す“有勇气(勇気がある)”が完了アスペクト助詞の“了”と共起し、事態が既実現したものであることを示している。一方、同じく話し手の意志を表す助動詞の“敢(～する度胸がある)”は“了”と共起することができない。(33a)の“有能力(能力がある)”と(33b)の“能(～することができる)”は共に能力可能を表すものであるが、前者が“了”と共起することができるのに対して、後者はそれができない。(34)の“有机会(チャンスがある)”と“可以(～することができる)”,そして(35)の“有资格(資格がある)”と“可以(～してもよい)”についても同様の指摘ができる。

ただし、注意されたいのは、あらゆる“有+Y”が完了アスペクト助詞の“了”と共起できるわけではないということである。“有意向(意向がある)”,“有把握(自信がある)”,“有希望(見込みがある)”などは完了アスペクト助詞の“了”と共起することができない。

(36) \*我们公司 有 意向 开发了 新能源。

我が社 ある 意向 開発する-PERF 新エネルギー

[我が社は意向があって新エネルギーを開発した。]

(37) \*我 有 把握 一周之内 完成了 任务。

私 ある 自信 一週間以内 完成す-PERF 仕事

[私は自信があって、一週間以内に仕事を完成させた。]

(38) \*她 有 希望 考上了 大学。

彼女 ある 見込み 合格する-PERF 大学

[彼女は大学に合格できた見込みがある。]

完了アスペクト助詞の“了”と共起できない“有+Y”の存在は、全ての“有+Y”の文法的特徴が均質的ではないことを示唆していると考えられる。これについても、後節で説明するが、名詞Yの語彙的意味が関与しているものと考えられる。た

だ、助動詞が全く完了アスペクト助詞の“了”と共起できないという事実と比べ、一部とはいえ“有+Y”が完了アスペクト助詞の“了”と共起することができるというのは注目すべき特徴であると言えるだろう。“有+Y”と助動詞のこのような違いからも“有+Y”が完全な助動詞ではないことが分かる。

#### 5.3.2.4 まとめ

以上、“有+Y”と助動詞の連用順序、後続成分および完了アスペクト助詞の“了”との共起状況という文法機能の面から、両者の文法的特徴を考察した。“有+Y”は助動詞と異なり、連用する際に助動詞と同じ連用順序に従わなくてもよく、形容詞成分を伴うことができず、動詞性成分しか伴うことができない。また完了アスペクト助詞の“了”と共起することができるため、完全な助動詞、すなわちモダリティではないと考えられる。助動詞的なモーダルな意味を持ちながら、助動詞とは文法的振る舞いを異にするという“有+Y”の複雑な特徴は、名詞 Y の語彙的意味だけでなく、“有+Y”を含む“有+Y+Z”連動構造の意味とも大きく関わっている。次節では、“有+Y+Z”連動文の特徴を具体的に分析する。

#### 5.3.3 “有+Y+Z”連動文の特徴

“有+Y+Z”連動文の特徴を見る前に、まず現代中国語における連動文の定義を確認しておきたい。高増霞（2006）によれば、連動文とは、2つあるいは2つ以上の動詞（句）が連続し、同じ主体の状況を述べ、動詞（または動詞句）の間に偏正関係、動目関係、連合関係などの文法関係がなく、かつ形式上連続するいくつかの動詞（句）の間に接続詞やポーズなどのない構文である。具体例で言うと、(39)における“脱了鞋（靴を抜いた）”と“走进屋里（家の中に入った）”という2つの動詞句が連続し、同じ主体の“他（彼）”のことを述べている。“脱了鞋（靴を抜いた）”と“走进屋里（家の中に入った）”は修飾と被修飾の関係にもないし、動詞と目的語の関係にもない。そして、両者の間に接続詞やポーズなどもない。

(39) 他 脱了 鞋 走进 屋里。

彼 脱ぐ-PERF 靴 入る 家の中

[彼は靴を脱いで家の中に入った。]

連動文の定義から分かるように、連続するいくつかの動詞（句）は主語が同じでなければならない。そして、同じ主体が複数の動作を行なうということから主体が意志を持たなければならないと考えられる。これは連動文の1つの重要な特徴である。連動文のもう1つの顕著な特徴は時間順序性である。つまり、連続する複数の動詞（句）が表す行為は時間的に継起的に発生する行為である。例えば、(39)における“脱了鞋（靴を脱いだ）”と“走进屋里（家の中に入った）”は時間的に前者が先に起こり、後者が後に発生したことを表す。

“有+Y+Z”連動文は最初の動詞が“有”によって担われる連動文である。(39)のような“脱（脱ぐ）”、“走（歩く）”などの動作動詞からなる典型的な連動文と比べ、1つ目の動詞が所有・存在を表す状態動詞の“有”に担われているという点では、“有+Y+Z”連動文は特徴的であると言えるが、やはり上述の連動文の規則を守っている。

(40)について言えば、“有能力（能力がある）”と“解决这个问题（この問題を解決する）”の主語はいずれも“他（彼）”である。また、“有能力（能力がある）”と“解决这个问题（この問題を解決する）”は修飾と被修飾の関係にもないし、動詞と目的語の関係にもない。そして、両者の間に何も挟まれていない。(41)も同じである。

(40) 他 有 能力 解决 这个问题。

彼 ある 能力 解決する この 問題

[彼はこの問題を解決する能力がある。]

(41) 选民 有 权利 参加 选举。

選挙人 ある 権利 参加する 選挙

[選挙人は選挙に参加する権利がある。]

また、時間的側面について言えば、最初の動詞句“有+Y”が状態を表すものであるため、“有+Y+Z”は典型的な連動文の有する継起性に当てはまらないように見える。しかし、“有+Y+Z”連動文の意味、つまり、YがZを実現させるための条件であり、

“有”はその条件 Y の存在を表し、“有+Y+Z”全体が条件 Y の存在を前提として (Y があってはじめて)、Z を行なうという点から言えば、“有+Y+Z” はやはり前後関係を保持していると考えられる。例えば、(40) では、Y である“能力 (能力)”が“解决这个问题 (この問題を解決する)”を行なう条件であり、“能力 (能力)”が存在 (つまり“有能力 (能力がある)”) してはじめて、Z の表す行為である“解决这个问题 (この問題を解決する)”が実現する。同様に、(41) における Y である“权利 (権利)”は後続する Z “参加选举 (選挙に参加する)”を行なう条件であり、その条件が存在してこそ、はじめて“参加选举 (選挙に参加する)”が実現する。Z が Y の存在を前提として成立する根拠には、(40′) (41′) のように否定文になると、Y の存在ばかりでなく、Z の行為自体の成立も否定されることが挙げられる。

(40′) 他 没 有 能力 解决 这个 问题。

彼 NEG ある 能力 解决する この 問題

[彼はこの問題を解決する能力がない。]

(41′) 选民 没 有 权利 参加 选举。

選挙人 NEG ある 権利 参加する 選挙

[選挙人は選挙に参加する権利がない。]

(40′) (41′) から分かるように、Y の存在を否定する否定辞“没”を用いる否定文では、Y である“能力 (能力)”、“权利 (権利)”の存在だけでなく、Z である“解决这个问题 (この問題を解決する)”、“参加选举 (選挙に参加する)”の成立 (実現) も否定されている。

上述のように、“有+Y+Z”連動文においては、Y の存在、つまり“有+Y”は Z を実現させるための前提である。そうである以上、当然“有+Y”が Z の実現する可能性や必要性などに関わっている。要するに、“有+Y”が助動詞のようにモーダルな意味を表せるという意味特徴は“有+Y+Z”連動文の構文的意味に由来するものであると言える。また、Z を実現させるための条件は 1 つだけにとどまらず、複数存在する可能性が十分ありうるため、形式上、複数の“有+Y”が並列して Z に前置されることがある。(42) のように、2 つの“有+Y”が連用することができ、そして連用順序が自由に入れ替えられる点には、このことが原因として関わっていると考えられる。

(42) a. 政府 有 责任、有 条件 承担 输送 民工 的 任务。

政府 ある 責任 ある 条件 担う 輸送する 民工 助詞 任務

[政府は民工を輸送する任務を担う責任、条件がある。]

b. 政府 有 条件、有 责任 承担 输送 民工 的 任务。

政府 ある 条件 ある 責任 担う 輸送する 民工 助詞 任務

[政府は民工を輸送する任務を担う条件、責任がある。]

更に、ZはYの存在を前提として行われる行為であるため、その行為は実現済みの行為でも、これから行なう未実現の行為でも可能であると考えられる。

(43) 我 很快 有 机会 在 戏 中 扮演了 一个 英雄形象。(CCL)

私 すぐに ある 機会 で ドラマ 中 演じる-PERF 1つ 英雄イメージ

[私はすぐに機会があつて、ドラマで英雄役を演じた。]

(44) 只要 努力, 我们 就 有 机会 成功。

すれば 努力する 私達 きっと ある 機会 成功する

[努力すれば、私達は成功する機会がある。]

(45) a. 我们公司 有 意向 开发 新能源。

我が社 ある 意向 開発する 新エネルギー

[我が社は意向があつて新エネルギーを開発する。]

b. \*我们公司 有 意向 开发了 新能源。

我が社 ある 意向 開発する-PERF 新エネルギー

[我が社は意向があつて新エネルギーを開発した。]

(43)は、“机会 (機会)”の存在を前提に、ドラマで英雄役を演じるという行為が実現したということを表す。Zは実現済みの行為であるため、完了アスペクト助詞“了”と共起することができる。同じく、“机会 (機会)”の存在を前提としているが、(44)におけるZが表す行為“成功 (成功する)”は未実現のものである。“有+Y”がアスペクト助詞の“了”と共起できるのも“有+Y+Z”連動文の構文的意味に起因すると考えられる。

ただし、名詞Yの語彙的意味により、Zが未実現の行為を表すものでなければなら

ない場合がある。例えば、(45) の名詞“意向 (意向)”には未実現の行為を表す“开发新能源 (新エネルギーを開発する)”を後続させることができるが、完了アスペクト助詞“了”と共起し、実現済みの行為を表す“开发了新能源 (新エネルギーを開発した)”を後続させることができない。これは名詞“意向 (意向)”の語彙的意味の影響によるものと考えられる。“意向 (意向)”とは、どうするつもりか、どうしたいかという考えのことである。その意味から分かるように、実行済みの行為とは相容れない。“意向 (意向)”のように、語彙的意味として未実現の行為を要請する Y はほかに、“信心 (自信)”、“把握 (自信)”、“希望 (見込み)”などがある。

最後に、“有+Y”は(46)のように形容詞成分を伴うことができず、動詞(句)しか伴わないという点については、これは連動文の文構造による制約であると考えられる。連動文は動詞(句)連続によって構成された構文であるため、Zは動詞(句)でなければならない。

(46) \*职员 有 责任 诚实、廉洁。

職員 ある 責任 誠実 廉潔

[職員は誠実、廉潔である責任がある。]

前節で述べたように、一部の名詞、例えば(47)～(49)における“可能 (可能性)”、“必要 (必要)”、“希望 (見込み)”には形容詞を後続させることができる。

(47) 他说, 结婚 有 可能 很 快, 也 可能 遥遥无期。(CCL)

彼 言う 結婚 ある 可能性 とても 早い も 可能 はるか遠い

[彼は結婚が早いかもしれないし、はるかに遠いかもしれないと言った。]

(48) 王上 没 有 必要 完美, 而且 那 也 是 不可能 的。(BCC)

王 NEG ある 必要 完璧 しかも それ も COP 不可能だ SFP

[王は完璧である必要がない。それは不可能でもある。]

(49) 一个 人 如果 不 能 在 过程中 找到 幸福, 这辈子 不太

1人 人 もし NEG AUX に 過程 見つける 幸せ 一生 あまり

有 希望 幸福 了。(BCC)

ある 見込み 幸せ SFP

[人がもし過程に幸せを見つけることができなかつたら、この一生は幸せになる見込みはあまりないと思う。]

しかし、これらの名詞からなる“有+Y+Z”を注意深く見ると、連動文から逸脱していることが分かる。まず、1つ目の動詞句“有+Y”の主語は、文の主語と一致するとは言い難いように思われる。言い換えれば、“有+Y”とZは同じ主語を共有していない。例えば、(50)～(52)のZである“重新参加选举(改めて選挙に参加する)”、“考上大学(大学に合格する)”、“重新考虑这个问题(この問題を改めて考える)”の主語はそれぞれの文頭の“他(彼)”、“她(彼女)”と“我们(私たち)”であるが、“有+Y”については、文頭の名詞をそのまま主語としているとは見なしにくい所がある。それらの人物が可能性や見込みを持っているというよりは、むしろ話し手自身の見立てとして事態全体に対する可能性や見込みが述べられているものと思われる。

(50) 他 有 可能 重新 参加 竞选。(CCL)

彼 ある 可能性 改めて 参加する 選挙

[彼は改めて選挙に参加する可能性がある。]

(51) 她 有 希望 考上 大学。

彼女 ある 見込み 合格できる 大学

[彼女は大学に合格できる見込みがある。]

(52) 我们 有 必要 重新 考虑 这个问题。

私たち ある 必要 改めて 考える この 問題

[私たちは改めてこの問題を考える必要がある。]

また、“有可能(可能性がある)”、“有希望(見込みがある)”と“有必要(必要がある)”によって構成される“有+Y+Z”が連動文らしくないことは、主語の特徴からも窺うことができる。前述のように、連動文は同一の主体が複数の動作を行なう構文であるため、主語は意志を持たなければならない。しかし、(53)～(55)に示すように、“有可能(可能性がある)”、“有希望(見込みがある)”と“有必要(必要がある)”からなる“有+Y+Z”においては、意志を持たない“钢铁价格(剛鉄の価格)”、“交通状况(交通状况)”と“软件开发(ソフトウェア開発)”も主語になれる。



(53) 钢铁价格 极 有可能 出现 大起大落 的 情形。(CCL)

剛鉄 価格 とても ある 可能性 起こる 上がったたり下がったりする 助詞 こと

[剛鉄の価格は大幅に上がったたり下がったりする可能性がある。]

(54) 交通状况 短时间 有希望 改变。(CCL)

交通状况 短い間 ある 見込み 改善する

[交通状况は短い間で改善される見込みがある。]

(55) 软件 开发 有必要 认真 考虑 软件 的 体系 结构。(CCL)

ソフトウェア 開発 ある 必要 真剣に 考える ソフト 助詞 体系 構造

[ソフトウェアの開発はソフトの体系的構造を真剣に考える必要がある。]

これらの“有+Y”はこの点においても、助動詞と共通している。(56)～(58)のように、助動詞は意志を持たない無情物主語とも問題なく共起することができる。

(56) 环境污染 会 破坏 鱼类 的 生长环境。(CCL)

環境汚染 AUX 壊す 魚 助詞 生息環境

[環境汚染は魚の生息環境を壊すだろう。]

(57) (经 本級人民政府 同意,) 督导结果 可以 向 社会 公布。(CCL)

(得る 本級人民政府 同意) 指導監査結果 AUX に 社会 公表する

「(政府の同意を得た上で,) 指導監査結果は社会に公表してもよい。」

(58) 索引 应该 简洁 明了。(CCL)

索引 AUX 簡潔 明瞭

[索引は簡潔明瞭であるべきだ。]

以上のことから、“有可能(可能性がある)”、“有希望(見込みがある)”と“有必要(必要がある)”は連動文の前項動詞句としての働きを失い、助動詞のように話し手の態度を表す役割を果たしていることが分かる。言い換えれば、連動文の前項動詞句から助動詞へと文法化が進んでいるのである。そのため、助動詞のように形容詞を伴うことができる。

“有可能(可能性がある)”、“有希望(見込みがある)”と“有必要(必要がある)”が助動詞に近い振る舞いをしていることから、“可能(可能性)”、“希望(見込み)”、

“必要（必要）”は“能力（能力）”、“机会（機会）”、“资格（資格）”などよりも文法化が進んでいると推測することができる。

### 5.3.4 まとめ

以上、助動詞の文法機能との比較から、“有+Y+Z”連動文における“有+Y”は真のモダリティであるかどうかを検証した。結果を表4にまとめる。

表4 “有+Y”と助動詞の文法的特徴

対象	特徴	連用順序の有無	形容詞後続可否	“了”との共起可否	無情物主語の生起可否
助動詞		+	+	-	+
“有+Y”を構成するY					
意志	勇气	-	-	+	-
願望	決心、意向、意思	-	-	-	-
可能性	能力、条件、机会	-	-	+	-
	信心、把握	-	-	-	-
	可能、希望	-	+	-	+
必要性	必要	-	+	-	+
	责任	-	-	-	-
許可	权利、资格、理由	-	-	+	-

表4から、“有+Y+Z”連動文における“有+Y”は真のモダリティではないことが分かる。前述のように、“有+Y”が助動詞のようにモーダルな意味を表せることには、“有+Y+Z”連動文の「Yの存在（有+Y）を前提条件として、動作行為Zを行う」という構文的意味が大きく関わっていると考えられる。ただし、一部の“有+Y”、例えば、可能性類の“有可能（可能性がある）”、“有希望（見込みがある）”と必要性類の“有必要（必要がある）”が助動詞に近い振る舞いをしていることが指摘できる。また、名詞の語彙的意味により、“有+Y”が異なる文法的振る舞いをしていることも窺うことができる。例えば、人間の意志と関わる“决心（決心）”、“意向（意向）”、“意

思（意向）”、“信心（自信）”、“把握（自信）”からなる“有+Y”は完了アスペクト助詞と共起しにくい。名詞の意味によって、“有+Y”の文法機能には揺れが見られるが、“有+Y”がZを実現させるための条件の存在を表し、ZはそのYの存在を前提として行われるという点は全ての“有+Y+Z”に共通している。

ただし、これらの抽象名詞は、“有+Y+Z”連動構造という構文環境を離れると、“有”と結びついて、モーダルな意味が生まれにくい。例えば、これらの抽象名詞は5.2節で言及した“有+Z的+Y”連体文に現れる場合、Zに限定されるYの有無のみを表し、モーダルな意味を表さない。

(59) 他 有 解決 这个 问题 的 能力。

彼 ある 解決する この 問題 助詞 能力

[彼はこの問題を解決する能力がある。]

(60) 她 有 考上 大学 的 希望。

彼女 ある 合格できる 大学 助詞 見込み

[彼女は大学に合格できる見込みがある。]

(61) 他 有 被 淘汰 的 可能。

彼 ある られる 振り落とす 助詞 可能

[彼は振り落とされる可能性がある。]

(59)～(61)が示すように、“有+Z的+Y”においては、ZがYに先行し、Yを修飾している。それによって得られた名詞句“Z的Y”全体が動詞“有”の目的語になる。文全体はZに限定されるYそのものの有無のみを表す。例えば、(59)は、彼には、他の能力ではなく、「この問題を解決する」能力の有無を述べている。(60)(61)も、「大学に合格できる見込み」、「振り落とされる可能性」そのものの有無のみを述べている。これは、前述のYが“有”と結びつき、Zを行う前提条件を表す“有+Y+Z”連動文とは意味的に大きく異なっている。

上述のように、“有+Z的+Y”においては、Yと直接構成素の関係にあるのは動詞“有”ではなく、“Z的”である。言い換えれば、Yが動詞“有”と離れる位置にあるため、“有+…Y”の文法化が起こりにくいと考えられる。この点においても、“有”とYが直接構成素の関係になっている“有+Y+Z”連動文とは異なる。また、後に述べ

る日本語の「[Z+Y] がある」連体文とも構造的に大きく異なっている。

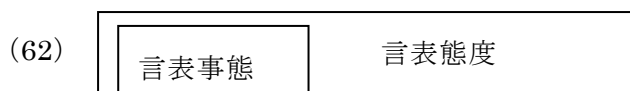
## 5.4 日本語の「[Z+Y] がある」の文法的特徴

本節では、日本語の「[Z+Y] がある」の文法的特徴を考察する。中国語の“有+Y”と同様に、「Y がある」が真のモダリティであるかどうかを明らかにするため、本論文では、真のモダリティ形式と比較しながら検証していく。比較に入る前に、次節では、まず「Y がある」とモダリティ形式の分類を整理しておきたい。

### 5.4.1 日本語のモダリティと「Y がある」の分類

#### 5.4.1.1 日本語のモダリティの分類

日本語のモダリティの分類は、研究者または研究目的によりさまざまである。本論文では、日本語のモダリティの分類を包括的に述べている仁田・益岡（1989）を参照する。仁田・益岡（1989：1）では、日本語の文の基本構造として、(62) のような「大きく質的に異なった 2 つの層から成り立っている」ものを想定している。



言表事態とは、話し手による世界の把握の仕方のうち、客観的な出来事や事柄を表している部分であり、命題核、ヴォイス、アスペクト、認め方、テンスまでが含まれる。言表態度はモダリティである（仁田・益岡 1989：1）。モダリティについて、仁田・益岡（1989）では、(63) のように定義されている。

(63) 〈モダリティ〉とは、現実とのかかわりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態の把握の仕方、及び、それらについての話し手の発話・伝達的態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現である。

（仁田・益岡 1989：2）

そして、仁田・益岡（1989）はモダリティを「言表事態めあてのモダリティ」と「発

話・伝達のモダリティ」の2類に分けた後で、これらの2類のモダリティの関係について、「彼も来るだろうね」のような例を挙げながら、「言表事態めあてのモダリティ」のあり方は、その文の「発話・伝達のモダリティ」のあり方によって規定されていると述べる。その根拠の1つとして、「だろう」で表示されている言表事態めあてのモダリティを発話・伝達のモダリティに属する「ね」が包んでいるが、逆の連鎖はありえないことが挙げられている。発話・伝達のモダリティが言表事態めあてのモダリティを規定しているという点は次表のように表現される。

表5 日本語のモダリティの分類（体系）<sup>31</sup>

モダリティの下位的タイプ			モダリティ形式			
			真性モダリティ（形式）		疑似モダリティ（形式）	
発話・伝達のモダリティ	（言表事態めあてのモダリティ） 働きかけ	命令	しろ、しなさい、するな、してくれ、してください、してちょうだい		—	
			誘いかけ	しょう		—
	待ち望み系	表出	意志・希望	う・よう、しょう、まい		つもり、たい、ほしい
			願望	しろ		—
	（言表事態めあてのモダリティ） 判断系	述べ立て	現象描写文	る形、た形		
			判定文	だろう、まい、ゼロ形式（する／だの）		かもしれない、にちがいない、ようだ、らしい、そうだ、はずだ、わけだ、のだ
		問いかけ	判断の問いかけ	の、か		—
			情意・意向の問いかけ	（たい）の、（ましよう）か		—
	副次的モダリティ			よ、わ、なあ	なければならない、べきだ、ものだ、してもよい、してはだめ	

表5について、2点補足して説明したい。まず、真性モダリティ（形式）と疑似モダリティ（形式）という概念について、仁田・益岡（1989）では次のように述べられている。「真の典型的なモダリティは、言表事態や発話・伝達のあり方をめぐっての発話時における話し手の心的態度の言語的表現である。こういった「発話時における」「話し手の」といった要件を満たした心的態度の表現を〈真性モダリティ〉と仮に呼び、この要件から外れたところを有している心的態度の表現を〈疑似モダリティ〉と

<sup>31</sup> 仁田・益岡（1989：1-52）本文の内容を表の形にして示した。

仮称する。したがって、真性のモダリティとは、(1) 過去になることもなければ、(2) 話し手以外の心的態度に言及するものでもないし、(3) 態度そのものの非存在を表す否定になることもないものである。こういった要件を欠いていくに従って、その形式のモダリティ形式としての疑似性が増していく」(仁田、益岡 1989: 34-35)。これは、後節で「Yがある」とモダリティの関係を論じるための1つの重要なポイントである。なお、仁田・益岡(1989)では、疑似モダリティ形式は、適性な条件のもとでは真性モダリティ(相当)の表現形式として使われうるとも指摘している。例えば(64)の「かもしれない」は「非過去」の条件下で、真性のモダリティ表現として使われているとされている。仁田・益岡(1989)は、これを〈疑似モダリティ形式の真性化〉と呼んでいる。

(64) 高津に、それが押しつけられることになるかもしれない。〔非過去〕

(仁田・益岡 1989: 39)

また、「副次的モダリティ」という下位タイプについて、仁田・益岡(1989)は、ある文類型の中で、その文類型を変更することなく、附随・付加的な心的態度を付け加えるものを「副次的モダリティ」と呼んでいる。これは、文類型を形成・決定する発話・伝達のモダリティや言表事態めあてのモダリティとは対照的であるとされている。

#### 5.4.1.2 「Yがある」の意味分類

「名詞 Y+が+ある」はさまざまな意味を表すことができるが、本論文では、先行研究でモダリティ形式またはモーダルな意味を表すとされている「Yがある」のみを考察の対象とする。本論文では、高橋・屋久(1984)、森山(1989)、仁田・益岡(1989)、益岡(2007)、仁田(2009)、大塚(2018)などの先行研究で触れられているモダリティと関わりがある「Yがある」を整理した上で、下記のように分類する。

表6 「Yがある」の意味分類

意味タイプ	Yがある
意志・願望	気がある、覚悟がある、 意志がある、願望がある
可能性	ことがある、可能性がある、おそれがある、 公算がある、見込みがある、見通しがある
必要・義務	必要がある、責任がある、義務がある
証拠	ふしがある、気配がある、気味がある

#### 5.4.1.3 比較の対象とする「Yがある」とモダリティ形式

個々の語彙ごとの性質により、同じ意味タイプの形式であっても、振る舞いが異なる場合があるため、本論文では、各意味タイプの代表的な「Yがある」とモダリティ形式のみを考察の対象とする。本論文で比較の対象とする「Yがある」とモダリティ形式は次表の通りである。

表7 比較の対象とする「Yがある」とモダリティ形式

意味タイプ	Yがある	モダリティ形式
意志	気がある	う・よう
可能性	ことがある、可能性がある、 おそれがある	だろう、かもしれない
必要性	必要がある	べきだ
証拠	ふしがある	ようだ

「かもしれない」、「べきだ」、「ようだ」は、仁田・益岡（1989）の分類では疑似モダリティに属しているが、仁田・益岡（1989）も述べているように、これらは非過去または非否定に使われる場合、真正モダリティとして機能する。以下では、真正モダリティとして使われる「かもしれない」、「べきだ」、「ようだ」のみを比較の対象とする。

## 5.4.2 「Yがある」とモダリティ形式の文法的特徴

本節では、上記の分類に基づき、各意味タイプの「Yがある」とモダリティ形式の文法的特徴を考察していく。

### 5.4.2.1 「意志」類

まず、「意志」類について、真のモダリティは、仁田・益岡（1989）で述べられるように、話し手自らの心的な情意を表すものであるため、主体を表す名詞句の人称が一人称に限られるといった人称制限を有している。

(65) {僕／\*君／\*彼} は今年こそは頑張ろう。(仁田・益岡 1989 : 13)

(65) が示すように、意志を表すモダリティ形式は、二人称、三人称の主体を表す名詞句を取りえない。一方、意志を表す「気がする」はそのような人称制限を持たない。

(66) 彼は風邪を治す気がするのでしょうか。(BCCWJ)

(67) 君がもしアメリカでラバジア式の最新式の火薬工場を造る気がするのなら、ワシントンの周辺がよいと思うよ。(BCCWJ)

(66) (67) に示したように、「気がする」は二人称、三人称の主体を表す名詞句も取ることができる。

また、過去形式を持つかどうかという点においても、モダリティ形式の「う・よう」と「気がする」の間に違いが見られる。「う・よう」自身が過去形にならないのに対して、「気がする」は (68) のように、それ自身が過去形になる。

(68) 最初は見ると気がありませんでしたが、キャストを見たら男性陣がすごくいい感じだったので見るの決定。(BCCWJ)



更に、疑問文に用いられるかどうかという点にも、「う・よう」と「気がする」の間に違いがある。疑問文の特性について、森山（1989）では、「疑問文とは、不確定情報の表明であり、当該情報を話し手のものとして把握していないことを表す」（森山 1989 : 82）と述べられている。言い換えれば、疑問文とは、話し手から情報の真偽確定を放棄されたものであり、話し手だけの判断なり捉え方なりを表す情報が入ってはいないのである（森山 1989 : 83）。一方、モダリティは、仁田・益岡（1989）で述べられるように、命題内容に対する話し手だけの固有の捉え方を表す形式である。そこで、疑問文<sup>32</sup>の中に、話し手固有の捉え方を表すモダリティ形式が生起しにくいと考えられる。

(69) \*僕は今年こそは頑張ろうか？（「か」のイントネーションが上昇する）

(70) あなたは、愛してはいない娘を妻になさる気がありますか？（BCCWJ）

(69) (70) が示すように、モダリティ形式の「う・よう」は疑問文に生起することができないのに対して、「気がする」は疑問文に生起することができる。

上述の説明から分かるように、意志を表す「気がする」は、人称制限の有無、過去形の有無、疑問文における生起可否の面において、モダリティ形式である「う・よう」と異なる振る舞いをしている。

#### 5.4.2.2 「可能性」類

可能性を表す複合形式「Yがある」とモダリティ形式「だろう」について、5.2節で述べたように、仁田（2009）は否定形、「タ形」になりうるかどうかという観点から両者の違いを論じている。

(71) a. 説明書どおり作っていけば失敗する。 ことはない。

b. \*説明書どおり作っていけば失敗するだろう ない。（仁田 2009 : 56）

<sup>32</sup> 森山（1989）では、「なるほど、そうか、彼が行くかもしれないか。」のような納得の意味を表す疑問文や、「彼がどこへ行ったかもしれないのか？」のような問い返しの疑問文は真の疑問文ではないと見なされている。本論文で言う疑問文にもこの2種類の疑問文を含めない。

- (72) a. 当時は盲腸の手術ですら命を落とすことがあった。(仁田 2009 : 59)  
 b. \*本人がやって来るだろう た。(仁田 2009 : 66)
- (73) a. この人がこの一作しか書けない可能性はない。  
 b. \*この人がこの一作しか書けないかもしれなく (は) ない。(益岡 2007 : 191)

(71) (72) が示すように、モダリティ形式の「だろう」はそれ自身が否定形にも、「タ形」にもなりえない。一方、「ことがある」はどちらにもなりうる。また、(73) のように、「かもしれない」も「だろう」と同様に否定の形をとることができないが、「可能性がある」は問題なく否定形を取ることができる。

否定形、「タ形」のほかに、疑問文に生起することができるかどうか、また話し手の判断を表す副詞と共起することができるかどうかといった点にも、「Y がある」とモダリティ形式の間に振る舞いの違いが見られる。

- (74) a. \*台風は来るかもしれないか?  
 b. 台風は来る [可能性／おそれ] があるか?  
 c. 台風は来ることがあるか?<sup>33</sup>
- (75) a. 多分台風は来る {だろう／かもしれない}。  
 b. \*多分台風は来る {可能性／おそれ} がある。  
 c. 多分台風は来ることがある。

(74) のように、「かもしれない」は疑問文に生起することができないのに対して、「ことがある」、「可能性がある」、「おそれがある」は疑問文に生起することができる。また、(75) に示したように、モダリティ形式である「だろう」と「かもしれない」は、蓋然性を表す副詞「多分」と共起することができるのに対して、「可能性がある」と「おそれがある」はそれができない。「たぶん」、「おそらく」、「きっと」などの蓋然性を表す副詞について、森山 (1989) では、これらは命題内容に対する話し手だけの判断を

<sup>33</sup> 不特定の台風の進路について述べる「台風は来ることがある」という文は、特定の台風の進路を述べる「台風は来る [可能性／おそれ] がある」と意味上の違いがあるものの、文としては成立する。(75c) も同じである。

表すものであると述べられている。したがって、これらの副詞によってモダリティであるかどうかをテストすることができると考えられる。モダリティ形式の「だろう」と「かもしれない」は「多分」と共起できるのに対して、「可能性がある」、「おそれがある」は「多分」と共起できないということから、後者は真のモダリティとは異なっていることが分かる。ただし、「ことがある」だけが「多分」と共起できることは、注目に値する。これは「可能性がある」や「おそれがある」と比べ、「ことがある」の方がよりモダリティ形式に近い振る舞いをしていることを示している。「ことがある」が「可能性がある」、「恐れがある」と比べ、より文法化が進んでいる証拠として、次のような点も挙げられる。

(76) いくら慎重に取り扱っても、この薬品は、外気の温度が高くなりすぎれば、  
時によっては、自然発火する恐れのある ことがある。(仁田 2009 : 61)

(76') ??いくら慎重に取り扱っても、この薬品は、外気の温度が高くなりすぎれば、  
時によっては、自然発火することがある 恐れがある。(仁田 2009 : 61)

仁田 (2009) によれば、(76) の「[恐れがある] + ことがある」という連鎖が成り立つのに対して、「[ことがある] + 恐れがある」という連鎖は成立しないという。このことから、仁田 (2009) は、「恐れがある」は「ことがある」に比べて、より客体的であると述べている。それを逆に言えば、「ことがある」の方がよりモダリティのような主観的な要素に近いということになるだろう。

以上、否定形、「タ形」になりうるかどうか、疑問文に生起することができるかどうか、また話し手の判断を表す副詞と共起することができるかどうか、という 3 つの側面から、可能性の意味を表す「ことがある」、「可能性がある」、「おそれがある」を、モダリティ形式の「だろう」、「かもしれない」と比較した。結果、前者が後者と異なる振る舞いをしていること明らかになった。言い換えれば、「ことがある」、「可能性がある」と「おそれがある」は真のモダリティではないことが分かった。ただし、この 3 つの形式は全く同質のものではなく、「ことがある」は、ほかの 2 つの形式と比べ、よりモダリティ形式に近い振る舞いをしていることも指摘できる。

### 5.4.2.3 「必要性」類

言表事態に対して、その実現を必要性のあるものとして捉える「べきだ」は、仁田・益岡（1989）では副次的なモダリティとして扱われている。その理由は 5.4.1 節でも簡単に触れたが、働きかけ、表出、述べ立て、問い掛け、判断といった発話・伝達のモダリティと言表事態めあてのモダリティが文類型を形成・決定するのと異なり、「べきだ」のような副次的モダリティは、(77) のように、述べ立ての判断文に生起し、その文が判断文であることを変化させない。

(77) オツネの錯覚と同じようにこれも小僧に錯覚ありと見るべきだ。

(仁田・益岡 1989 : 50)

(78) オツネの錯覚と同じようにこれも小僧に錯覚ありと見るべきだろう。

(仁田・益岡 1989 : 50)

また、(78) の「べきだろう」といった連鎖の存在から、仁田・益岡（1989）は、「べきだ」を判断文に生起するところの副次的モダリティに位置付けている。つまり、「べきだ」が表す必要性は、判断のモダリティ形式「だろう」によってその捉え方が表される対象の側に属している<sup>34</sup>。この意味では、高梨（2010）でも述べられているように、「べきだ」類のモダリティは、「だろう」類のモダリティと比べより客観的であると考えられる。その客観性は疑問文の中で自然に用いることから窺うことができる。

(79) うちへ帰るべきですか。(高梨 2010 : 36)

(80) ?雨が降るかもしれませんか。(高梨 2010 : 36)

高梨（2010）は、(79) における「べきだ」は疑いの対象の側に属していると述べている。「だろう」類のモダリティと並列・並存することができるという点と、疑問文の中に生起可能であるという点において、複合形式の「必要がある」とモダリティ形式の「べきだ」とは共通している。

---

<sup>34</sup> 高梨 2010 : 37 に基づく。

(81)それが真実なのかどうかは、あらためて検証する必要があるだろう。(BCCWJ)

(82)それを実現するために、どのような資源を割り当てる必要があるか？(BCCWJ)

ほかに、(83) (84) のように、名詞修飾節の内部に生起可能であるという点や形式自体の前にテンスの対立を持たない、という点においても、「必要がある」はモダリティ形式の「べきだ」と同じ振る舞いをしている。

(83) a. 当面、やるべきことは二つある。(BCCWJ)

b. 当面、やる必要があることは二つある。

(84) a. 彼は [謝る／\*謝った] べきだ。

b. 彼は [謝る／\*謝った] 必要がある。

上述のように、複合形式の「必要がある」とモダリティ形式の「べきだ」との間には確かに多くの類似性がある。しかしながら、だからといって、「必要がある」と「べきだ」の文法化の程度が同等であるとは言えるわけではない。次のように、「必要」と「ある」の間に副詞などほかの要素を挿入することができることや、否定形の「必要がない」の後ろに変化を表す「なる」を付加できることなどから、「必要がある」は、個々の要素の独立度が高いことが分かる<sup>35</sup>。

(85) 買う必要がたぶんある。(高梨 2010 : 135)

(86) 出張する必要がなくなる。(高梨 2010 : 136)

以上から分かるように、複合形式の「必要がある」は、構造全体として「べきだ」に近いモーダルな意味を表しているものの、1つのモダリティ形式として十分に文法化が進んでいるとは言い難い。

---

<sup>35</sup> 高梨 2010 : 135-136 に基づく。「必要がある」の文法化の度合いについて、高梨 (2010) では、ほかに肯否の対応と取りたて助詞の使用、形態と接続の仕方からも論じられている。

#### 5.4.2.4 「証拠」類

「証拠」類は、命題内容として描き出された事態の成立が、存在している徴候や証拠から引き出され捉えられたものであることを表す類である。この一類（例えば、「ようだ」、「みたいだ」、「らしい」など）は、仁田・益岡（1989）では「だろう」や「かもしれない」などと並列するものとして、判断のモダリティの1つの下位類として扱われているが、推量や蓋然判断と異なるところが大きいので、本論文では「だろう」や「かもしれない」などとは別に、「証拠」類という一類を設けることにする。「ようだ」類と「だろう」、「かもしれない」類の違いについて、森山等（2000）では、条件節を取りうるか、「ジャ」、「どうやら」、「きっと」などと共起できるかどうか、「ト思ウ」に埋め込まれるか、事態成立を疑問化することができるかどうかといった点から詳しく論じている。その中で特に事態成立の疑問化という点において、「ようだ」類は他のモダリティ形式と異なる特性を持つため、ここでは森山等（2000）を引用しながら説明する。

- (87) a. あの飛行機、飛び立つ {ようだ/らしい} が、本当に飛び立つかな。  
b. あの飛行機、飛び立つ {\*だろう/\*にちがいない/?かもしれない} が、本当に飛び立つかな。（森山等 2000 : 142）

森山等（2000）によれば、「ようだ」類は（87a）のようにすぐさま事態成立を疑問化しても逸脱性は生じないが、「だろう」類は（87b）のように逸脱性が発生するという。なぜこのような現象が起こるのか、その理由について、森山等（2000）は、「推量は、話し手の認識の中に事態成立を捉えたものである。自らの主体的な認識の中に事態成立を捉えておきながら、ただちにその成立を疑念のもとに放棄する、ということは自己矛盾になる（森山等 2000 : 142）」と述べている。一方、「ようだ」のような証拠性判断については、「徴候や証拠から引き出された事態を述べるとともに、その事態を引き出した徴候や証拠を間接的に述べている。そのことによって、徴候を疑い、引き出された事態を放棄することは、自己矛盾にはならない（森山等 2000 : 142）」とする。これに基づいて考えれば（88）が成立せず、（89）は成立するという事実を説明することができる。「かもしれない」は、命題内容または事態成立の真偽確定に対する話

し手の態度（捉え方）そのものを直接に表明するものであるため、事態成立の真偽確定を放棄したり、疑ったりする文脈には生起しにくい。一方、「ようだ」は事態が成立する背景に何らかの証拠が存在していることを暗示するものであるため、言い換えれば、事態成立の真偽確定に対する直接的な態度表明ではなく、間接的に事態が成立する根拠の存在を表すものであるため、根拠を疑うような文脈に用いられると考えられる。

(88) \*台風は来るかもしれないか？

(89) 台風は来るようですか？

疑問文に生起することができるという点は、「証拠」類のモダリティ形式の 1 つの特徴と言える。モダリティ形式の「ようだ」と同様に、証拠を表す「ふしがある」も疑問文に用いられる。

(90) a. お子さんは何かピアノに関心を持っているようですか？ (BCCWJ)

b. お子さんは何かピアノに関心を持っているふしがありますか？

ただし、(91) のように、「[ふしがある]+ようだ」という連鎖が成立することから、「ふしがある」はより命題内容に近い客体的なものであると言える。

(91) 彼はどこかで「これは営業なのでは？」と思っている節があるようなのです。(BCCWJ)

上述のように、「ふしがある」は、モダリティ形式の「ようだ」の一部の用法を持つが、「ようだ」と全く同じ振る舞いをしているわけではないため、真のモダリティに比べると、より客観性の高い表現であると言えるだろう。その意味で真のモダリティとは見なし難い。

### 5.4.3 本節のまとめ

本節では、先行研究でモダリティ形式またはモーダルな意味を表すとされている「Yがある」を分類した上で、文法機能の面から各意味タイプの「Yがある」を、モダリティ形式と比較した。ほとんどの「Yがある」はそれに対応するモダリティ形式と比べると文法化の程度が低いことが明らかになった。ただし、その中で文法化の過程を進んでいるものがあることも窺える。例えば、可能性類の「ことがある」は、同類の「可能性がある」や「おそれがある」と比べ、よりモダリティ形式の「だろう」、「かもしれない」に近い振る舞いをしている。文法化の度合いに差こそあるものの、「Yがある」は文法化が起こりうるという点においては、5.3節で述べた中国語の“有+Z的+Y”連体文と大きく異なる。5.3節で述べたように、統語構造的に日本語の「[Z+Y]がある」に対応する中国語の“有+Z的+Y”連体文においては、SVO語順をとり、かつ修飾語が被修飾語に先行するという中国語特有の語順のために、修飾語の“Z(的)”は“有”とYの間に生起することになる。言い換えれば、Yが動詞“有”と離れた位置にあるため、“有+…Y”の文法化が起こりにくいのだと考えられる。一方、日本語の「[Z+Y]がある」連体文においては、Yは前方のZの修飾を受けながらも、動詞「ある」とも隣接している。こうした統語環境が、「Yがある」の文法化を可能にするのだと考えられる。

## 5.5 おわりに

本章では、中国語の“有+Y+Z”連動文と、日本語の「[Z+Y]がある」連体文に注目し、構文における“有+Y”と「Yがある」がモダリティ機能を持つかどうかを検証した。真のモダリティ形式の文法機能と比較した結果、“有+Y”と「Yがある」は真のモダリティではないことが明らかになった。“有+Y”と「Yがある」が持っているモーダルな意味またはモダリティに近い文法機能は、抽象名詞Yの語彙的意味と、それぞれを含む構文の意味または統語構造が相互作用した結果生じたものであると本論文は考える。具体的に言えば、“有+Y”が助動詞的な意味を表せる背景には、まず個々の抽象名詞Yが持つ語彙的意味が関わっていると考えられる。このことは“有+



Y”の意味分類からも窺うことができる。しかし、5.3.4節で述べたように、同じ抽象名詞であっても、“有+Y+Z”連動構造という構文環境を離れると、“有”と結びついても、モーダルな意味が生まれない。したがって、抽象名詞 Y の語彙的意味のほかに、「Y の存在（有+Y）を前提条件として、動作行為 Z を行う」という“有+Y+Z”連動文の構文的意味も大きく関わっていると考えられる。また、「Y がある」がモダリティに近い文法機能を持つのは、抽象名詞 Y の語彙的意味のほかに、Y が位置的に Z に近いだけでなく、動詞「ある」にも近いという「[Z+Y] がある」の統語構造とも密接に関わっていると考えられる。

## 第 6 章 構文間の関係

本章では、これまでに見てきた構文の間にどのような繋がりがあるかという構文間の関係を述べる。まず 6.1 節では、本論文で扱っている日本語の複数の構文の間の関係を説明する。続いて、6.2 節では、日本語と比較しながら中国語の複数の構文の間の関係を述べる。

### 6.1 日本語の各構文間の関係

本論文では、日本語の「[X は Z] + Y だ」人魚構文、「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」属性叙述文と、「X は [Z+Y] がある」所有・存在文という 4 つの構文を扱っている。それぞれの例として、以下のようなものが挙げられる。

- (1) 太郎は就職する気だ。
- (2) 太郎は何でも口に出したがる性格だ。
- (3) 太郎は何でも口に出したがる性格をしている。
- (4) 太郎は就職する気がある。

それぞれの構文は、3 章、4 章、5 章で述べたように、独立した構造と意味を持つ。しかしながら、これらは相互に全く関係のない構文というわけではなく、構造または意味の面で相互に関係し合っている。

まず、「[X は Z] + Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] だ」属性叙述文について、3 章で述べたように、この 2 つの構文はもともと同一構造、すなわち「X は [Z+Y] だ」という構造を持っている。しかし、名詞 Y の文法化の度合いにより、構造上以下の 2 類に分かれている。

- (i) 「X は Z」 + Y だ
- (ii) X は「Z+Y」だ

(i) は名詞 Y の文法化が進み、「Y だ」がモダリティ要素として独立した文「X は Z」に付加されている人魚構文である。(ii) は名詞 Y の文法化が進んでおらず、Y は命題の内部に留まり、Z の修飾対象となる名詞述語文であり、連体節によって修飾された名詞句が主語に対して叙述しており、全体として措定文に近い。ある文が (i) と (ii) のどちらの構造を有しているかについて、川島 (2016) は、同一の最小節内で否定辞と共起しなければならないとりたて詞の「シカ」によって判断することができる」と指摘している。

- (5) a. 太郎は来月会社を辞める見込みだ。  
b. 太郎しか会社を辞めない見込みだ。(川島 2016 : 54)
- (6) a. 太郎は子ども達の面倒を見る立場だ。  
b. \*太郎しか子ども達の面倒を見ない立場だ。(同上)

(5b) のように、「見込み」は節内での否定辞の共起を許容するため、(i) の構造に当たる。一方、「立場」は (6b) のように節内での否定辞の共起を許容しないため、(ii) の構造に当たると判断することができる。

本論文で扱っている「X は [Z+Y] だ」属性叙述文に用いられる名詞 Y、例えば、「性格」、「体質」などは文法化が進んでいないため、(ii) の構造に当たると考えられる。これは (7b) のように節内での否定辞と共起できないことから窺える。

- (7) a. 太郎は何でも口に出したがる性格だ。  
b. \*太郎しか何でも口に出したまらない性格だ。

一方、「[X は Z]+Y だ」人魚構文は、「もの」「こと」「ところ」のような形式名詞を用いるものを典型としているが、同時に「気」「予定」「見込み」のような文法化が進んでいる抽象名詞も用いられるため、(i) の構造に当たると考えられる。

- (8) a. 子供はわがママを言うものだ。  
b. 子供しかわがママを言わないものだ。

- (9) a. (今年の卒業生の中で) 太郎は例の会社に就職する気だ。  
b. (今年の卒業生の中で) 太郎しか例の会社に就職しない気だ。

ただし、実際の用例を見てみると、(i) タイプと (ii) タイプは必ずしもこのように明確に区分できるとは言えない。

- (10) a. 与党はこの法案を成立させる方針だ。  
b. 「与党しかこの法案を成立させない」方針だ。(川島 2017 : 69)
- (11) a. 彼の部屋はよく整理整頓されている感じだ。  
b. 「彼の部屋しかよく整理整頓されていない」感じだ。(同上)

(10b) (11b) が示すように、「方針だ」「感じだ」という形で、補文相当の節を承けているため、(i) の構造に当たると考えられる。しかしながら、川島 (2017) では、(10) (11) はいずれも「与党」「彼の部屋」を主題として、以下で主題に対する叙述が行われているとも捉えられるため、こうした文も、「性格だ」のような典型的な属性を表示する文と連続的に捉えられる可能性があるとは指摘されている。

要するに、本論文で扱っている「[XはZ] + Yだ」人魚構文と「Xは[Z+Y]だ」属性叙述文は一見すると、使用する抽象名詞も構造も異なる別々の構文ではあるが、実際にはこの2つの構文の典型的な例、すなわち形式名詞と文法化が進んでいない属性を表す抽象名詞からなる文を両極として、その間に多種多様な用例を含む連続体をなしていると考えられる。本論文では、その両極に位置する典型的な人魚構文と典型的な属性叙述文のみを対象とし議論している。今後その両極の間に位置する中間的なものの性質を詳しく検討していく必要があると考えられる。これは今後の課題としたい。

上述のように、「[XはZ] + Yだ」人魚構文では、「Yだ」がモダリティ要素として文に付加されている。その助動詞的機能は、角田 (2011, 2012) のほかに、新屋 (1989)、野田 (2006) などでも言及されている。例えば、新屋 (1989) では、文末名詞は述定の意味そのものを担うことにより、それぞれの語彙の意味に従って主観、説明、アスペクト、伝聞などを表すモーダルな成分に近づいていると述べられている。また、野田 (2006) では、「気」「覚悟」「見込み」「感じ」、「気配」などは助動詞相当の文末表

現と見なせると述べられている。文末の名詞 Y はモーダルな成分または助動詞に相当するという点において、「[X は Z] + Y だ」人魚構文と 5 章で扱っている「X は [Z+Y] がある」と非常に類似している。5 章で述べたように、「X は [Z+Y] がある」における「Y がある」もよく助動詞相当の機能を持つとされる。確かに、(12) ~ (14) のように、「[X は Z] + Y だ」と「X は [Z+Y] がある」は互いに置き換えられることが多く、そして意味的にもそれほどの差がないようである。

- (12) a. 太郎は就職する気だ。
- b. 太郎は就職する気がある。
- (13) a. 太郎は名古屋に行く予定だ。
- b. 太郎は名古屋に行く予定がある。
- (14) a. 首相は退任する見込みだ。
- b. 首相は退任する見込みがある。

しかしながら、5 章で説明したように、「X は [Z+Y] がある」における「Y がある」は意味の面では助動詞的な機能を持つように見えるが、文法の面では個々の要素の独立度が高く、文法化の度合いが非常に低い。一方、「[X は Z] + Y だ」人魚構文における名詞 Y は文法化が進んでいるものである。両構文のこのような違いは節内での否定辞との共起から見られる。

- (15) a. 太郎は就職しない気だ。
- b. \*太郎は就職しない気がある。
- c. 太郎は就職する気がない。
- (16) a. 太郎は名古屋に行かない予定だ。
- b. ??太郎は名古屋に行かない予定がある。
- c. 太郎は名古屋に行く予定がない。
- (17) a. 首相は退任しない見込みだ。
- b. \*首相は退任しない見込みがある。
- c. 首相は退任する見込みがない。

(15) ~ (17) に示したように、同じ名詞であっても、「[X は Z] + Y だ」人魚構文に使われる場合は、節内に否定辞が生起することができるが、「X は [Z+Y] がある」に使われる場合、節内に否定辞が生起することができない、または生起しにくい。節内の動詞を否定する場合と比べ、(15c) ~ (17c) のように「ある」を否定する方がより自然である。このようなことから、「[X は Z] + Y だ」人魚構文における「Y だ」はモダリティ要素として、独立した文「X は Z」に付加されていると分析することができるのに対して、「X は [Z+Y] がある」における「Y がある」は「Y」と「ある」の独立度が高いため、文法化が進んでいるモダリティ要素として分析することができない。つまり、「X は [Z+Y] がある」を「[X は Z] + [Y がある]」という構造で理解することはできない。「X は [Z+Y] がある」は、連体修飾 Z を受けた「[Z+Y] がある」全体が述部として主題 X について述べる措定文と分析するべきだと考えられる。

要するに、「[X は Z] + Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] がある」はたまたま (12) ~ (14) のように同じ名詞を用いることができ、そして意味も類似しているように見えるが、実際には異なる構造と意味機能を持っているのである。

また、「X は [Z+Y] がある」は連体修飾 Z を受けた「[Z+Y] がある」全体が述部として主題 X について述べる措定文である以上、当然人物の属性を叙述する「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」属性叙述文と関連性を持つと考えられる。(18) ~ (20) のように、人物の抽象的な属性を叙述する場合、「X は [Z+Y] がある」と「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」の3つの構文が用いられうる。しかし、どのような属性を述べるかという属性の性質によって、それぞれの構文の成立範囲は異なる。

- (18) a. 彼はいい度胸だ。  
b. 彼はいい度胸をしている。  
c. 彼は上司の指示に従わない度胸がある。
- (19) a. 彼は明るい性格だ。  
b. 彼は明るい性格をしている。  
c. \*彼は明るい性格がある。

- (20) a. \*彼は高いところに登る勇気だ。  
b. \*彼は高いところに登る勇気をしている。  
c. 彼は高いところに登る勇気がある。

(18) のように、「度胸」という属性を叙述する場合、「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」と「X は [Z+Y] がある」どちらも用いられる。一方、「性格」を叙述する場合、「X は [Z+Y] だ」と「X は [Z+Y] がある」は用いられるが、「X は [Z+Y] をしている」は用いられない。また、「勇気」という属性を述べる場合は、「X は [Z+Y] がある」と表現できるが、「X は [Z+Y] だ」や「X は [Z+Y] をしている」のようには表現できない。

既に 4 章で述べたように、これは Y が普通所有物か非普通所有物かという点と関わっている。人物の属性叙述において、「X は [Z+Y] だ」と「X は [Z+Y] をしている」は主に普通所有物に関わる属性を叙述する機能を分担しており、「X は [Z+Y] がある」は非普通所有物に関わる属性を叙述する機能を分担している。そのため、(19c) と (20a, b) は成立しない。また、「度胸」は非普通所有物であるにも関わらず、(18a) (18b) のように「X は [Z+Y] だ」と「X は [Z+Y] をしている」と共起することができる。これは一見すると反例に見えるが、実際にはその成立は非常に制限されている。すなわち、修飾語が「いい／すばらしい」である場合に限って、「X は [Z+Y] だ」と「X は [Z+Y] をしている」が成り立つ。通常は、(21) a, b のように非普通所有物の「度胸」は「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」と共起することができない。

- (21) a. \*彼は上司の指示に従わない度胸だ。  
b. \*彼は上司の指示に従わない度胸をしている。  
c. 彼は上司の指示に従わない度胸がある。

上述のように、人物の属性叙述において、普通所有物に関わる属性を叙述する「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」と非普通所有物に関わる属性を叙述する「X は [Z+Y] がある」は相補分布をなしている。この意味では、三者を体系的に捉えることができると考えられる。本論文では人物の普通所有物の属性を叙述する「X

は「[Z+Y]だ」と「Xは[Z+Y]をしている」それぞれの特徴および両者の違いを考察したが、人物の非普通所有物の属性を叙述する「Xは[Z+Y]がある」の特徴を言及することができなかった。(22)のように、「Xは[Z+Y]だ」と「Xは[Z+Y]をしている」と異なり、「Xは[Z+Y]がある」によって人物の非普通所有物の属性を叙述する際は、修飾語なしで名詞一語だけでも成立することが多い。この場合、「Yがある」には程度が高いという「程度性」の意味が含まれる。この「程度性」が「Xは[Z+Y]がある」構文の性質とどのような関係があるのかは今後の課題としたい。

(22) 彼は[度胸/根性/勇氣/才能/情熱/器量/魅力]がある。

以上で述べた本論文で扱っている複数の構文の間関係をまとめると図1の通りになる。矢印は意味的・構造的に関連づけることができるという意味を表す。また、「構造の連続性」とは、「[XはZ]+Yだ」人魚構文と「Xは[Z+Y]だ」属性叙述文は形式名詞と文法化が進んでいない属性を表す抽象名詞からなる文を両極として、その間に多種多様な用例を含む連続体をなしているということを指す。

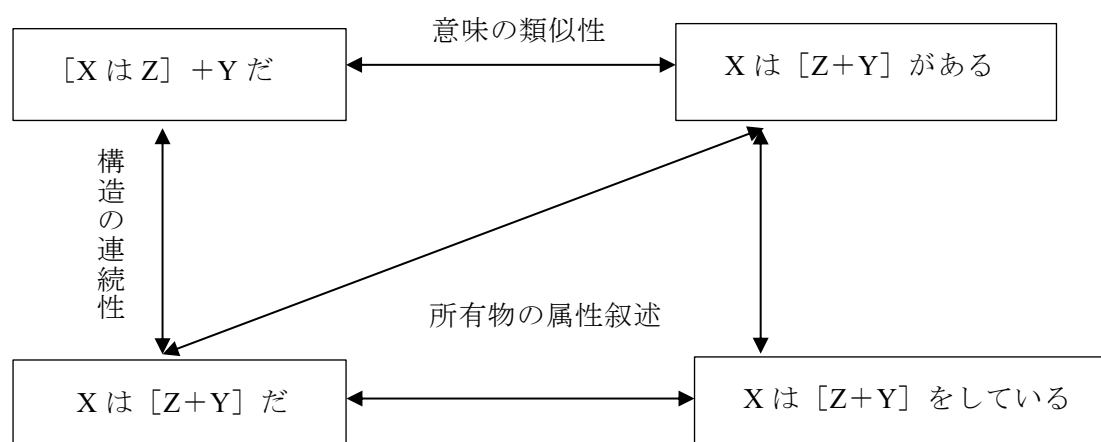


図1 日本語の構文の間関係



## 6.2 中国語の各構文間の関係

本節では、中国語の複数の構文の間の関係を説明する。本論文では、日本語の各構文と対応するものとして、中国語の“X是Z的Y”人魚構文と“X是[Z的Y]”、“X有着Z的Y”属性叙述文、“X有Y+Z”連動文という4つの構文を考察した。それぞれの例として、以下のようなものが挙げられる。

(23) 当事人 是 再 找找 看 其他 工作 的 想法。

当人 COP 改めて 探す みる 別の 仕事 助詞 考え

[当人は別の仕事を探してみる考えだ。]

(24) 他 是 什么 事情 都 要 说出来 的 性格。

彼 COP どんな こと も しようする 口に出す 助詞 性格

[彼はどんなことでも口に出したがる性格だ。]

(25) 他 有着 开朗 的 性格。

彼 ある-DURA 明るい 助詞 体質

[彼は明るい性格をしている。]

(26) 他 有 能力 解决 这个 问题。

彼 ある 能力 解決する この 問題

[彼はこの問題を解決する能力がある。]

この4つの構文も3章、4章、5章で述べたようにそれぞれ独立した構造と意味を持つ。しかしながら、それぞれの構文は日本語と同様に、構造の連続性や意味の類似性によって関連づけることができる。

まず、“X是Z的Y”人魚構文と“X是[Z的Y]”属性叙述文について、3章で説明したように形式だけからみれば、いずれも連体修飾節構造を含むコピュラ文に見えるが、実際には抽象名詞Yの意味タイプにより、構造上以下の2つのタイプに分けられる。

- (I) X 是 Z 的 Y (“是……的 Y” が枠構造をなしている)
- (II) X 是 [Z 的 Y]

(I) タイプでは、抽象名詞 Y がコピュラ “是” と呼応し、“是……的 Y” 枠構造をなしており、独立した文 “XZ” がそこにはめ込まれている。これは独立した文「X は Z」に「Y だ」が付加された日本語人魚構文の構造と並行的に捉えることができるため、本論文ではこの (I) タイプの構造を持つ文を中国語の人魚構文と位置付けた。一方、(II) タイプでは、Y が Z の修飾を受け、それによって得られた “Z 的 Y” 全体がコピュラ “是” の目的語になっている。本論文で扱っている “X 是 [Z 的 Y]” 属性叙述文はこの (II) タイプに当たる。

連体修飾節を含むコピュラ文という点では同じに見えるものの、実際に抽象名詞 Y の性質により、構造の異なるものに分けられるという点において、日本語と中国語は共通している。そして、日本語の「[X は Z] + Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] だ」属性叙述文が明確に区分できないように、中国語の “X 是 Z 的 Y” 人魚構文と “X 是 [Z 的 Y]” 属性叙述文の境界も判然としたものではなく、3 章で述べたように両者どちらの特徴も持ち合わせる中間的なものもある。この意味では、中国語の “X 是 Z 的 Y” 人魚構文と “X 是 [Z 的 Y]” 属性叙述文の関係は日本語の「[X は Z] + Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] だ」属性叙述文の関係と非常に類似している。

ただし、日本語と中国語の間に違いもある。日本語では「[X は Z] + Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] だ」属性叙述文の区分に抽象名詞 Y の文法化の度合いが深く関わっているのに対して、中国語の “X 是 Z 的 Y” 人魚構文と “X 是 [Z 的 Y]” 属性叙述文の区分は抽象名詞 Y の文法化の度合いではなく、抽象名詞 Y の意味タイプと関わっている。このような違いが生じている理由の 1 つとして中国語の抽象名詞は文法化がほとんど進んでいないことが挙げられる。そのため、“X 是 Z 的 Y” 人魚構文には日本語の人魚構文が持っているモダリティ機能も見られない。日中の人魚構文におけるこのような違いは人魚構文と他の構文との関係にも影響を与える。前節で述べたように、日本語の「[X は Z] + Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] がある」はモーダルな意味を表す点において類似性を持つ。しかし、中国語の “X 是 Z 的 Y” 人魚構文とモーダルな意味を表すとされている “X 有 Y+Z” 連動文の間には、日本語のような意味の類似性が見られない。

(27) a. 我们公司 是 进行 民意调查 之后 再 制定 具体计划 的 打算。

我が社 COP 行なう 住民の意向調査 後 改めて 作る 具体的な計画 助詞 予定

[我が社は住民の意向調査後に具体的な計画を作る予定だ。]

b. 我们公司 是 进行 民意调查 之后 再 制定 具体计划 的 一个 打算。

我が社 COP 行なう 住民の意向調査 後 改めて 作る 具体的な計画 助詞 1つ 予定

[我が社は住民の意向調査後に具体的な計画を作るという1つの予定だ。]

(28) 我们公司 有 意向 开发 新能源。

我が社 ある 意向 開発する 新エネルギー

[我が社は新エネルギーを開発する意向がある。]

(27) の“X 是 Z 的 Y”人魚構文における“打算 (予定)”は日本語の人魚構文に用いられる「予定」と異なり、文法化が進んでいない普通の抽象名詞である。その根拠として (27b) のように“打算 (予定)”は数量詞“一个 (1つ)”の修飾を受けられることが挙げられる。一方、(28) の“X 有 Y+Z”連動文における“有意向 (意向がある)”は「～したい／～しよう」というモーダルな意味を表す。したがって、中国語の“X 是 Z 的 Y”人魚構文と“X 有 Y+Z”連動文は日本語の「[X は Z] +Y だ」人魚構文と「X は [Z+Y] がある」のように意味的類似性によって関係づけることができない。

また、5章で説明したように、中国語の“X 有 Y+Z”連動文は条件 Y の存在を前提条件として動作行為 Z を行うという意味を表すため、人物の属性を叙述する“X 是 [Z 的 Y]”と“X 有着 Z 的 Y”とは異なる範疇に属していると考えられる。これは人物の属性叙述に用いられる抽象名詞 Y はほとんど“X 有 Y+Z”連動文に使えないことから窺うことができる。

(29) a. 他 是 不 达 目的 不 罢休 的 性格。

彼 COP NEG 達成する 目的 NEG やめる 助詞 性格

[彼は目的を達成しなければ決してやめない性格だ。]

b. \*他 有 性格 不 达 目的 不 罢休。

彼 ある 性格 NEG 達成する 目的 NEG やめる

[彼は目的を達成しなければ決してやめない性格がある。]

(30) a. 他 有着 出色 的 才华。

彼 ある-DURA 優れた 助詞 才能

〔彼は優れた才能がある。〕

b. \*他 有 才华 写 诗。

彼 ある 才能 書く 詩

〔彼は詩を書く才能がある〕

(29b) (30b) のように、“性格 (性格)” のような普通所有物も、“才华 (才能)” のような非普通所有物も、“X 有 Y+Z” 連動文には用いられない。

要するに、中国語の“X 有 Y+Z” 連動文と“X 是 [Z 的 Y]”、“X 有着 Z 的 Y” 属性叙述文は日本語の「X は [Z+Y] がある」と「X は [Z+Y] だ」、「X は [Z+Y] をしている」のように、人物の属性叙述という観点からは関係づけることができない。また、人物の属性叙述に用いる“X 是 [Z 的 Y]”と“X 有着 Z 的 Y”は日本語の「X は [Z+Y] だ」と「X は [Z+Y] をしている」のように普通所有物の属性叙述の機能を分担しているとは言えない。4章で述べたように、中国語の“X 是 [Z 的 Y]”属性叙述文は成立範囲が極めて制限されており、普通所有物と非普通所有物の区別とは関係がなく、“性格 (性格)”、“体质 (体質)” など極少数の抽象名詞としか共起できない。

(31) (32) のように、“人品 (人柄)” のような普通所有物でも、“胆量 (度胸)” のような非普通所有物でも“X 是 [Z 的 Y]” の Y のスロットに生起することができない。

(31) \*他 是 非常 值得 信赖 的 人品。

彼 COP 非常に 値する 信頼する 助詞 人柄

〔彼は非常に信頼できる人柄だ。〕

(32) \*他 是 敢 违背 上司 命令 的 胆量。

彼 COP AUX 背く 上司 命令 助詞 度胸

〔彼は上司の指示に従わない度胸だ。〕

なぜ中国語の“X 是 [Z 的 Y]”属性叙述文が成立しにくいのか。また、なぜ“性格 (性格)”、“体质 (体質)” など極少数の抽象名詞しか“X 是 [Z 的 Y]” の Y のスロットに生起することができないのか。その一因として中国語のコピュラ文の機能お

よびメトニミーによる意味拡張が働いていることが挙げられると考えられる。

中国語の“A是B”コピュラ文は主に“A=B”の同一関係と、“A<B”の包摂関係を表し、日本語の典型的なコピュラ文「AはBだ」のように主題部Aと説明部Bがさまざまな意味関係によって比較的自由に結合できるわけではない。本論文で扱っている人物の属性を叙述する“X是[Z的Y]”では、XとYは同一関係にも、包摂関係にもないため、成立しにくいのだと考えられる。しかしながら、XとYがメトニミーによる意味拡張で、“X<Y”の包摂関係に近づいていけば、“X是[Z的Y]”の容認度が高くなる。例えば、(33a)では、“他(彼)”と“性格(性格)”は同一関係にも、包摂関係にもないが、(33b)に示すように“的人(～の人)”を加えるという構造的拡張を許容するため、言い換えれば、(33a)全体が「彼は～人だ」という“X<Y”の包摂関係に近いものとして再解釈されることができると、容認されているのである。ここではメトニミーによる意味拡張が働いていることが挙げられる。

(33) a. 他 是 那种 容易 急躁 的 性格。

彼 COP そのような しやすい 焦る 助詞 性格

[彼はああいう焦りやすい性格だ。]

b. 他 是 那种 容易 急躁 的 性格 的 人。

彼 COP そのような しやすい 焦る 助詞 性格 助詞 人

[彼はああいう焦りやすい性格の人だ。]

一方、“人品(人柄)”、“胆量(度胸)”などは“性格(性格)”のように、メトニミーによる意味拡張で、“X<Y”の包摂関係に近いものとして再解釈されることができないため、“X是[Z的Y]”を成り立たせることができない。

(34) \*他 是 非常 值得 信赖 的 人品 的 人。

彼 COP 非常に 値する 信頼 助詞 人柄 助詞 人

[彼は非常に信頼できる人柄の人だ。]

(35) \*他 是 敢 违背上司 命令 的 胆量 的 人。

彼 COP AUX 背く 上司 命令 助詞 度胸 助詞 人

[彼は上司の指示に従わない度胸の人だ。]

また、“X 有着 Z 的 Y” 属性叙述文は普通所有物と非普通所有物を問わず、どちらとも共起することができる。

(36) 他 有着 开朗 的 性格。

彼 ある-DURA 明るい 助詞 体質

[彼は明るい性格をしている。]

(37) 他 有着 出色 的 才华。

彼 ある-DURA 優れた 助詞 才能

[彼は優れた才能がある。]

(36) (37) のように、“X 有着 Z 的 Y” の Y のスロットには“性格 (性格)” のような普通所有物でも、“才华 (才能)” のような非普通所有物でも、どちらも問題なく生起することができる。このことは日本語と中国語で、普通所有物と非普通所有物を別個のカテゴリーとして分けるか分けないかという点において、認識の仕方が異なっていることを示唆している。

以上をまとめると、日本語と中国語で対応する構造を持つと考えられる構文間の関係は一様に捉えることができない。中国語の構文同士を日本語の構文同士のように関係づけることができない理由に、日中抽象名詞の文法化程度の違い、コピュラ文の制約の違い、また所有物の認識の仕方の違いなどが大きく関わっていると考えられる。

## 第 7 章 結論

本章では、本論文の成果をまとめ、本研究の意義および今後の課題について述べる。まず、7.1 節で、第 1 章で設定した課題に対して、どのような答えが与えられたのかを示す。続いて、7.2 節で構文論的観点から日本語と中国語の抽象名詞を考察した本研究の意義を述べる。最後に 7.3 節で本論文の枠組みにおいて今後発展的に取り組むべき問題について述べる。

### 7.1 本論文のまとめ

まず、本論文の第 1 章で設定した 3 つの研究課題に対する本論文の考察の結果をまとめる。

- I. 抽象名詞の性質、特に抽象名詞のタイプごとに異なる固有の特性が、構文の構造や構文の意味にどのように影響するのか。
- II. 構文の意味や構文の構造が構文に入る抽象名詞の選択制限および抽象名詞と他の構成要素間の文法的・意味的關係にどのように影響するのか。
- III. 構造が異なる類義表現間にどのような意味の差異があるのか。また、対応する構造を持つと思われる日本語と中国語の複数の構文は構文機能や構文の成立条件にどのような違いがあるのか。

抽象名詞の働きと構文の働きが相互に作用するため、どの構文にも I と II の両面があると考えられるが、構文によって抽象名詞が構文に与える影響がより大きく現れるものと、構文が抽象名詞に与える影響がより大きく現れるものがある。以下では、いずれの作用がより大きいかによって、前者と後者に分けて説明する。

課題 I に対する考察の結果

課題 I に対しては、日本語と中国語の人魚構文という特定の構文の考察結果から答

える。角田（2011,2012）で言及されている日本語の人魚構文は実際には抽象名詞の文法化の度合いにより、構造上「 $X$ は $Z$ 」+ $Y$ だ」と「 $X$ は $[Z+Y]$ だ」の2類に分けられる。前者は抽象名詞「 $Y$ 」の文法化が進み、「 $Y$ だ」がモダリティ要素として独立した文「 $X$ は $Z$ 」に付加されている人魚構文であり、後者は抽象名詞「 $Y$ 」の文法化が進んでおらず、「 $Y$ 」が命題の内部に留まり、「 $Z$ 」の修飾対象となる名詞述語文である。一方、日本語と比べ、中国語の抽象名詞は文法化がほとんど進んでいないため、人魚構文が日本語ほど発達していない。ただし、抽象名詞の意味タイプにより、人魚構文として成立する場合もある。それは意志・計画の意味を表す抽象名詞からなる文である。この一類の文は従来中国語研究で連体修飾節を含むコピュラ文（“ $X$ 是 $Z$ 的 $Y$ ”）と見なされていたが、主題化、関係節化および数量詞との共起の面で連体修飾節を含むコピュラ文と異なる振る舞いをしており、逆に日本語の人魚構文と似ている特徴を持っている。また、統語構造上も、独立した文“ $XZ$ ”に“是……的 $Y$ ”が枠構造としてはめ込まれていると分析することができ、独立した文「 $X$ は $Z$ 」に「 $Y$ だ」が付加された日本語人魚構文の構造と並行的に捉えることができる。要するに、抽象名詞の文法化の度合い、または抽象名詞の意味タイプによって、従来連体修飾構造を含むコピュラ文と見なされていたものは、構造の異なる2つの構文に分けられるということである。

## 課題Ⅱに対する考察の結果

課題Ⅱに対しては、日本語と中国語の連体修飾構造を含む属性叙述構文および中国語の“有”連動文と日本語の「ある」構文の考察結果から回答する。人物の属性を叙述するのに、日本語では、「 $X$ は $[Z+Y]$ をしている」（e.g. 彼はやさしい性格をしている）と「 $X$ は $[Z+Y]$ だ」（e.g. 彼はやさしい性格だ）という2つの表現形式がある。それに対応する中国語の表現は、“ $X$ 有着 $Z$ 的 $Y$ （e.g. 他有着温柔的性格）”と“ $X$ 是 $Z$ 的 $Y$ （e.g. 他是那种温柔的性格）”である。これらはいずれも人物の属性を述べることができるが、それぞれの意味は必ずしも同じではない。

「 $X$ は $[Z+Y]$ をしている」は人物の属性を話し手の観察に基づき述べる機能を持つ。このような構文機能は構文に入る名詞 $Y$ に意味的制約をかけている。すなわち、名詞 $Y$ のロットには視覚的に観察できる名詞（具体名詞）が生起しやすいが、視覚的に観察できない名詞（抽象名詞）が生起しにくい。それに対して、「 $X$ は $[Z+Y]$



だ」は言及対象の属性に対して、話し手が主体的に評価するという意味を表す。そのため、話し手の評価が内在する抽象的な名詞がこの構文に入りやすい。

一方、中国語の“X 有着 Z 的 Y”は言及対象の複数の属性を並列させながら、大きな視野から小さな対象、外観から内面にズームインすることによって人物の属性を描写する機能を持つ。そのような構文機能は名詞 Y そのものに直接意味制約をかけていないが、名詞 Y につく修飾語 Z に制限をもたらす。すなわち、名詞 Y を修飾する Z は描写的な成分でなければならない。それに対して、“X 是 Z 的 Y”は談話の中で言及対象の属性を確認する機能を持つ。その構文機能の制約の結果として、修飾語を伴う属性名詞 Y は文脈（共有知識を含む）と関連性を持ち、かつ話し手と聞き手の間で確認できるようなものでなければならない。このようなことから、構文の意味は構文に入る名詞 Y、更には名詞にかかる修飾語にも選択制限をもたらしていることが分かる。

また、構文の意味は抽象名詞と他の構成要素間の文法的・意味的關係にも影響を与える。中国語の“有+Y+Z”連動文では、構文全体が Y の存在を前提条件として動作行為 Z を行うという意味を表す。そのため、文法的に Z は動作行為を表す動詞（句）でなければならない、動作行為 Z を行う複数の前提条件、つまり複数の“有+Y”が並列的に現れることが可能であり、動作行為を表す Z にアスペクト助詞“了”を付加し、完了した行為を表すこともできる。また、“有+Y”は動作行為 Z を行う条件の存在を表すため、言い換えれば、条件 Y が存在すれば、動作行為 Z は実現可能だと解釈することができるため、先行研究で言われているように、抽象名詞“Y”が“有”と結びつくと、意味的に助動詞のように事態が実現する可能性や必要性などのモーダルな意味を表すことができる。

最後に、構文の構造は抽象名詞の文法的解釈にも影響を与える。日本語の「[Z+Y]がある」においては、Y は前方の Z の修飾を受けながらも、動詞「ある」とも隣接しているため、こうした統語環境が、「Y がある」の文法化を可能にしている。一方、これに対応する中国語の“有+Z 的+Y”においては、SVO 語順をとり、かつ修飾語が被修飾語に先行するという中国語特有の語順のために、修飾語の“Z (的)”は“有”と Y の間に生起することになる。言い換えれば、Y が動詞“有”と離れる位置にあるため、“有+…Y”の文法化が起こりにくいのである。

### 課題Ⅲに対する考察の結果

上述の人物の属性叙述構文に対する説明から分かるように、同じく人物の属性を叙述する表現であっても、表現形式が異なれば表される意味も異なる。「X は [Z+Y] をしている」によって表す人物の属性には必ず話し手の観察が入っているが、「X は [Z+Y] だ」によって表す属性には話し手の評価が含まれている。一方、中国語の“X 有着 Z 的 Y”は人物の複数の属性を並列させながら属性を描写する機能を持つのに対して、“X 是 Z 的 Y”は人物の属性を話し手と聞き手の間で確認する機能を持つ。このことから、日本語と中国語では、対応する構造を持っていても、構文の意味（構文機能）は必ずしも同じではないことが分かる。反対に、異なる構造を持つ日本語と中国語の構文が、同様な意味を表す場合もある。例えば、中国語の“有+Y+Z”連動文と日本語の「[Z+Y] がある」連体文は構造が異なるにも関わらず、どちらも目的内容 Z を実現するための Y があると解釈することができる。また、日本語と中国語の人魚構文に対する考察から明らかになったように、対応する構造を持つ日本語と中国語の構文であってもその成立条件は必ずしも同じではない。日本語の人魚構文の成立は文末の抽象名詞の文法化の度合いに強く影響される傾向があるが、中国語の人魚構文では、このような傾向が見られない。むしろ文末の抽象名詞の意味タイプと関わっている。

## 7.2 本研究の意義

日本語と中国語の抽象名詞の構文論的対照研究には、次のような意義があると考えられる。まず、日中抽象名詞の対照研究および日中抽象名詞の体系的な研究への貢献という点が挙げられる。抽象名詞と言っても、日本語と中国語の抽象名詞の内実は必ずしも同じではない。例えば、日本語の抽象名詞の中で重要な役割を果たしている形式名詞は中国語には存在しない。また、日本語と中国語で同じ形式（例えば「意向」「性格」など）を持つにも関わらず、文法的振る舞いが異なる抽象名詞が多く存在する。このような日中抽象名詞の特徴や個々の抽象名詞の使い方の相違を具体的に記述した本研究は、両言語の抽象名詞の対照研究に役立つと考えられる。

そして、従来の日中抽象名詞の研究に欠けていた構文論的観点から、抽象名詞の意味・機能を考察したという点で、日中抽象名詞のより多面的な文法記述や抽象名詞の

体系的研究にも貢献できると考えられる。従来の抽象名詞の研究は、日本語でも中国語でも語彙論的アプローチから抽象名詞の意味を分析するものが多く、構文論的アプローチから抽象名詞の特徴と構文の成立条件および構文の意味を関連づける考察が十分なされていなかった。(1)と(2)のように、使われる抽象名詞が同じであっても、用いられる形式が異なれば、その振る舞いや意味も異なる。なぜ次の(1b)と(2b)が成立しないのかは、「気」と「性格」の語彙的意味だけでは説明しきれず、それぞれの抽象名詞が置かれた構文の特徴から説明しなければならない。つまり、抽象名詞「気」は(1a)の人魚構文に用いられる場合、「だ」と結合し文末に位置すると、モダリティ要素のように「文」に付加されることになる。そのため、その「文」は否定文でもよい。一方、(1b)の「～がある」に用いられる場合、「ガ格名詞」の存在を表すため、その「ガ格名詞」を否定、つまり不存在にすることができない。同様に、抽象名詞「性格」が(2a)の“有”構文に用いられる場合、“溫柔(やさしい)”のような二音節形容詞一語だけの修飾を受けられるが、(2b)の“是”構文に用いられる場合、それができないという点にも“有”構文と“是”構文の構文機能が関わっている。既に述べたように、“有”構文は人物の属性を並列的に「描写」する機能を持つため、“溫柔(やさしい)”のような二音節描写的修飾語との相性がよい。一方、“是”構文は談話の中で、話し手と聞き手の間に人物の属性を「確認」する機能を持つため、聞き手が文脈から認識できるような属性内容が必要で、“溫柔(やさしい)”のような既存の属性のタイプを表すものとの相性が悪いのだと考えられる。

- (1) a. 太郎は就職しない気だ。  
       b. \*太郎は就職しない気がある。
- (2) a. 他 有着 溫柔 的 性格。  
       彼 ある-DURA やさしい 助詞 性格  
       〔彼はやさしい性格をしている〕
- b. \*他 是 溫柔 的 性格。  
       彼 COP やさしい 助詞 性格  
       〔彼はやさしい性格だ。〕

したがって、構文論的観点から抽象名詞を考察した本研究は従来の意味分析が中心

になっていた抽象名詞研究の不足を補完しうるものとして、抽象名詞のより多面的な文法記述に貢献できると言える。

また、抽象名詞を分析対象とした本論文は構文研究にも貢献できると考えられる。Goldberg (1995) もそうであるが、これまでの構文研究では、動詞の意味が構文の成立に影響する点は重要視されているが、名詞、抽象名詞の意味的な役割の重要性はほとんど指摘されていない。しかし、本論文が明らかにしたように、抽象名詞の意味も構文の構造や成立条件と密接な関わりを持っている。例えば、抽象名詞の文法化の度合いや意味タイプが日本語と中国語の人魚構文の成立に大きな影響を与えている。また、抽象名詞が表す属性が普通所有物か、非普通所有物かによって、構文の成立が異なるといったことが本論文で明らかになった。この意味では、本研究の研究成果は、構文研究に対して、動詞の意味にとどまらず、名詞、抽象名詞の意味といった観点からの分析も不可欠であることを提示するものでもある。

そのほかに、本論文において、これまでの日中対照研究であまり言及されていなかった、または専一的に論じられていなかったコピュラ文と所有・存在文を取り上げ、構文ごとに日中の相違および特徴を対照的に考察したことは、個別の構文研究および日中対照研究にも貢献できると考えられる。例えば、人魚構文は日本語でも中国語でもこれまでの研究で連体修飾節を含むコピュラ文と見なされることが多かった。本論文で明らかにしたように、抽象名詞の文法化の度合いまたは抽象名詞の意味タイプにより、普通のコピュラ文と大きく異なる文法的な振る舞いをしているものが確かにあり、このコピュラ文から拡張された人魚構文を取り出して個別に研究する必要があると考えられるが、この点は従来の研究、特に中国語の研究ではほとんど言及されていなかった。中国語の人魚構文の特徴について、今後、日本語だけでなく、他言語における人魚構文とも対照し、更に検証する必要があると思われるが、その特異性に注目した本研究は問題提起としても意義があると考えられる。

また、日本語で文の基本的な類型とされている「属性叙述」に関して、これまで二重主語文（「彼は目が青い」）や～ヲシテイル構文（「彼は青い目をしている」）など多くの研究の蓄積がなされているが、同じ属性が複数の構文で成立する場合に、それらの構文の使い分けを詳細に考察する研究は十分になされていなかった。例えば、本論文で扱っている「Xは[Z+Y]だ」と「Xは[Z+Y]をしている」属性叙述文の差異を言及するものは管見の限りでは見当たらなかった。それを更に中国語の属性叙述文

と対照させた本論文は属性叙述における構文間の体系的な研究および対照的研究に貢献できると考えられる。

最後に、従来モダリティ論から言及されていた日本語の「Xは[Z+Y]がある」構文と中国語の“有+Y+Z”連動文について、本論文ではこれまでの意味中心のアプローチと異なり、文法機能の観点からそれぞれの構文における「Yがある」と“有+Y”を真のモダリティと比較し、「Yがある」と“有+Y”がモダリティではないことを明らかにした。これは両構文の研究を更に深めていくことにも、日本語と中国語のモダリティ研究の発展にも意義があると考えられる。

### 7.3 今後の課題

本節では本論文で残っている課題について述べる。まず、人魚構文と連体修飾構造を含むコピュラ文どちらの特徴も併せ持つ中間的なものの性質および位置づけについて、本論文では詳しく考察することができなかった。今後両者の間に位置する抽象名詞がどのようなものであるかを1つ1つ記述した上で、この中間的なものの位置づけを明らかにする必要があると考えられる。

次に、4章で扱っている人物の属性叙述文について、本論文では「Xは[Z+Y]をしている」と「Xは[Z+Y]だ」およびそれに対応する中国語の“X有着Z的Y”と“X是Z的Y”のみを考察した。しかし、6章で述べたように、「Xは[Z+Y]をしている」、「Xは[Z+Y]だ」と体系的に捉えるべき構文としては、ほかに「Xは[Z+Y]がある」などもある。構文間のすみ分けや構文間の多様な関係を明らかにするため、今後これらの構文を考察する必要もある。中国語では、人物の属性叙述において“X是Z的Y”の成立範囲が狭いことを指摘したが、この点は中国語で二重主語文が発達していることと無関係ではない。そのため、今後それを“X有着Z的Y”と比較する必要もある。

また、3章、4章、5章の分析からも分かるように、抽象名詞は個々の語の性質、または意味タイプによって文法機能に大きな違いがあるため、個々の語やタイプごとに記述・分析する必要があると考えられる。本論文では、数多くの抽象名詞の中のごく一部のもののみを対象としている。今後、抽象名詞の全面的な文法的記述を実現する

ため、より多くの抽象名詞を詳細に分析する必要がある。また、抽象名詞と構文の相互作用のあり方をより明確にするため、今後コピュラ文と所有・存在文にとどまらず、構文の範囲を広げていく必要がある。これは構文間の関係の検討や構文ネットワークの記述にも必要不可欠であると考えられる。

## 参考文献

- 青木博史 (2010) 「名詞の機能語化—形式名詞を中心に—」『日本語学』29 (11), pp.40-47
- 秋元実治 (2014) 『増補 文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 井上優 (2010) 「体言締め文と「いい天気だ」構文」『日本語学』29 (11), pp.58-67
- 大島資生 (1989) 「「命題補充の連体修飾構造」について」『日本語研究』11, pp.61-77
- 大島資生 (1991) 「因果関係を表す連体修飾節構造—「因果名詞」と「感情名詞」—」『都大論考』28, pp.11-27
- 大島資生 (1997) 「日本語連体修飾節構造における修飾節と主名詞の意味関係—「可能性」類名詞を中心に—」『第2回国立国語研究所国際シンポジウム報告書 新しい言語理論と日本語』, pp.119-132
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』 ひつじ書房
- 大塚望 (2018) 『現代日本語における多機能動詞研究 —「する」と「ある」—』筑波大学 博士論文
- 大河内康憲 (1997) 『中国語の諸相』 白帝社
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店
- 小野秀樹 (2008) 『統辞論における中国語名詞句の意味と機能』 白帝社
- 影山太郎 (2012) 『属性叙述の世界』 くろしお出版
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1996) 『言語学大辞典』(第6巻) 三省堂
- 川島拓馬 (2016) 「「文末名詞文」の構文的位置付け」『語文論集』31, pp.13-30
- 川島拓馬 (2017) 「構造と分類から見た「文末名詞文」の位置付け」『筑波日本語学研究』21, pp.53-78
- 北村雅則 (2007) 「モノダ文における述語名詞モノの役割—文末名詞文の構造との関連性—」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』 pp.221-242, ひつじ書房
- 木村英樹 (2012) 『中国語文法の意味とカタチ —「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』 白帝社
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, pp.5-26

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- 笹栗淳子 (2004) 「いわゆる「形式名詞」に関する研究ノート—構造的特徴に焦点をあてた分類について」 『純心人文研究』 10, pp.183-195
- 定延利之 (2006) 「心内情報の帰納と管理 —現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」 中川正之・定延利之編 『言語に現れる「世界」と「世間』』 pp.167-192, くろしお出版
- 佐藤琢三 (2003) 「「青い目をしている」型構文の分析」 『日本語文法』 3 (1), pp.19-34
- 佐藤琢三 (2004) 「「模様」の報告用法について」 『国語学』 55 (4), pp.73-84
- 佐藤琢三 (2006) 「名詞カタチの文末用法と説明の機能」 益岡隆志他編 『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』 pp.137-153, くろしお出版
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』 開拓社
- 澤田浩子 (2003) 「所有物の属性認識」 『月刊言語』 32 (11), pp.54-60
- 澤田浩子 (2006) 「描写に関する個とステレオタイプ—談話から見る中国語の「存現文」—」 中川正之・定延利之編 『言語に現れる「世界」と「世間』』 pp.79-103, くろしお出版
- 澤田浩子 (2010) 「「彼は親切な性格だ」と「彼は性格が親切だ」—中国語から日本語を考える—」 砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹編 『日本語教育研究への招待』 pp.251-271, くろしお出版
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」 『国語学』 159, pp.75-88
- 新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』 ひつじ書房
- 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ：現代日本語における記述的研究』 くろしお出版
- 高見健一・久野暲 (2006) 「「ている」構文：「桜の花が散っている」はなぜ曖昧か」 高見健一・久野暲 (著) 『日本語機能的構文研究』 pp.101-127, 大修館書店
- 高橋太郎 (1959) 「動詞の連体修飾法」 『ことばの研究 (国立国語研究所論集)』 1, pp.169-182
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」 『日本語学』 3 (12), pp.18-39, 明治書院



- 高橋太郎・屋久茂子 (1984) 「「～がある」の用法 — (あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い—」『国立国語研究所報告 (『研究報告集』)』 79 (5), pp.1-43
- 竹島永貢子 (1993) 「「有・N・VP」と「有 VP 的 N」—日本語からの考察—」『中国語学』 240, pp.41-50
- 谷守正寛 (2014) 「体言締め文における主題と文末名詞との関係について」『言語と文化』 18, pp.157-175
- 陳力衛 (1992) 「「有+N+VP」文のNの性格について」『言語と文化』 5, pp.49-69
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文集』 pp.139-161, ひつじ書房
- 角田太作 (2011) 「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』 1, pp.53-74
- 角田太作 (2012) 「人魚構文と名詞の文法化」『国語研プロジェクトレビュー』 7, pp.3-11
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』 12, pp.42-57
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版
- 永井宥 (2017) 「日本語のエビデンシャルティ：「-ている」を事例に」『言語科学論集』 23, pp.1-18
- 西山佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について—飽和名詞と非飽和名詞—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 22, pp.169-188
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房
- 仁田義雄 (1981) 「可能性・蓋然性を表す疑似ムード」『国語と国文学』 58 (5), pp.88-102
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 仁田義雄 (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』 ひつじ書房
- 仁田義雄・益岡隆志 (1989) 『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 野田時寛 (2006) 「複文研究メモ (7) —文末名詞をめぐって—」『人文研紀要』 56, pp.275-299

- 野田春美 (1995) 「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為的な用法—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』 pp.253-262, くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」新日本語文法選書 1』くろしお出版
- 野田尚史 (2004) 「主題の対照に必要な視点」益岡隆志編『主題の対照 (シリーズ言語対照<外から見る日本語 5>)』 pp.193-213, くろしお出版
- 野村剛史 (2003) 「モダリティ形式の分類」『国語学』 54, pp.17-31
- 野村剛史 (2014) 「名詞述語文の分類」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』 21, pp.69-82
- 原由起子 (1991) 「“有・N・VP” 構造に於ける N と VP の関係」『中国語学』 238, pp.63-71
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」益岡隆志編『主題の対照 (シリーズ言語対照<外から見る日本語 5>)』 pp.3-17, くろしお出版
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』 pp.3-18, くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 『叙述類型論』くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』 pp.57-120, くろしお出版
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店
- 森山卓郎・富永英夫 (2015) 「「属性シテイル構文」の構文文法論的考察」『認知言語学研究』 1, pp.156-175
- 矢澤真人 (2014) 「抽象名詞主題文に関わる日中対照」『プレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」「祈り」プロジェクト 第三回ワークショップ報告書』, pp.1-16
- 山泉実 (2013) 「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 pp.11-27, ひつじ書房
- 儲澤祥 (2000) 《名詞及其相关结构研究》湖南人民出版社
- 丁声树 (1961) 《现代汉语语法讲话》商务印书馆

- 高增霞 (2006) 《现代汉语连动式的语法化视角》中国档案出版社
- 古川裕 (1989) 〈“的<sub>s</sub>字结构及其所能修饰的名词”〉《语言教学与研究》1, pp.10-25
- 刘春卉 (2008) 《现代汉语属性范畴研究》四川出版集团, 巴蜀书社
- 刘丹青 (2011) 〈“有”字领有句的语义倾向和信息结构〉《中国语文》2, pp.99-109
- 刘顺 (2003) 《现代汉语名词的多视角研究》学林出版社
- 刘月华·潘文娉·故鞞 (2001) 《实用现代汉语语法》商务印书馆
- 林芝羽 (2013) 〈“有+NP+VP”和“有+VP+的+NP”结构的差异探析〉《言语情报科学》11, pp.87-103
- 马庆株 (1988) 〈能愿动词的连用〉《语言研究》1, pp.18-28
- 彭利贞 (2005) 《现代汉语情态研究》中国社会科学出版社
- 邵敬敏 (2008) 〈“连A也/都B”框式结构及其框式化特点〉《语言科学》4, pp.352-358
- 沈家煊 (2016) 〈“是”“有”大分野〉《名词和动词》pp.333-364, 商务印书馆
- 王冬梅 (2014) 〈从“是”和“的”、“有”和“了”看肯定和叙述〉《中国语文》1, pp.22-34
- 王珏 (2001) 《现代汉语名词研究》华东师范大学出版社
- 徐烈炯·刘丹青 (1998) 《话题的结构与功能》上海教育出版社
- 许艳平 (2013) 《现代汉语属性名词语义特征研究》武汉大学出版社
- 袁毓林 (1992) 〈现代汉语名词的配价研究〉《中国社会科学》3, pp.205-223
- 张国宪 (2006) 《现代汉语形容词功能与认知研究》商务印书馆
- 赵春利·石定栩 (2011) 〈主谓间“有+NP / VP”的句法语义研究〉《语言学论丛》44, pp.106-119
- 赵元任 (1968) 《汉语口语语法》(吕叔湘译), 商务印书馆
- 朱德熙 (1986) 〈变换分析中的平行性原则〉《中国语文》2, pp.81-87
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistic 1. Cambridge, Mass.: Dept. of Linguistics and Philosophy, MIT.
- Fillmore, Charles and Paul Kay (1993) *Construction Grammar Coursebook*. University of California.
- Fillmore, Charles, Paul Kay and Catherine O'Connor (1988) *Regularity and Idiomaticity in*

- Grammatical Constructions: The Case of Let Alone. *Language* 64, pp.501-538
- Goldberg, Adele, Eva (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳 (2001) 『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』研究社)
- Kay, Paul and Charles Fillmore (1999) Grammatical Constructions and Linguistic Generalizations: The What's X doing Y? Construction. *Language* 75 (1) , pp.1-33
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- McCarthy, Michael (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge University Press. (安藤貞雄・加藤克美訳 (1995) 『語学教師のための談話文析』大修館書店)
- Ono Hideki (2013) Mermaid Construction in Mandarin Chinese. Tasaku Tsunoda(ed.) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Noun*. pp.677-679, National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Palmer, Frank Robert (1986) *Mood and Modality*. Cambridge University Press.
- Palmer, Frank Robert (1990) *Modality and the English Modals*. London: Longman.



また、具体的な調査内容は下記の通りである。

**日本語のアンケート調査内容：**

- ( ) 1. 弥生さんは自分のことを語らない内気な性格だ。
- ( ) 2. この車は時速 300 キロで走る頑丈な構造だ。
- ( ) 3. 彼は呑気な質(たち)をしている。
- ( ) 4. 彼は呑気な質(たち)だ。
- ( ) 5. 台風は来るかもしれないか？
- ( ) 6. 多分台風は来る {可能性／おそれ} がある。
- ( ) 7. 多分台風は来ることがある。
- ( ) 8. 多分台風は来る {だろう／かもしれない}。
- ( ) 9. 彼女は母に対してすら海外に留学したいと言えない性格をしている。
- ( ) 10. 彼女は母に対してすら海外に留学したいと言えない性格だ。

【<連続殺人犯逮捕>の顔写真付きの記事を一目見て発話する場面】で、11 と 12 の文の自然さを判断してください。

- ( ) 11. この犯人は残忍な性格をしている。
- ( ) 12. この犯人は残忍な性格だ。

【上の記事に出ている殺人犯に関する詳しいプロファイリングを見た上で発話する場面】で、13 と 14 の文の自然さを判断してください。

- ( ) 13. この犯人は残忍な性格をしている。
- ( ) 14. この犯人は残忍な性格だ。

【太郎の発表を聞いて独り言を言う場面】で、15 と 16 の文の自然さを判断してください。

- ( ) 15. 太郎は細かいところに気を配れる性格をしている。
- ( ) 16. 太郎は細かいところに気を配れる性格だ。

中国語のアンケート調査内容：

- (1) a. 我们公司是进行民意调查之后再制定具体计划的打算。( )  
b. 具体计划，我们公司是进行民意调查之后再制定的打算。( )
- (2) a. 我是公司的名字也使用“证券公司抹布”的打算。( )  
b. 公司的名字，我是也使用“证券公司抹布”的打算。( )
- (3) a. 当事人是再找找看其它工作的想法。( )  
b. 其它工作，当事人是再找找看的想法。( )
- (4) a. 他就是以权谋财的想法。( )  
b. 以权谋财的想法的人很多。( )
- (5) a. 我当时就是被糖弹打中的感觉。( )  
b. 被糖弹打中的感觉的出现让我失去了自我。( )
- (6) a. 他完全是教训我的口吻。( )  
b. 教训我的口吻的人是个不懂礼貌的后辈。( )
- (7) a. 我也是说了就会干到底的性格。( )  
b. 说了就会干到底的性格的人并不多见。( )
- (8) a. 很多青少年是易成瘾的体质。( )  
b. 易成瘾的体质的人最好不要抽烟。( )
- (9) a. 这个地方是急缺医生的状况。( )  
b. 急缺医生的状况的改善让当地人非常开心。( )
- (10) 我们公司是一个进行民意调查之后再制定具体计划的打算。( )
- (11) 当事人是一个再找找看其他工作的想法。( )
- (12) 他是[棱角分明的五官( ) / 辨识度很高的脸( ) / 能看穿人心的眼睛( )  
/ 四处流浪的命运( )]。
- (13) 他有着[什么事情都要说出来的性格( ) / 怎么吃都不会胖的体质( )]。
- (14) 他是[开朗的性格( ) / 强健的体质( )]。
- (15) 他是[那种开朗的性格( ) / 那种强健的体质( )]。
- (16) 黄阳光来自广西桂林，童年时因误撞高压电线而失去双臂。但他的确人如其名，虽然无臂，却{a.有着阳光一般开朗的性格( ) / b.是阳光一般开朗的性格( )}。他不仅能生活自理，还能做许多田里的事，甚至还能用双脚编织。生活中的黄阳光和舞台上的黄阳光一样让人感动。

(17) 黄铁是革命烈士黄负生的女儿，自幼由陈潭秋、恽代英等抚养长大……黄铁是个刚直不阿的女性，{a.有着倔强的性格（ ） / b.是那种倔强的性格（ ）}，面对邪恶，她没有屈服。尽管当时环境十分恶劣，重病缠身，但她置个人安危于不顾，一次又一次地给党中央、云南省委写信。

(18) 关于阿绿父亲的事，阿绿说：“他可不是坏人。虽然有时说话过分得人气岔。不过基本上是个老实人，而且真心爱我母亲。他以自己的生活方式活到今天，尽避性格软弱，没有生意头脑，人缘也不好，但是比起周围那些满口谎言，处事圆滑，投机取巧的家伙，他算非常正经的了。”阿绿接着说：“{a.我也是说了就会干到底的性格（ ） / b.我也有倔强的性格（ ）}，所以时常跟父亲吵架。不过，他绝不是坏人。”

(19) “阿巧姐，你跟宁波人打过牌没有？”

“当然打过。”

“有没有在这种船上打过？”

“这种船我还是第二次坐。”阿巧姐说：“麻将总是麻将；船上岸上有啥分别？”

“这种麻将要记性好。”

阿巧姐认为萧家骥无须关照，“打麻将记性不好，上下家出张进张都弄不清楚，这还打什么？”听阿巧姐这么一说，萧家骥不便再说下去了。等拉开一张活腿小方桌，分好筹码，只见船老大将一系在舱顶上的绳子放了下来；拿只竹篮挂在绳端的钩子上，位置恰好悬在方桌正中，高与头齐，伸手可及，却不知有何用处。{a.阿巧姐也是争强好胜的性格（ ） / b.阿巧姐也有着争强好胜的性格（ ）}，一物不知，引以为耻，所以不肯开口相问；反正总有用处，看着好了。

なお日本語と中国語の母語話者の出身、年代などの詳しい情報は表 1、表 2 の通りである。



表 1 日本語の母語話者に関する情報

話者 \ 情報	出身地	年代	性別	職業
1	兵庫	30代	男性	公務員
2	秋田	30代	女性	研究員
3	佐賀	40代	女性	事務職
4	千葉	30代	女性	会社員
5	徳島	30代	男性	会社員
6	神奈川	20代	女性	大学院生
7	香川	40代	女性	教員

表 2 中国語の母語話者に関する情報

話者 \ 情報	出身地	年代	性別	職業
1	北京	30代	男性	会社員
2	北京	30代	女性	教員
3	黒龍江	30代	女性	会社員
4	黒龍江	30代	女性	会社員
5	黒龍江	30代	女性	会社員
6	黒龍江	30代	男性	事務職
7	山東	30代	女性	教員

# 各章と既発表論文および口頭発表との関係

## 第1章 序論

新規執筆

## 第2章 先行研究と本論文の立場

新規執筆

## 第3章 日本語と中国語の人魚構文

何秋林 (2018) 「中国語に人魚構文はあるか—日本語から中国語を考える—」

2018 年第 10 回漢日対比語言学研究会

何秋林 (2019) 「中国語に人魚構文はあるか—日本語の人魚構文を手掛かりとして—」『日中言語対照研究論集』21, pp.59-75, 白帝社

## 第4章 日本語と中国語の連体修飾構造を含む属性叙述構文

何秋林 (2019) 「日本語と中国語における性格類の属性表現について」第 43 回中国語文法研究会

何秋林 (2020) 「日本語と中国語の「連体修飾語+抽象名詞」を含む属性叙述構文について」国立国語研究所 Prosody & Grammar Festa 4

何秋林 (2020) 「属性叙述句「XはYをしている」と「XはYだ」」『漢日語言対比研究論叢』11, pp.222-233, 浙江工商大学出版社

何秋林 (2020) 「日本語と中国語の連体修飾構造を含む属性叙述構文」投稿予定

## 第5章 日本語の「ある」構文と中国語の“有”連動文

何秋林 (2017) 「“有 NP-VP”における“有 NP”の機能と意味—助動詞との比較から—」『言語学論叢』オンライン版第 10 号, pp.84-99

## 第6章 構文間の関係

新規執筆

## 第7章 結論

新規執筆